

出会いへの 挑戦



出会いへの挑戦

ジェリー・サンディツジ著

国際聖書通信学院

CHALLENGE TO ENCOUNTER

by

Jerry Sandidge

©1986 All Rights Reserved

International Correspondence Institute

Brussels, Belgium

D/1986/2145/20

EV 4000 - JA

目 次

序言	5
著者序文	8
第1課：いかにして確実なものを知り得るか	15
第2課：神はいるか	49
第3課：イエスについて	85
第4課：聖書は神の言葉か	123
第5課：キリスト教経験は妥当か	159

序 言

ICI（国際聖書通信学院）ではこのたび、クリスチャンがいかにして哲学と神学から生じるいくつかの問題に知的にアプローチできるかを知る上で助けになるようなこのコースを用意しました。著者は真理の性格、神の存在、イエス・キリストの主張、聖書の権威を論じています。その際、著者は、キリスト教は理解できるものではあるが、単なる知的同意以上のものである、と提言しています。キリスト教とはイエス・キリストとの出会いであり、イエス・キリストへの明け渡しです。あなたはこのコースを本として読むことも、通信講座として勉強することもできます。ICIの教師は喜んであなたのお手伝いをします。ICIの住所は裏面にのっています。

著者のジェリー・サンディッジは、大学生のために過去8年間働いてきた認承された牧師です。彼は学生のためのキリスト教雑誌を3年間にわたって編集してきました。現在はベルギーのルーベンに居を構えて、学生のための伝道と霊的成長のプログラムである「ユニバーシティ・アクション」の部長として奉仕しています。

サンディッジ氏は米国ミズーリ州、スプリングフィールドのセントラル・バイブル・カレッジで聖書の学士と宗教教育の修士を受けました。またミズーリ州、コロンビアのミズーリ大学からガイダンスとカウンセリングの修士を受けています。つい最近、神学部より道徳及び宗教科学の修士とベルギー、ルーベンのカトリック大学の哲学科より哲学学士を受けました。現在は、同大学の神学部における宗教研究の博士号を取得するところです。

学課の構成

各学課の構成はみな同じですが、ひとりで勉強しやすいようにこの構成がとられています。気が向くままどんどん読んでいってもかまわないのですが、む

しる時間をかけて注意深く、またよく考えながら内容をつかんでいくことをおすすめします。

各課の初めに、総論のいくつかを提示する目的で短い序言が出てきます。その次の「考えるための問題」はあなたの思考を刺激するため、また課内の具体的なアプローチを示すためにあります。学課を読み進む上で、これらの問題を念頭におくことは大切なことです。「用語の意味」は学課内で用いられている重要な言葉を理解する助けを与えるものです。そのうちの多くは、すでによく知っている言葉であるかもしれませんが、しかし、多くの場合は、言葉そのものは良く知っていても、内容的に未知の専門用語が使われています。これらの用語を念頭において本を読み、必要なときはもう一度見返すとよいでしょう。

「学課の展開」は勉強する基本的資料です。それは、できれば1つの勉強の区切りの中で取り扱われるべき区分に分けられています。記されている著者や作品に初めて出会った場合は、脚注や引用で説明されています。聖書の引用は、あとでよく調べてもらうために載せてあります。聖書は、キリスト教についてのコースに共通の重要なテキストです。特別な場合を除いて、聖書は新改訳聖書を使用しています。学課を通してこの聖書があれば勉強の役に立つでしょう。

学課の終わりには、引用した著書のリストをあげたあとで、「今後の勉強のために」というセクションがあります。これは、主題をさらに深く勉強する上で役に立つような本をリストアップしたものです。

次の「自習」セクションは、2つのことをするためにあります。(1)個人的に聖書を研究し、考えるため、(2)各課の主題を聖書と自己の生活に関連づけるためです。

最後に、これは単位を獲得するコースではないので、試験のようなものはあ

りませんが、「自己採点復習」と呼ばれる問題集があります。これは単に学課を組織的に復習するためのものです。内容に関する質問に対する解答は、絶対にというわけではありませんが、できれば「自己採点復習」の最後に出てくる正解を見る前に、書き出してみるとよいでしょう。この問題集には、主題を自己の状況に関連づけさせるための「思考の刺激」がついています。

このコースとは別に、ステューデント・インタラクション（学生の相互作用）という題の小冊子がついています。最初の部分、インタラクションAは全コースの内容を復習するためのものです。どうかこのセクションを完成させてICI事務所まで郵送して下さい。

インタラクションBはコースそのものをあなたに評価してもらうためのもので、コースを修了してもしなくても、コースをどのように受けとめたかをあなたに尋ねるものです。これは私たちにとってとても大切なことですので、コースを勉強し終えたらいつでも、どうか是非ともインタラクションBに関するあなたの意見をICI事務所まで送って下さい。

最後に、インタラクションCはイエス・キリストについてのあなたの立場を記録してもらったり、個人的接触を深めてもらうものです。これもまた、あなたの好きなききに書きこんで下さい。しかし、このセクションを完成する際には、心から完成させたいという願いをもって取り組んで下さい。

このコースは、あなたがどこにいても、自分で勉強できるように作られています。教材について問題か疑問をお持ちなら、そのことをICI事務所まで知らせて下さい。すぐお返事をいたします。また、内容について他の人と話したいと思われるでしょう。このコースは、グループで勉強したり話し合ったりできるように組み立てられていることにお気づきでしょう。しかし、ひとりで勉強するにしても、だれかと一緒に勉強するにしても、あなたはきっとキリスト教信仰の性質と基本を、より良く理解するようになると信じています。

著者序文

「人間の偉大さは考えることにある」(パスカル、『パンセ』346より)。フランスの数学者であり哲学者であるブлез・パスカル(1623-1662)のこの言葉は、私たちが人間にアプローチするときには、主に考える存在としての人間を考慮しなければならないことを私たちに想起させてくれます。このコースは考えること、すなわち真理と人生の究極的実在について考えることへの招待です。人は、ちょうど雪片が各々違うように、また木の葉が1枚1枚違う模様もっているように、各々ユニークな存在であることが、このコースでは考慮されています。人はだれでも自分の個人的な歴史を持ち、自分の人生観と真理と実在の認識もっています。このコースから人生の意味を知る1つの見方を見る一方、個人的、文化的相違をも考慮されるように願っています。

私はクリスチャンです。これは私が選んだ人生観です。私はあなたとクリスチャンが重視している問題のいくつかを話し合いたいのです。ここでひと言つけ加えさせて頂くと、私は人間が、そう、私の信仰を持っていない人たちでさえも、すべての人が好きです。特に学生たちには特別な親近感を抱いています。過ぐる8年間、私は全時間を大学生と過ごしてきました。彼らは親切で思いやりがありました。無関心や皮肉からではなく、彼らは私が信仰を持っていることを認めています。それでも、彼らのうちの多くはこの信仰を持っていません。これは常にいくつかの理由があります。宗教とか教会は今日大切なものではないと思う者や、彼らが出会ったクリスチャンの挫折を見て興味を失った者もいます。多くの学生は最も偽善を憎んでおり、自分が心から確信を持ってないものと同化しようとはしません。

学生であろうとなかろうと、私が書いている相手はこういう人たちなのです。私は、イエス・キリストに心ひかれていながら、今のところ心から、また自覚を持って完全に委ねきれない人にお話ししたいのです。しばしば私の見方

は狭く感じられるでしょうが、いずれにしても真理そのものは狭いものです。なぜなら真理は、真理ならざるものは誤りであり、捨てられるべきであることを主張するからです。この真理は、第1課の主題となっています。

真理は絶対ですが、真理や知恵の理解はそうではありません。たとえそうでも、自分は全知であると言い得る人はひとりもないし、ひとつの集団でさえもそれは不可能です。ソクラテス (B.C. 469-399) は「ギリシャ最大の賢人」と呼ばれました。彼自身はこの呼び名を疑っていました。そこで彼は、知恵をもっていることで有名なあらゆる人を調べ始めました。その結果、彼らすべてよりも自分が賢いことがわかりました。なぜでしょうか。「なぜならば、彼は少なくとも自分が何も知らないことを知っているが、彼らは自分たちが何も知らないことすら知っていなかったからです」(アームストロング P.27)。

私はソクラテスの知恵をいくらかでも持ちたいと願っています。私もすべての答えを持っているなどと主張しないからです。しかし、第1課で私が試みていることは、真理の問題と真理をいかに確実に知り得るかという問題を取り扱うことです。真理にはユニークな面があります。この点をアウグスチヌス (A.D. 354-430) は言いました。「真理は、どこでそれを見いだそうとも、熱心に受け入れられなければならない」(フリーマントル P.14より引用)。実際、私がいこれらの学課を学ぼうとするみなさんをお願いしたいことは、真理を受け入れてほしい、どこでそれを見いだしても、そうしてほしいということだけです。

第2課は、神についてです。さて、「人間理性の極限において、あるいは自然の第1原因として到達し得る神」(フリーマントル P.16)と、人間に関心を持ち、人間の歩みに関わりを持つ現実の神とは大違いです。前者の神観に達するプロセスは哲学の領域です。後者の神観を研究することは神学の分野であって、どちらに応答するかによって、宗教か信仰かに分かれてきます。

ここでは、哲学の信用を失わせるような試みは一切していません。実際は、哲学と神学が同じ科学の要素と考えられていた中世や、それ以前の時代が存在しました。かつては哲学者と神学者は自由に交流しました。しかし何世紀にもわたって、これら2つの領域は、良きにつけ悪きにつけ、分離されてきました。私は哲学的方法と意味合いを無視しませんが、ここでの私の目的は哲学よりも神学にあります。これはあなたがこの本を勉強する際に、心にとめて頂きたい大切な点です。

キリスト教の核心、中心は、「キリスト」という名前そのものに含まれています。キリスト教の信仰は、その創設者をよく見ることをしないで深く考察することはとても望めません。ですから、イエス・キリストの人格と働きは第3課の主題となっています。それはアン・フリーマントルが要約して言っている通りです。

「キリスト教哲学は実在の性質への知的探求であって、その結果、人間を超越した力の可能な存在を前提として受け入れる。その力の存在は人間存在の対象であり扇動者でもあるし、キリストが言われたように、『道であり、真理であり、命である』と言われるお方自身でもある」（フリーマントル P.16）。

またスイスの精神病医ポール・トゥルニエが、彼のカウンセリングについて語ったこともキリストに適切に適用されるでしょう。「事実上、100人の人を表面的に調べるよりも、ひとりの人を徹底的に理解することの方が興味深いことである」（トゥルニエ P.21）。たとえそうであっても、私たちはイエスのすべてを知ることはできません。イエスの伝記作者、同時代人、友が力強く語っている通りです。

「イエスが行なわれたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私

は思う」(ヨハネ21:25)。

イエスのことを知る主な資料源は、彼についての最も権威ある作品集である聖書です。聖書を神聖なる文書として考えることは第4課のテーマです。聖書は昔も今も大変誤解されています。あるクリスチャンは、はっきり言わないまでも、神は聖書の中で人間に語られたから、人間はもはや考える必要はないという考えを暗に永く持っています。聖書を理解する上で、このようなアプローチは拒絶しなければなりません。キリスト教を真剣に考える人は、聖書が言っていることを考えなければなりません。人が聖書のメッセージに対して基本的確信や信仰をもつようになるのは、理解と熟考によるのです。信仰と理性は敵同士ではなく、実に最良の友人同士です。そこで考え深い人は、自己の信仰を何か確かなものに基礎づけたいと願いますから、第4課の目的は聖書の信頼性を確立することにあります。

聖書は単に事実を記録した書物ではありません。聖書は、真理を求め、経験によって実在を発見する喜びを知りたいと願っている者に靈感を与えます。従って、第5課は個人的宗教経験の主題を扱います。この課で実践面に入りますが、それは真理、神、イエス、聖書を単に知的観点から扱うのではなく、服従の面から扱うのが私の目的だからです。

ある日の教室で、私の哲学教授は3種類の哲学者について語りました。その話は哲学者についてでしたが、語られたことは私たちのすべてに適用できると思います。3種類の人とは、知的な人、感情的な人、意志の人のことでした。各々にはそれにふさわしい哲学があります。第1のタイプは実証主義的唯物論における理性の主権に相当します。第2のタイプは汎神論的観念論に当たり、第3のタイプはキリスト教に相当します。以上の用語の意味はおわかりにならないかもしれませんが、最後の意志の人は理解できると思います。

第五課でこれら3つの要素を正しく位置づけしますが、基本的に言ってクリ

スチャンは意志の人です。それは人間の理性や感情が、人生と宗教に何の役割ももってはいないということではありません。役割はあります。しかし、本来、私たちがキリスト教と言うとき、私たち自身の明け渡し、意志の行為を要求するものをさしているのです。

ある時、ひとりの婦人がカウンセリングを求めてポール・トゥルニエのところに来ました。子供時代からの苦痛に満ちたエピソードを話しながら、彼女はトゥルニエ博士が彼女の母親を不当にさばきはしないかと恐れました。そこで彼女は、できる限り完全に正直であろうとつとめました。トゥルニエは、彼女が語った多くの事実は忘れてしまったが、インタビュー中に感じた、彼女の心の奥底における真理に対する関心を決して忘れないだろう、と書いています。

「私は情報から交流に移りました。情報は知的なものですが、交流は霊的です。しかし情報は交流に至る道でした。情報はいろいろな人について語ります。交流はその人に触れます。情報によって私は事例を理解することができます。しかし、その人を理解することができるのは交流による以外にありません。人は私たちに事例を知ってほしいと願いますが、自分そのものを知ってほしいとも思っているのです」(トゥルニエ P.25)。

このことも、この本の私の心からなる願いです。私はある種の交流が成立し得るような仕方で話したいのです。おわかりのように、私が伝えたいのは単なる情報ではありません。もっと深いもの、霊的次元にあるもの、個人的レベルにあるもの、人間意志の潜在意識のレベルにあるものです。

エミール・ブルンナー (1899-1966)^c は「主なる神を信じるより汎神論的哲学を持つことの方が楽である」と言いました (ベイリー P.55)^d。あいまいな神は私たちの意志に何の主張も要求も与えず、自己を献げることを求めないからです。

ここに収められていることはチャレンジとして、すなわち読むこと、考えること、委ねることへの挑戦として提示されています。それは、「さあ、こういうものだから、受け入れるなり捨てるなりしてくれ」といった態度で提示されていません。いやまったくそうではありません。それは考えることへの招き、詩篇記者の詩的用語を用いると、「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ」（詩篇34：8）ということへの招きとして提示されています。

ジェリー・L・サンディッジ

ルーベン、ベルギー

1977年11月

-
- a 18世紀以前の学問全体は、人文科学と神学を含めフィロソフィエ（哲学）と呼ばれていた。この言葉は聖アウグスチヌスの場合がそうであったように、キリスト教の知恵の全体を意味していた。
 - b これらの3つのタイプはドイツ哲学者ウィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）によってはじめて示された。
 - c エミール・ハインリッヒ・ブルンナーは改革派の伝統をもつスイスの神学者であった。彼は現代プロテスタント神学の進路を方向づけることを助けた。彼は牧師、大学教授、神学及び哲学に関する10冊以上の著者でもある。
 - d ベイリーはブルンナーの『反抗する人間』より引用している。

参考文献

1. アームストロング, A. H. 『古代哲学緒論』 London, England: Methuen & Co, Ltd., 1965.
2. ベイリー・ジョン 『巡礼への招き』 London, England: Pelican Books, 1960.
3. フリーマントル, アン 『信仰の時代, 中世の哲学者たち』 New York, USA: The New American Library, 1970.
4. ハッチンズ, ロバート, メナード 『西洋世界の偉大な書物: バスカル』 Chicago Illinois, USA: Encyclopedia Britannica, Inc., 1952.
5. トゥルニエ, ポール 『人格の意味』 London, England: SCM Press, Ltd., 1970.
6. ヴァン・ステンバーゲン, フェルナンド 『西洋のアリストテレス』 New York, USA: Humanities Press, 1970.

第1課

いかにして確実な
ものを知り得るか

フランスの化学専攻の大学院生が勉学に行き詰まりを感じて、週末に逃げ出すことに決めました。彼が訪ねた町はたまたま私が住んでいたところでした。いくらか変わった状況から私たちは出会って、知り合いになりました。私たちは神、宗教、価値観について意見を交換しました。彼はあとで手紙で不安定な気持ちを伝えてきました。

「私は最近、無神論的とは言わないまでも非常に懐疑的な気持ちになってきたことを告白しなければなりません。私の多くの友人のように、教会は過去のものであって、未来に何ら解決を与えないと思っています。

基本的な善悪の概念は時代、文化、哲学、宗教と共に激変するので、だれも愛であると思われている神が何を基準として採用するかを予測することはできません。

私たちは過渡期に生きています。このところ生活は根本的に変化するもので、人は真の価値と拠り所を知るのに困難をおぼえています。この変転する世界で大切なことは、開かれた心を持つことでしょう……」。

大学院生はいくつかの正直で重要な問題を吐露しました。おそらくあなたも、彼や他の多くの現代人のように自分の懐疑の念を持ち始めていることでしょう。このコースは、これらの問題や同じような問題について、キリスト教は何と言っているかを、あなたが真剣に知りたいと願っていると想定してつくられています。

アウトライン

- 真理の本質
- 真理を決定する基準
- 明確な思考の障害
- 疑いの原因
- 挑戦

考えるための問題

1. あなたは真理をどう定義しますか。
2. 真理決定の最初の8つの基準の中に、特にその1つひとつが唯一の基準として用いられる場合、あなたはどのような欠点を見ることができますか。
3. 組織的に首尾一貫した真理のために、どのような4つの側面が調和しなければなりませんか。
4. 明確な思考の4つの障害のうち、どの障害が一番クリスチャンに誤用されていると思いますか。
5. どのような疑いの原因（1つでもそれ以上でも）があなたにとって一番やっかいな原因ですか。
6. あなたは人生の大問題に対するクリスチャンの応答の確実性を心から探究したいと思っていますか。

用語の意味

- 絶対** ——不完全でないこと，完全
- 二律背反**——等しく有効に見える原則間の，あるいはその原則から正しく引き出された推論間の矛盾
- 価値論** ——価値の本質，型，基準の研究，また特に倫理における価値判断
- 経験者論**——知識はすべて感覚の知覚か経験に依存していると信じている人
- 認識論** ——知識の妥当性と同時に知識の本質，可能性，限界を研究する哲学の分野
- 相対論** ——知識は限界のある精神と知る状況にとって相対的であるとする理論。換言すると，倫理的真理はそれを持っている個人と集団によって決定されるという理論

学課の展開

今は、世界で流行している考え方に、基本的な善悪などは存在していないというものがあります。現代人は倫理基準や真理を、都合、状況、特権に基づいた相対的なものと考えます。そういったものは文化や時代や実践によって変わるものと言う人もいます。そういう人にとっては、「確実なものを知る」ということを考えるのに不安を感じるでしょう。彼は人生のあらゆる領域における絶対的基準を受け入れるのをためらっています。

善悪を考察すると、価値の問題、つまり哲学用語の「価値論」にぶつかります。これに関連した価値を研究していくと、直接知識の問題そのものに行きあたります。この古くからの知識の問題はこの課の主な主題です。

哲学者たちは、古代ギリシャの時代以来、この問題と取り組んできました。懐疑と悲観主義がこんなにあふれているような現代には真理に対する確信、あるいは固い信念を持つことは大切です。この問題は、意識するとしないとにかかわらず、まさに人格的存在の中核です。この学びを知識と真理について議論することから始めるのは、このような理由によるのです。

真理の本質

絶対的か相対的か

アブデラのプロタゴラス^aは、真理は絶対的でなく相対的である、と論じました。それは単なる意見の問題であって、あなたにとって真理であれば、それはあなたにとって真理であり、私にとって真理であることが、私にとっての真理である、というのです。今日、多くの人がこのことを信じています。心理学の授業でかつて教授がこう言ったのを覚えています。「絶対的なものは1つしかない。それは絶対的なものなど1つもないということだ」。

こうした考え方は、人の見方は各々違うから、絶対的真理は不可能であるというものです。これは経験主義者の立場です。つまり、知識はすべて感覚の知覚によると言っている人です。この結果、「人間は万物の尺度」という信念が生じます。万物は流転し変化する、故に人間は彼自身の真実性を創造し、真理を創造する、というものです。経験主義者はいくつかの点で正しいと言えます。たとえば、私たちはすべて少し違った角度で環境を経験します。目の不自由な人は、目の見える人にはわからない多くの経験をもっています。たまたま私は少し色盲ぎみですが、このことだけでも、私の知覚はある程度変化します。

不幸にも、経験主義者は極端に走ってしまいました。あるものは確かに相対的であるため、すべてのものは相対的であると結論づけてしまったのです。これは不当な一般化です。経験主義は、全部を含む領域に適用されるとき、相対主義（真理は相対的であるとの立場）になり、懐疑主義（確かなものは何ひとつとして知り得ないという立場）に終わります。すべての人の意見はみな正しいということは、反対者の意見も正しいと認めることです。文化、状況、時代に応じて真理を相対化していくと、混乱が起き、次に懐疑となり、ついには絶

望におちこみます。

キリスト教の教えは、真理は相対的であるという考えを拒否します。イエスは言いました。「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」(ヨハネ8:32)。そのあとで、彼は驚くべき宣言をしています。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ14:6)。

この2つの断言がもつ途方もない含みを考えて下さい。イエスは、彼と関わることは真理そのもの、すなわち絶対的真理に関わることなのだ、と言っているのです。

どのように絶対的なのか

真理の絶対性を否定すると自己矛盾に陥ります。それは絶対的な真理を相対的にすることです。そうすることで、私たちは非論理的となり、つじつまが合わなくなります。「絶対的なものは1つしかない、すなわち絶対的なものは何もないということだ」と言った教授の言葉を思い出して下さい。絶対的真理は、それによって真実な意見でさえさばかれるような基準です。従って、判断の基準となる絶対的真理がなくては、妥当な意見は存在しえません。

絶対的真理は確かに存在しますから、すべてのものや考えは正しいとは言えないことになります。真理は誤りを含みます。そのために、真理と誤りを区別するある基準を確立することが必要になってきます。その前に、私たちは真理の実用的な定義を下さなければなりません。

真理の定義

カーネル教授は言っています。「真理は、判断ないしは前提の質であって、我々の経験における事実のトータルな証言となると、我々の期待を裏切らな

い」(カーネル P.45)。このように、真理は物事の実際面と一致するものです。それは本質的に真実なるものと一致します。たとえば、あなたがマニラ大学にスタ教授の講義があると聞いて、そこに出かけてみて、実際にその講義が事実であることを発見したりすると、その言葉は正しいことになります。「従って、真理は、その最も単純な次元において、ありのままの物事に一致する判断である」(同 P.46)。

きわめて厳密に言うなら、もう一步先に進まなければなりません。真理は究極的に、真理そのものである神の心との完全な一致、調和です。神はあらゆる事実の創設者ですから、神の永遠の性質から離れた実在はありません。カーネル博士の言葉、「なぜならば、神の心こそ青写真であって、宇宙のすべてはそれに従って造られたからです」(同)。

神の心は実在を完全に知っています。ですから、「真理は神の心と一致する判断を備えています」(同 P.47)。実在についての神の解釈と一致しない場合は、神は絶対的真理であり、誤ることもいつわることもありえないが、私たちは誤りに陥ります。このことに関する神の言明は旧約聖書から来ています。「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさないだろうか。」(民数記23:19)。

真理は神以上のものではありません。神と1つのものです。キリスト教の立場から言うと、真理は神の心と一致したものとして見られます。

真理の判断基準

もし真理が神の心と調和するものなら、いつ私たちの判断が神の心と調和するのかをいかにして知るのでしょうか。カーネル博士は、ある陳述が真実であ

ることを判断するためのガイドとして、理性的な人に受け入れられるような基準をいくつかあげています。

本能

本能は最も低い判断のレベルで私たちを助けることができます。精神分析学の創設者であるシグモンド・フロイト（1856-1939）は、このテストの有効性を擁護しました。彼は本能的なものは真理に違いないとさえ考えるにいたりました。

確かに本能は動機の力を与えますが、指導の面ではほとんど何も与えません。たとえば、無人島で私はどんな水でも見つかれば次第飲みたいという衝動を感じるでしょう。しかしその衝動は、飲料水の安全性を決定する上で役に立たないでしょう。だから、本能はあなたを促して真理を求めさせるかもしれませんが、真理と偽りを区別することはできません。さらに、本能は環境に適応できます。そこで、本能的なものと適応によって獲得されたものを見分けることは不可能です。従って、本能は真理を暗示することはありえても、それ自体で真理を評価することはできません。

習慣

習慣には、それが本来真理に基づいている限り、ある程度の価値があります。習慣とは個人が所与の集団内で確立されてきた習性、ないしは行動様式です。たとえば、ほとんどの社会において、若い人が両親や年輩の人を敬うことは習慣になっています。しかし、習慣は良くもなり悪くもなり、正しくもなり誤りともなり、神の心に合致することも調和しないこともありうるのです。

たとえば、昔、やもめが亡き夫の死体と棺をつつんでいる炎に投身した習慣がありました。今ではその習慣は一般的に良い習慣とは思われていません。

どの文化にも良い習慣とそうでない習慣があります。いろいろな時代のいろいろな場所の習慣は、実際に互いにつつかり合います。このように、習慣だけでは信頼しうる真理の判断基準とはなりません。

伝統

伝統とは、1つの文化内に固定した単なる習慣にすぎません。伝統に対してよく言われる共通の論議はこういうものです。「こんなに多くの人が、こんなに長い間まちがっていたなどということはありえないことだ」。過去に深く根ざしているキリスト教のある様式は、伝統に支配されており、信条や実践のための真理の証拠として伝統に訴えることすらするかもしれません。習慣の場合のように、伝統はしばしば助けになります。伝統は、最初から真理に基づいているなら、確かな影響力となりうる過去の根源を提供します。これらの伝統は、重要なものを想起させる役目を持ちうるのです。

しかし、伝統にも欠点があります。伝統の価値はどこまでもその根源に依存しています。しかし、たとえその根源が良くても、長い時代にわたって変化し腐敗する危険があります。真理に根ざし、かつ純粹に継承された伝統は有益です。しかし、もしその根源が誤っているか、時間によって腐敗しているなら、伝統は悪いものとなり、危険なものとならざるを得ません。

最後に、伝統にも相互の衝突がありうるということです。真理が伝統をつくらなければならないのであって、その逆ではありません。

全体の合意

この用語は「人々の同意」を意味するにすぎません。あらゆる場所で、すべての人によって信じられることは、真理確立の単純な基準のように常に響きます。これは事実よりも説得力があるように思われます。

たとえば、昔から人々は、太陽は毎朝昇り、毎夜沈む、と信じていました。私たちがもそういう言い方をします。そういう便利な表現は、私たちの目から見てそれらしく思われる出来事とマッチするからです。しかし、今では小学生の子供でさえも、それは地球の自転によって引き起こされる幻想にすぎないことを知っています。

あなたの祖先が信じていたことを信じることは、それが正しければ、良いことです。しかし、信じていたことが本当に正しいのかどうかを見つける必要があります。クリスチャンであった学生のルームメートの共産党員が、ある日、こう言いました。「我々は神などいないといつも教えられてきたが、仮にいたとしたらどうだろう」。

このように、「1つの前提は完全に信じられるに値するためには正しくなければならないが、それだからといって万人に信じられるものが正しいとは限らない」(カーネル P.49)。真理のこの判断基準は、それ自体では不十分なものです。

感情

だれでも感情、虫の知らせ、情緒、靈感、さらに確信にさえ、疑うことがどういうことであるかを知っています。これらは普遍的な、あらゆる人に用いられている信念と行動を決定する方法である、とあなたは言うかもしれません。おそらく、私たちが気づいている以上に重要な決定が、虫の知らせや瞬間の靈感に基づいている場合が多いのです。これは、すべてが悪いというわけではありません。情緒は人間づくりになくてはならない要素です。ほとんどの人にとって、あることについてどう「感じる」かが重要なことです。

しかし、それらは正しいかもしれないことの兆候を確かに与える一方で、感情は真に信頼しうる真理の判断基準ではないことも確かです。それらはほんや

りしており、漠然としたもので、しばしば不安定で誤りうるものです。それは体の疲れや病気や他の体調のアンバランスに左右され易いものです。真理はその妥当性を決定するのに、感情よりも客観的なものでなければなりません。

感覚の知覚

五感、すなわち視覚、触覚、聴覚、味覚、嗅覚から受ける印象は、真理を判断するための信頼できるテストのように見受けられます。実際、これらは真理の源です。たいていの時は、私たちは個人的体験を信頼できます。しかしそれには限界があり、私たちの感覚もだまされることがあります。たとえば、2本の線路は遠くでつながっているように見えます。半分水の中に入っているボートのオールは曲がって見えます。そして私たちのほとんどが、暑いほこりっぽい日に蜃気楼を見ます。

私たちはまた、歴史的記録や地理的データのような、私たちの感覚では経験できない多くのことを、有効な知識として受け入れています。たとえば、私たちはナポレオン戦争を経験していません。そこで私たちはその戦争を正しく知るために、書かれた記録に頼らなければなりません。私たちの行ったことのない国を正確に知るには、地図に頼らなければなりません。そこで、私たちは真理を知るために感覚の知覚だけに頼ることはできないのです。

一致

一致は、事実と一致している概念は真理であると宣言します。たとえば「木」という概念は、現実に存在している外の木と見事に一致しているなら、真理です。

特に具体的な事実の場合、一致には大きな価値があります。たとえば、過去の考古学上の発見は、聖書の中で私たちに与えられている多くの情報を確認し

ました。地理上の位置、人物の確認、場所、出来事、文化、他の多くの事実は、考古学の発見と聖書の記録とが一致したために、確実に有効なものとなりました。

このように、一致は真理の良い定義として用いられるかもしれませんが、その種の一致はいずれにしても確立されなければならないので、真理決定のテストとしては欠陥があります。もう1つの問題は、どのようにしてこのテストは、たとえば愛、幸福、美、喜びといった無形の価値と真理をはかるのに用いられうるかという点です。

実用主義

実用主義は、真理を「効き目のあること」と定義します。これは非常に簡単で直接的な真理発見方法に見えるし、事実、實際生活でほとんど毎日私たちが使っている方法です。もし料理人が正確に調理法に従うなら、その結果を予想できます。しかし、もし料理人が代用品を使うか、調理法を誤読するなら、元の調理法は失敗の責めを負うことはありません。

このように、私たちは究極的な真理につまらない結果や悪い結果を期待しないので、このアプローチには長所があります。しかし、しばしば効果があると見える物事は私たちの最善の利益のためになりません。私たちは未来の結果を十分見ることができないために、真理判断の基準としての実用主義の価値は少なくなります。物事が一時的に効果を出して好ましい結果を生むように見えるのは、それらの土台が真理でないときに可能です。たとえば、経済的に困っている人は、その勤め先のお金を着服することで彼の問題を解決できるかもしれません。この場合、彼の解決は一時的に効を奏するかもしれませんが、最後にはそのような行動は不満足なものに終わり、高くつきます。

真理の有効性は実用主義の「有効性」のみに依存できません。実用主義は懐

疑主義と絶望に導くことがあります。というのは、ある人にとって効き目のあるもの、あるいは、真理であるものは他の人にとっては効き目がないかもしれず、真理とならないかもしれないからです。キリスト教は真理ですから、それは効果があります。しかし、私たちはその真理を効果性の上に基礎づけません。

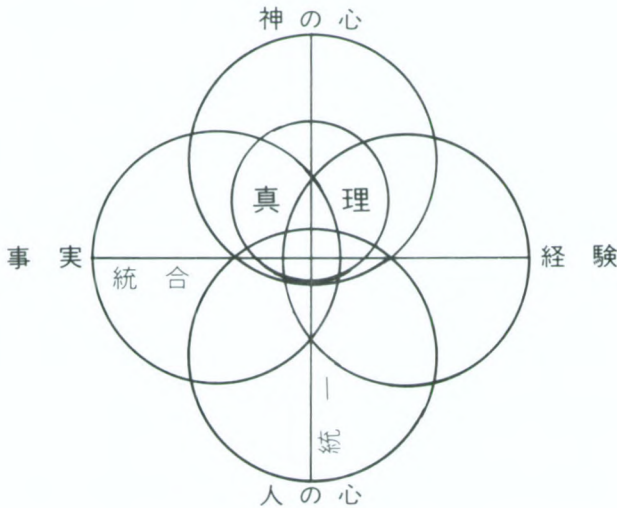
組織的首尾一貫性

組織的首尾一貫性は、最も信頼しうる真理判断基準のテストを与えます。これは、統一と統合の2つの部分から成っています。

「統一」とは、真の思想はすべて他の知られているものと調和するということです。全体の部分ないし特徴は、相互に一致していなければなりません。キリスト教には究極的、永遠的逆説（見かけの矛盾）、ないしは二律背反が存在すると、まちがって教えている人がいます。しかし、このような見かけの矛盾は、神の心に相反すると見える思想の最終的解決があるので、大目に見ることができるでしょう。

しかしながら、統一性は十分ではありません。なぜならば、それは誤りが無いことを示しても、私たちは同時に、いかにして、いつ、また、なぜ真理は統合されるかを知らなければならないからです。「統合」は、「いかにして真理は統合するか」ということです。それは、すべての事実の包括的見解です。いろいろな思想が結び合わさって相互に関わり合っていると、真理を決定する確固たる土台がつけられます。

従って、組織的首尾一貫性は、「論理的に筋の通った（矛盾していない）もので、事実と経験の世界に適合するもの」です。神は、本来首尾一貫したお方であり、全ての事実の創始者ですから、これらは共に神の心にある真理と一致しています。



上図は、真理は事実と経験が統合されたものであり、理性的な人間の心と神あるいは絶対的真理の統一されたものであることを示すものです。

ここで論じられた真理の9つのテストを振り返って下さい。組織的首尾一貫性は、これらすべてを含むことがわかるでしょうか。最初の8つは、どれもそれだけでは真理を確認するのに十分ではありません。しかし、真理なるものは、圧倒的印象が肯定的になるように、否、真理の中に肯定的応答を引き出すものです。

明確な思考の障害

私たちは皆、新しい考えに直面したとき、当面の問題を明確に考えていることを確かめなければなりません。私たちに達するものが単に宣伝にすぎないの

なら、私たちはそのことに気がつかなければなりません。真理を検証することを求められ、昔からの偏見が立ちだかるなら、私たちはそれらを克服するために、どうしてそうなっているのか、その偏見を認識する必要があります。テトス教授が概説している明確な思考の一般的障害を見て下さい（テトス P.26-29）。キリスト教についてできるだけ正直に、また理性的に考え続けて下さい。

偏見

偏見は精神的なもので、十分に考慮することなく判断してしまうことです。そして、ちゃんとした証拠を無視するか、過小評価するくらいがあります。今日、世界には多くの偏見があり、そのために正確な結論を出すことがむずかしくなっており、不可能とさえなっています。偏見は通常「事実」志向よりも「情緒」志向です。

宣伝

宣伝（プロパガンダ）という言葉は、ふつう1つの主張を促進するか妨害するために、情報を選択して用いるか偏向して用いることを意味して用いられます。その意味では人間操作の一形式です。それは、思考をコントロールする目的で用いられる強力な道具です。宣伝者は、前もって決められた応答を得るために人の感情につけこみ、言葉を連発します。宣伝は聖書的キリスト教のアプローチではなく、このテキストの目的、アプローチではありません。

権威主義

権威主義は、知識は権威によって保証され、「有効になる」という信仰です。それは事実や経験に一致するかしないかという道筋を無視して、「盲信」に基づいて受け入れられることを当然視します。クリスチャンは、聖書を究極

的な権威として受け入れるので、権威主義であると非難される時があります。クリスチャン自身はこの見方を受け入れません。なぜなら、聖書は事実と経験が調和する証拠を提供することを確信しているからです（この点については第4課で論じます）。

論理の虚偽

論理の原則の違反は3つのグループに分けることができます。術語、前提、一般化です。意味論的虚偽（術語）は欠点の多い、不注意な、もしくは不適切な言葉の使用です。あなたはある論議の中で、不注意に言葉の意味を変えるかもしれません。たとえば、「法」は自然法、立法、道徳法に適用できます。法という同じ言葉を使うのに、その意味を変えながら、特別な注意は払われていません。

形式的虚偽（前提）は論証における各段階の誤用に生じるもので、その結果私たちは私たちの基本的な前提から無効の結論を引き出してしまいます。形式的虚偽の例として次の論議をあげてみます。男はズボンをはく。A氏はズボンをはく。故にA氏は男である。最初の前提において、男だけがズボンをはく、とは言われていません。従って、引き出された結論は欠点のある論証に基づいています。

経験的虚偽（一般化）は早急な一般化を行うところから生じます。出来事Bは出来事Aのあとに起きたので、私たちは誤ってAはBの原因であるという直接の因果関係が存在することを推定し、あるいは一般化するかもしれません。たとえば、私は夕食に何も食べないで床につき、翌朝目をさましたらひどい頭痛がするかもしれません。さて、睡眠前に食べないことは頭痛の原因となると、この一般化は不適切です。

このように、論理の虚偽を避けるために、私たちは「術語」や「前提」の誤

用を避け、総括的すぎる一般化を避けなければなりません。

疑いの原因

正直な懷疑者とは、純粹に知的な問題をかかえている人、そしてその問題を解いてもらいたいと願っている人のことを言います。キリスト教についての疑いに関する限り、その妥当性を疑問視する4つの基本的原因があります。おそらくあなたは、このうちの1つかそれ以上の原因を確認できるでしょう。もしそうなら、あなたも自分に正直になって、そのことを認め、その原因を克服するようにつとめて下さい。

クリスチャン間の不一致

クリスチャンと自称している人の中には、残念ですが、キリスト教がどういふものであるかを示す上で悪い例となっている人がいることは確かです。クリスチャンでない人たちが、クリスチャンから高い倫理的基準と信仰の首尾一貫した実践を期待するのは当然のことです。おそらくあなたが読んできた唯一の「聖書」は、あるクリスチャンの生活でしょう。どうか、そういうことに基づいてキリスト教を判断しないようにして下さい。むしろ、キリスト教の原則に基づいて調べて下さい。どうかキリスト教の「教科書」、すなわち聖書そのものに直接あたって心と知性を傾け、あなた自身を聖書とそこにある教訓にあてはめるようにして下さい。

情報不足

おそらくあなたは、今この瞬間に知的な疑いをもって苦しみ、キリスト教の真理を探求したいと願っていることでしょう。しばしばクリスチャンでない人は、キリスト教が本当に教えていることを誤って考えてきました。確実なものを知る唯一の道は、自分で聖書を学び、真面目でキリスト教のことをよく知っ

ているクリスチャンからその信じていることを聞き出すことです。本当に知的に正直であるためには、できる限り努力を惜しまないで、正確な情報源からキリスト教をつかむまで、キリスト教を拒絶してはなりません。

道徳的反抗

このことはあなたのことを思って言わなければなりません。多くの人がキリスト教を受け入れないのは、キリスト教についての何か、すなわちその高い道徳的かつ倫理的基準を知っていて、それに従って生活したくないからです。この点であなたは、自分の動機と疑いをさぐらなければなりません。イエスが神の子であってほしくない、聖書が神の本であってほしくないのは、それによってあなたの今のライフスタイルが乱されるかもしれない、と心配していたためであったのかもしれませんが。これはキリスト教を受け入れない共通の理由です。確かに、信じるどころまでできながら、結果を恐れたり、クリスチャンらしく生活する内的力の不足を感じたりして、受け入れることができずに捨ててしまう人がいるのです。

霊的無感覚

これは疑いの基本的原因です。最大の神学者にして純粋に知的な人であった使徒パウロは言いました。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです」(Iコリント2:14)。

私がこの学習の限界を感じるのは、まさにこの点においてです。私のできることといえば、たかだか、疑いに対して、選択するためのいろいろな事実や関連した情報を示すこと以外にありません。神の霊によらなければ、クリスチャン生活の妥当性を完全に「証明」することなど、だれにもできないのです。あ

なたがもし心を開いて喜んで真理を受け入れるなら、聖霊は霊的現実と経験に
関して、あなたに内的確信を与えられるでしょう。

挑戦

このコースを続けることは、あなたが現実的でどこまでもやり通す態度をと
らない限り、むだなことでしょう。もし神がいないのなら、それとわかるのが
早ければ早いほどよいでしょう。もし神を信じるのが正しくなければ、それ
は断固排除すべき悪です。一方、もし神がいるなら、神の心と働きを知り理解
することは、私たちの経験で一番重要なことです。

もしイエスが単なるもう1人の倫理の教師なら、なぜこんなにさわぐ必要が
あるのでしょうか。もし聖書が、神的なものを盲目的に探っている人間によって
記録された多くの聖なる本の中の1冊にすぎないとしたら、なぜ聖書をわざわざ
読んだり理解しようとするのでしょうか。もし祈りが単に「ひとりごと」であ
るなら、そのような無意味なことは直ちにやめた方がよいでしょう。

私は何を言おうとしているのでしょうか。こういうことです。時間と労力と
自己訓練を惜しまないで、キリスト教のイメージと意味とを真剣に考えてほし
いということです。以下の点をおすすめします。

1. このコースの5課全部を学び通して下さい。「考えるための問題」「自己
採点復習」「自習」のコーナーを、各課を掘りさげるための道具として用いて
下さい。

2. 聖書を買って求めて、学課の中と特に各課の終わりの「自習」コーナーで
使われている引用聖句を調べて下さい。自習コーナーでは聖書のある個所を読

んで、それについて意見を述べることが求められています。

3. 実験的方法の態度をとって下さい。時間とその気があるなら、福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）を読んで下さい。短い連続的な箇所を、印をつけたり、自問したり、よく考えながら読んで下さい。

4. 各課の終わりに、これからの学習のためにその課のトピックに関連した本の短いリストがあげられています。各課の中で特別に興味や関心をもったところを、図書館や書店でそれらの本を探して読んで下さい。

これはきつい要求であることを私は知っています。しかし、これはまた、あなたの生活を改善することも知っています。先入観をもって始めないことをおすすめます。イエス・キリストの最初の弟子たちは、彼らの疑問が答えられ、疑いが氷解する以前に、彼に引きつけられたのでした。それと同じことがあなたにも起こりうるのです。

引用参考書——第1課

1. ブライトマン, エドガー シェフィールド 『哲学入門』 New York, USA: Holt, Rinehart, and Winston, 1963.
2. カーネル, エドワード ジョン 『キリスト教弁証論緒論』 Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1966.
3. テトス, ハロルド H. 『哲学の実際問題』 New York, USA: Van Nostrand Reinhold Company, 1970.

今後の学びのために

Carnell, Edward John. *An Introduction to Christian Apologetics*. (キリスト教弁証論緒論) 上掲.

3—6章は、特に真理の基準と性格を学ぶ上で有益である。

Keyser, Leander S. *A System of Christian Evidence*. (キリスト教証拠の体系)
Burlington, Iowa, USA: The Lutheran Literacy Board, 1953.

2章と19—21章は、特に疑いと疑いをもつ人に関連している。

Pike, Kenneth L. *With Heart and Mind*. (心と思いをもって) Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1970.

1—6章は認識論と関わりのある知性を論じている。

Ramm, Bernard L. *The Good Who Makes a difference*. (違いを生じさせる神)
Waco, Texas, USA: Words Books, Publisher, 1972.

2章と4章に、真理の性格と疑いの問題についての資料がある。

Trueblood, Elton. *A Place to Stand*. (立つ場所) New York, USA: Harper and Row Publishers, 1969.

1—2章は、精神の役割と信仰の確かさを持つことに対して、非常に有益な洞察を示す。

自 習

1. 新約のヨハネによる福音書18章を読み、特に28—40節に注意しなさい。あなたは以下の文にどのような意味、意義を見ますか。

イエスは言いました。「真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います」(37節)。

.....
.....

ピラトは答えました。「真理とは何ですか」(38節)。彼の質問にあなたはどうか答えますか。

.....
.....

2. 真理を示すための最初の8つの基準がもつ主な欠点をあげなさい。

本能

習慣

伝統

全体の合意

感情

感覚の知覚

一致.....

実用主義.....

組織的首尾一貫性の主な長所は何ですか.....

.....

.....

3. 死せる伝統の危険性について、新約のマタイによる福音書15章1—9節を読みなさい。この記事を読んで、あなたがどんな反応をしたかを短く書きなさい。

.....

.....

.....

.....

4. それについて考えてから、あなたの場合、最もよくあてはまる疑いの原因は4つの原因のうちどれですか。それはなぜですか。

.....

.....

.....

.....

5. あなたはなぜこれまで論じられてきた挑戦を受け入れることに関心をもったか（もっていないか）、簡単に説明して下さい。

.....

.....

.....

自習のガイドライン

これらの質問に対する解答は、学生によって違ってくるでしょうが、あなたの解答には以下の点が入っていなければなりません。

- 1 a. 真理の「性質」を本当に理解するなら、真理を啓示する者である」という彼の主張を認めるようになる、とイエスは言っておられるのです。

b. ピラトは真理を定義したり、真理の性質を理解することができない無能力を示しています。この個所の前後関係から、真理はピラトにとって「相対的」なものであることが示唆されています。ピラトはローマ人で、ユダヤ人によって伝えられた真理など彼にとって何ら個人的意味もたなかったのです。

私の答えは、統一と統合の概念を含んでおり、神の心に見いだされるような真理にいくらか関わっています。

- 2 真理をためすための最初の8つの基準の主な欠点は次の通りです。

本能——選択すべき物事を区別するための案内を与えない。環境によって変わりうる。真理に対する主張を評価できない。

習慣——空間や時間によって変わり、事実相互に矛盾する。究極的答えを与えない。

伝統——源泉と伝達過程に依存している。源泉と伝達次第で悪くもなり良くもなる。

全体の合意——知識の広範囲にわたる誤解ないしは不足を示し、必ずしも真理の一般的な受容を示さない。

感情——非常にあいまいで、しばしば誤りを犯す。肉体的、精神的健康状態に左右される。

感覚の知覚——たやすく欺かれ、個人的経験に限られる。

一致——実際に一致を確立することはできないから、真理のテストとして失敗する。無形のものをはかるのに不適當。

実用主義——人間の限られた見解は、実際に効果のあることと、効果があると見えるだけのものを区別することかができない。また、ある人にとって効果のあること（真理であること）は、他の人にとって効果のないこと（真理でないこと）である場合がある。

組織的首尾一貫性の長所は、それが今までのすべてを包括し、加えて事実と経験の一致を見いだすための手段と、いかにして物事がつながって適合されるかを示すための手段を提供する点です。

- 3 真理は自己の利益のためにゆがめられうる。イエスは律法と伝統が正確に「守られること」より、その「目的」に関心があった。彼は、もし人が律法、伝統の背後にある理由と一致して行動することを求めるなら、自己の目的のためにそれを用いる問題はおきないであろうことを理解していた。
- 4 これはまったく個人的な答えであるが、あなたはこの課であげられた原因の少なくとも1つは認めなければなりません。他にも理由があるでしょうが、これらの疑いの源をたどることができなければなりません。
- 5 これもまたまったく個人的な解答ですが、正直に答える必要があります。

自己採点復習

1 「真理とは何ですか」とイエス・キリストに直面したポンテオ・ピラトは尋ねた（ヨハネ18：38）。以下の項目の中で、キリスト教の見解をあらわすものはどれか。あてはまるものを○で囲みなさい。

- a) 真理は現実と一致する。
- b) 真理は相対的なものにしかすぎない。
- c) 真理は確実に知ることはできない。
- d) 真理は神の心と一致する。
- e) 真理は神の別格である。
- f) 真理は神にまさる絶対的なものである。

思考の刺激：真理を定義できますか。この定義はあなたが科学、芸術、宗教のことを話す内容に従って変わりますか。

2 以下の真理基準の長所と短所をあげなさい。空白にそれらの番号を書きこみなさい。

- | | | | |
|---|---------------|------|--------------------------|
| a | + | 本能 | 1) 主観的すぎる、肉体的要因に影響される |
| b | + | 伝統 | |
| c | + | 感情 | 2) 動機づけの力を与える |
| d | + | 感覚 | |
| | | 知覚 | 3) 確固とした影響力に見られる |
| e | + | 実用主義 | |
| | | | 4) 有効性はすべての人にとって常に良いと考える |
| | | | 5) 真理と結果の一致を示す |
| | | | 6) 人間の行造の不可欠の部分 |
| | | | 7) 不完全で時には不正確なデータを与える |
| | | | 8) 価値ある源泉の正確な伝達に依存しすぎである |

- 9) 条件づけによって変更されうる
- 10) 真理の源泉が個人的に経験される

思考の刺激：あなたは態度や信仰に影響を与えるような物事に、ふつうどの真理基準を用いますか。

- 3 以下の項目のうち、信仰に対する組織的首尾一貫性の利点を示すものはどれか。あなたが選ぶ答えを○でかこみなさい。
- a) 他のすべてのテストを包括する
 - b) 逆説に基づく
 - c) 諸事実の関係を検証する
 - d) 矛盾があるかどうかを定める
 - e) 神は首尾一貫していることを示す
 - f) 概念の統合性をテストする

思考の刺激：私たちはみな自己の思考と関係において、より大きな統一性と統合性を求めます。あなたの場合、どういう領域でこれが一番必要と感じますか。

- 4 明確な思考の障害とその定義を組み合わせなさい。空白に該当する番号を入れなさい。

- | | | |
|---------|-------|------------------------------|
| a | 偏見 | 1) 重んじられた源泉からの証言を疑わないで受け入れる。 |
| b | 宣伝 | |
| c | 権威主義 | 2) 論理過程における言葉の誤用ないしは誤り |
| d | 論理の虚偽 | 3) 事実を十分考慮することなしで判断する感情的傾向 |
| | | 4) 特定の見解に都合のよいように事実や概念を故意に選ぶ |

思考の刺激：全く客観的になることはだれにも不可能であるから、あなた

は筆者の偏見を見いだしたことになります。あなた自身の偏見はわかりましたか。

5 以下の項目にどのような正直な疑いがあらわされているか。疑いの原因と思われるものを右側から選び、その番号を左の空白に書きなさい。

- | | | |
|---------|----------------------------|----------|
| a | だれでも聖書は誤りで一杯であることを知っている。 | 1) 矛盾 |
| b | 私はどうしても神を信じることができない。 | 2) 情報不足 |
| c | 教会は偽善で満ちている。 | 3) 道徳的反抗 |
| d | あなたがクリスチャンなら考えることはゆるされない。 | 4) 霊的無感覚 |
| e | 私は遊びすぎたのでクリスチャンになることはできない。 | |
| f | キリスト教は老人と子供のものだ。 | |
| g | 祈りは心理的気休めだ。 | |
| h | イエスは偉大な教師だが、彼が何と言ったかは知らない。 | |
| i | クリスチャンは他の人とちっとも変わらない。 | |

思考の刺激：あなたがこういった見解の1つでも今まで持っていたなら、今それを正直に弁護できますか。

自己採点復習解答

1 a), d), e)

2 a) 2) + 9)

b) 3) + 8)

c) 1) + 6)

d) 7) + 10)

e) 5) + 4)

3 a), c), d), f)

4 a) 3)

b) 4)

c) 1)

d) 2)

5 a) 2)

b) 3), 4)

c) 1), 2)

d) 2)

e) 3), 4)

f) 2), 3), 4)

g) 2), 4)

h) 2)

i) 1)

-
- a プロタゴラス (B.C. 483-484)。討論の原則を展開したことで最も有名であったギリシャの哲学者。学者によっては彼を哲学者と考えずに、単に「漂泊の教授」と考える。彼の最も有名な言葉は「人間は万物の尺度である」。彼の相対主義の教えはこのような言葉から来ているが、古代哲学のすべての学者が彼の有名な言葉のこの厳密な解釈に同意しているわけではない。
- b これらの基準はカーネル P.47-62中に詳細に論じられている。同じ基準は、エドガー・シェフィールド・ブライトマンの『哲学入門』(1963, P.52-82) にさらにくわしく解説されている。
- c 前に論じた経験主義者は一般化をやりすぎ、感覚知覚を信用しすぎる点でまちがっている。

第2課

神はいるか

不可知論は、神が人間をつくったのではなく、人間が神をつくったのだ、と言います。宗教を人間の投影と見るのは社会学的宗教観です。

しかし、別の見方もあります。1つの枠組みの中で人間の投影に見えることが、別の枠組みの中では「神の現実」の反射に見えることがあるかもしれません。オーストリア生まれ（現在はアメリカ人）の社会学の教授ピーター・バーガーは、人間の状況内における「超越の信号」ということを言っています。この表現で、彼は「われわれの自然領域内に見いだされるものであるが、その現実を超えた点を指し示しているかに見える現象」のことを言っています。（バーガー P.26）。このような現象は、ふつうの日常生活において知ることのできるものです。

彼があげているそのような超越の信号に、どの人間文化にも見いだすことができる「遊び」の要素があります。遊びは時間を超えさせ、瞬間を超越した解放と平安をもたらします。たとえば、公園で物真似ごっこをして夢中で遊んでいる子供たちは時間を忘れています。

ベルガーは、彼の育ったビエナの町の第二次世界大戦の記憶から、この超越の経験を語っています。ソヴィエトの軍隊が1945年にビエナ市を占領する直前、ビエナ交響楽団は定期演奏会を開いていました。侵攻が始まり、ソヴィエト部隊の侵入によって演奏会のスケジュールはおよそ一週間妨げられ、その後予定通り演奏が続けられました。侵略があり、帝国の崩壊があり、それに代わる帝国の出現がある中で、演奏会はほんの少し中断されただけでした。このようなことがどうして起こりえたのでしょうか。ベルガーは言っています。「それは崩壊の意思表示に対する、さらに戦争と死の醜悪さに対する全人類の創造的美の究極的勝利を断言したものである」（P.78）。演奏の現実の中に超越の信号があり、それは人間の性質を超えた一段と高い義を指し示しています。

このような信号は「信仰」に関係があります。というのは、信仰は隠れたわ

ずかの人たちだけに開かれる神秘的啓示に根ざしているのではなく、私たちが日常生活で経験することに根ざしているからです。私たちの人間経験の全体は「希望」に方向づけられています。あらゆる面で死に囲まれている私たちの世界で、死に対する確かな「否！」が立ち上がり、それと共に、それ以上のものがあるという感情を伴います。このような感情はどこからくるのでしょうか。この超越の信号、ないしはより高い義は神から来ていると言えないでしょうか。神はいるのでしょうか。もしそうなら、神はどのような神でしょうか。これらの重要な質問はこの課の主題となっています。

アウトライン

- 無神論と不可知論
- 神の証明問題
- ア・ポステリオリの証拠
- ア・プリオリの証拠
- 価値論からの証拠
- 〔それ〕としての神でなく〔彼〕としての神
- 排戦

考えるための問題

1. 無神論者と不可知論者の違いは何ですか。
2. 神の存在は、水は水素2と酸素1によってつくられることを証明できるのと同じ方法で証明できるでしょうか。
3. 神への〔指示〕として、ア・ポステリオリの推論はどのように用いられますか。
4. 「宇宙論的議論」と「目的論的議論」との概念の微妙な違いは何ですか。
5. 神への〔指示〕として、ア・プリオリの推論はどのように用いられますか。
6. 本体論的議論とはどういうものですか。
7. 道徳と美からの議論は、人格的な神への効果的〔指示〕に役立ちますか。
8. 神は〔それ〕でなく〔彼〕と呼ばれるべきですか。
9. あなたは神の現実をこの存在に直接語ること（祈ること）によって試してみましたか。

用語の意味

- 不可知論 — いかなる究極的实在（神としての）も知られないし、またおそらく知られえないであろうという信仰。
- ア・ポステリオリ — [あとから] という言葉。観察される事実から推論して引き出された結論。（経験的）
- ア・プリオリ — [まえから] という言葉。原因から結果に進むこと。演繹的推論。自明の前提から推論して引き出された結論。経験によって前提となっていたもの。（先験的）
- 無神論 — 神の存在の否定，神はいないという教え。
- 宇宙論的 — 秩序ある体系としての宇宙を取り扱うもの。宇宙の起源，構造，空間との関係を扱うもの。
- 本体論的 — 存在の特質と諸関係に関わること。
- 目的論的 — 自然における意図や目的の証拠を研究することに関係すること。自然に属する性格，あるいは目的に向かいつつあるか，目的に形づくられつつある自然的過程の研究。

学課の展開

個人的問題や緊張した感情的経験によって、人間のうちにあるあらゆる喜びや希望が消し去られてしまうことがあります。非常にこみ入った合理化の手続きを経て、このような問題に苦しむ人は無神論の立場をとることがあります。オーロ・ストラック博士はこのような経過を「神経症の無神論」と名づけています。彼は以前、マルキシストで現在ローマ・カトリックの精神療法医であるイグナス・レップ氏の著書から引用して、「無神論に走った少女」のことを語っています。

「リサは実存主義者の哲学の影響を受けて神への信仰を捨てた。彼女はキリスト教はまったく無意味であり、人生は腐って不条理であると感じ、従って彼女にはどんな快樂も気まぐれも避ける理由がなかった。彼女は自慢してアルバート・カミュやジーン・ポール・サルトル^aの作品を引用し、自分の態度を正当化した。

しかし、彼女が実存主義的無神論に転向したのは、いわゆるこの「知的証拠」のためだけではなかった。リサはあるむずかしい情緒的・道徳的な傷を負っていたのである。彼女は著名な男と出会って、彼の主婦になった。2、3ヶ月して彼は彼女に飽き、まったく幻滅を感じて彼女のもとを去った。そのような高名な男も実は悪党にすぎなかったとしたら、この世に神聖なものなどありえようかと、彼女は疑問をもった。カミュとサルトルの本を読みながら、彼女は自己の人生の絶望を哲学的に確信しようとした。ついに彼女は、反社会的反抗の挙に出るまでになった。異常な身なり、小さな犯罪、そして殺人まで関わるようになった。

リサの人生は、神もなく、意味も、目的も、未来もない絶望の人生でした。状況は悲惨ですが、誇張されたものではありません。もっと悲惨なことは、多

くの青年がリサと同じであるかもしれないということです。あなたもそうかもしれないかもしれません。もしそうなら、あきらめないで下さい。「希望」があるのです。また、人生の問題に対する「正しい答え」があるのです。

無神論と不可知論

無神論

無神論者の最も簡単な定義は文字通り、「神はいないと信じている人」です。もしあなたが、どんな種類の神も存在していないと確信しているなら、またもしあなたの考えが固まっているなら、これからの学課を進めてもほとんど役に立ちません。しかし、もしあなたが小さな声で無神論を弁護し、あるいは知的、霊的構えとしての無神論に満足していないとすれば、読み続けて、今日の世界における神の实在の証拠を考えて下さい。

マルチン・ルター（1483-1546）は、しばしば宗教改革の父と呼ばれましたが、「神は我々が心をよせるものである」と言いました。もしそれが権力か、科学、革命、金、地位、その他無数のことであるなら、私たちはみな何かに心をよせており、それにどこまでも忠実です。この意味で、だれでも少なくとも1つのことに「心をよせて」いるので、真の無神論は不可能です。この1つのことが私たちの神になります。

不可知論

私たちの時代のような科学技術の時代には、不可知論は人の興味を引く魅力的な立場に見えます。不可知論は、「神を知ることは限界があり不可能である。換言すると、神の存在を肯定することも否定することもできないとする見解」です（テトス P.240）。このような無制限の答えられない立場は、本当に謙遜な立場であるような印象を与えますが、実際は陰湿な立場です。もしあなたがこういう考えをもって、心から「私にはわからない」と言われるのなら、これからのページをあなたの思い（知性）を使うだけでなく、心（意志）をも用いてよく考えられるようにおすすめします。

感性の鋭い青年が、20世紀の複雑な問題を知って、「奇跡の探求」と題する詩を書いて、有名な牧師に送りました。その詩には、「これが実現することを望みます」と書かれた文が添えられていました。これがこの人にとって実現したかどうかは知りませんが、これは実現可能であることだけは言えます。ここにこの詩をあげますので、よく考えながら読んで下さい。

私は人生に奇跡を捜している。

私はある人を捜している。その人は

罪を責めない

ありのままの私を受け入れてくれる

あらゆる争いを終わらせてくれる

私が自由になることを願う

私はある人を捜している。その人は

心から心配してくれる

大胆になりたいと思わせてくれる

私に現実を与えてくれる

末踏の地を歩ませてくれる

すべての人が神と呼べるそういう人を

私は捜し求めている

神証明の問題

著名なアメリカの新聞記者ルイズ・カッセルズは神の存在を証明する問題に直面しました。彼は言っています。

「神の現実証明できるだろうか。即座に単刀直入の答えを言えば、それはできる。しかし、それはあなた自身にしか証明できない。だれもあなたに証

明することはできない。なるほど神はいるらしいと理性的に信じさせるような多くの論理的論議があるが、究極的にあなたの疑いを解ける唯一の証明は、あなた自身で神の存在を経験することだ」(カッセルズ P.6)。

単に知的な観点から神を証明することは不可能であるというルイズ・カッセルズと私は同意見ですが、それでもなお、「神はいる」という方向で人を考えさせることのできるような多くの力強い、受け入れざるをえないような「指示」のあることも確かです。

神の存在の証拠を論ずる際に、私はあまり聖書を証拠資料として使いません。これには2つの大切な理由があります。

まず第1に、神の存在は聖書の前提であるということです。聖書は「はじめに神は……」(創世記1:1)という神の活動の単純な断言で始まり、全巻を通じて、神の存在は当然のこととして受け入れられています。ある神学者が次のように言っている通りです。「神の存在を証明するか論じようとする試みは、旧約と新約の著者のだれもが抱かなかったように見える。どこでも、またいつの時代でもそれは当然の事実である」(シーセン P.56)。

第2に、キリスト教の主張を調べている人や神の存在を疑って苦しんでいる人は、聖書が言っている以外の他の証拠を求めるとのことです。彼らは聖書の権威を疑っています。ですから、私たちは神の存在に対する合理的論理的証拠を考察するのです。

ア・ポステリオリの証拠

ア・ポステリオリの論証は観察された事実からの論証です。それは結果を見

て、原因に戻ります。それは原因を観察された結果の上に置きます。

人間の歴史上最大の知性の1人と考えられているトマス・アクイナス(1225-1274)は、神の存在を証明しうる有名な「キューインクエ・ヴィア」(5つの方法)を提案しました。この資料は、長い間有神論的文学の古典と見なされてきました。今日、これらの神への指示に新たな関心が寄せられているのは興味深いことです。

これらの「有神論的証明」は、当初、アクイナスによって思索する人に向けて書かれたもので、「神の存在を信じないことよりも信じることの方がなぜ聡明か」という理由を示すものでした(レイドP.162)。

運動

「動かされるものは、すべて他の何かによって動かされなくてはならない」。このような運動は無限の過程ではないので、究極的には「他の何ものによっても動かされない第1の運動の源」に戻りつくことになり、「このような源をすべての人は神と理解している」。

これは、アクイナス自身の言葉で言うと、動かされない運動を起こすというアリストテレスの脱キリスト教概念と同じ思想です。自然における本質と運動を分析したあとで、アリストテレスは第1運動者、もしくは第1原因は存在しなければならないという結論に達しました。彼のこの結論を調べてみると、彼は自然を通して神の存在を知るに至り、すべての自然はその存在を神に依存していると確信するに至ったことがわかります。この第1原因なくして、存在してきたものは何一つとしてありません。

因果律

何物もそれ自体が原因であることは不可能です。原因が限りなくさかのぼることは、不可能であり矛盾しています。どこかに第1原因がなくてはなりません。「故に我々はある第1の原因を仮定する。そしてすべての人はこれを神と呼ぶ」

実際のところ、これはアクイナスの運動概念に何もつけ加えていませんが、運動と因果律が一緒になって、いわゆる「宇宙論的論議」を構成するようになる多様な論議です。この論議は13世紀にアクイナスによって最初につくられて以来、わずかの著者や科学者を除いて少しも反論されませんでした。

可能性と必要性

アクイナスの第3の論議は可能性と必要性からとられたもので、それは次のようなものです。私たちは経験によって、すべてのものは相互に依存し合っており、事実各自はその存在を相互に依存していることに考えつきます。物質は存在することも存在しないことも可能です。現にあることもないことも可能です。しかし、すべてのものが常に存在することは不可能です。だが、もしすべてのものが存在しないことがありえるとしたら、同時に存在するものは何一つありえなかったかもしれません。しかし、これは非論理的です。なぜならば、無からは何も出てこないからです。そうすると、存在が必要な何かが無くてはなりません。必要性によって常に存在していたものは、「すべての者が神として語っている」ものです。神以外のすべてのものは、存在するためには他の何かに依存しています。

存在の段階的变化

完成の段階は宇宙に存在しています。「種々の存在の中には、善、真、高貴、その他のことで上下の差がある」。これらの存在は、「すべてのもののうち最も偉大なものに近づくいろいろな度合に応じて」良いとか良くないとか言わ

れます。言いかえると、宇宙にはそれ自体完全で「我々が神と呼んでいる」ところの比較の基準が存在しています。

世界の統治

これはより一般には目的論的論議とか意図からの論議で知られています。宇宙の秩序と配置は、その背後に知性と目的の存在を暗示します。「物質」は存在するが「知ること」はしません。にもかかわらず、物質は偶然によってではなく、設計、意図によって目的を遂げます。この意図はそれ自体で存在するものではないので、ある知的な存在、「それによってすべての自然界の物質が目的に方向づけられるもの、すなわち、我々が神と呼んでいる知的存在」のうちに見い出されなければなりません。

トマス・アクイナスの「5つの方法」は、相互に関係している5つの独立した論議、あるいは5つの面をもつ1つの証明と考えられるかも知れません。キリスト教哲学者の中には、これらの論議の全体は1つの論議と見るべきであり、これこそアクイナスの最初の意図であったと言う者もいます。私は、アクイナスの論証の筋道にはいくつかの欠点があり、彼の考え方を攻撃した人たちもいたことを認めます。しかし、またこの論議は全体として見るとき累積的結果を生み出すことも確かです。この論議は確かに聡明で自由な、そして永遠で測り知れないほど偉大である存在、あるいは第1原因者を示す「指示」の役目を果たすものです。これらの「証明」の基本的な欠点は、それらは人格と愛をもつ神、人間と世界に応える神のことを説明しないということです。しかし、これについてはあとで見ることになります。

ア・プリオリの証拠

ア・プリオリは、原因から結果に至る論証の形式を意味し、自明なことを知ること、観察や経験を離れて真理であると認めることを意味します。この意味で、神の存在のア・プリオリな論議は、すべての人間のうちには、超越している何者かへの責任を認めるものが深く存在している、と告げます。

本体論的論議

本体論的（オントロジカル）という言葉は、「存在」を意味するギリシャ語のオントスから来ています。中世の時代に、カンタベリーの聖アンセルムス（1033-1109）という非常に独創的な思想家である聖職者がこの論議をまとめました。

アンセルムスは、「愚かな者はその心に神はない」（詩篇14：1）という聖句から始めました。アンセルムスにとって、人は神以上に偉大な存在を考えることはできませんでした。人間は絶対的真理の存在を信じる「知る」中心です。すべての人に神を知る能力が備わっています。これをもとに、彼は「最も偉大な考えうる存在である、神の概念そのものの中に神の存在を証明」しようとしてきました。

アンセルムスの言葉は、神の存在を証明していませんが、神は存在しているに違いないこと、また神は、無限で完全であることを示しています。神は最も真実で高い意味の存在です。神の存在は証明されませんでした。私たちの知力^dはそれ以外のことを考えることを私たちにゆるしません。

生来の神概念

生来の神概念という概念は、本体論的論議と同じものです。その最も単純な形において、その観念はあらゆる人がその心に神の概念を植えつけられて生まれてくると言います。人間は年をとるにつれて、神概念もはっきりし、強くなってきます。この印象から、神はいるに違いないという観念が生まれます。

さて人間がもつ概念は、非常にはっきりしている場合とわずかに意識のはしにのぼる場合とがありますが、危機的な時にそれは突然生きてきます。

別の言い方をすると、人は「生まれながらの」宗教的性質や意志、思考といった究極的な能力を持っています。現代のプロテスタント神学者ヘンリー・シーセンは、神の存在を知ることは<直観的>なものであることを信じる信仰を支持しています。彼は「聖書も歴史も神への信仰は普遍的であることを証明する」と言っています（シーセン P.55）。

歴史と人類学は、人間の性質の宗教的要素は合理的、社会的要素と同様、普遍的であることを具体的に示しています。「この至高の存在は、実際にどこでも同じ形、同じ強さでというわけではないが、原始的文化をもつすべての人の中に見いだされる。それは今なお求めるところで、この支配的立場を確実なものにするほど顕著にあらわれている」（同）。

人間の有限性

私たちは、絶えず私たちの限界を思い知らされます。アリストテレスによると、人間は自分が有限な存在であることを知ります。「人間は自己の有限性の感覚をもっています」（ラム P.90）。

今世紀に、人間のもろさが大いに意識されてきました。私たちは悲観主義の時代に生きています。戦争の恐怖、核による絶滅の脅威、人間に対する人間の非人間化のその他の形態は、人々に現代人の知恵と良識を疑わせてきました。ある現代の文学は人間の有限性を強調しています。

虚無感（ニヒリズム）^eは現代の多くの人々、時に若い世代の心をとらえているように思われます。

人間が自己を小さく、孤独であると感じるときに、彼を超えたある源からの力と慰めと支えを求めるとはしないのでしょうか。人間が無限の存在、神に直面するのは、彼が深く自己の有限性を感じる時です。ある神学者は、すべての人の中に「依存感」のあることを認めています。次の段階は、無限者なる神は人が依存できる、また依存しなければならないおかたであることを認めることです。

価値論からの証拠

価値論は、「価値の研究」を意味する哲学用語です。価値論からの証拠には、神の存在を示す重要な指示として2つの意味深い領域があります。両者は人間のうちにある価値認識から生まれてきます。最初は道徳的価値を扱い、2番目は美的価値に関係するものです。

道徳的論議

ドイツの哲学者インマヌエル・カント（1724-1804）は、トマス・アクイナスの5つの方法は空論で、道徳的存在者としての神のいかなる知識をも証明していない、と信じていました。そこで「良心」に基づいて、彼は、自由と不滅と共に神の存在を論じています。

C・S・ルイス（1898-1963）^gとかカール・ユング（1875-1961）^hのような偉大な知性の持ち主も、すべての人は歴史と人類学に知られたあらゆる民族、年代、文化に存在していた「道徳的感覚」を持っていることを信じていました。ロゴセラピー概念の創設者である、偉大なウィーン精神分析医ヴィクトル・フランクル（1905- ）は、最も基本的な人間の必要の1つは「意味への意志」である、と信じています。人間は、ほとんどどのような苦難にもその目的

がわかりさえすれば耐えることができる、と彼は言っています。反面、人間は、もし人生を意義深くする何か大きな力に自己の人生を関連づけることができないと、富の真只中でさえも悲惨な状態になります。

組織神学者のオーガス・ストロングは述べています。

「良心は至高の権威をもつ道德律の存在を認める。この道德律の既知の違反は、無価値の感情と審判の恐れに伴うものである。道德律は、自己で自己に課するものではないから、またこれらの審判の脅威は、自己で自己に行使するものでないから律法を課している聖なる意志の存在と、道德的性質の脅威を行使する刑罰を与える力の存在を各々主張している」(ストロング P.82)

言いかえると、「良心は偉大な律法の賦与者である神の存在と、神の律法を犯すすべての違反に対する刑罰の確かさを認めているのです」(シーセン P.62)。

美的論議

美的論議は美の感覚が人間に普遍的に存在しているとの推定に始まります。宇宙の崇高なもの、美しいものは「人格的」神の存在の直接的証拠と見られます。たとえば、自然の中には、花、太陽、木の間に色彩の不一致はありません。人間の形、動物の生活、海には調和と美があります。

人間が美的能力をもって周囲の美を認識し、鑑賞することができるという事実は、この普遍的な美的価値の強力な証拠です。「美」と言われていること概念は、文化の違いによって変化するかもしれませんが、これが本質ではありません。本質は、だれでも普通の人間であれば、そのうちに、美の感覚、魅力的なものに判断を下す能力があるという点です。さらに、人間には、自分自身で美を創造する能力と技術、たとえば芸術、交響楽、歌、詩、建築物といった面があります。

なぜ、世界の美と人間の美的能力と鑑賞力がそれほどうまく一致するのでしょうか。それはデザイン（意図）によるものであるにちがいません。意図は知的能力を暗示し、知的能力は人格を予想します。このことは私たちを再び神につれ戻します。

〈それ〉ではなく〈彼〉としての神

信仰体系は、説得され論証されることによってではなく、受け入れる態勢のある人によって受け入れられる傾向があります。たとえば、この課の始めにあげられたリサの苦境に戻ってみましょう。彼女は無神論者であることを認めました。もし彼女が、神の存在に対する公理的な証拠に直面していたら、どういう結果になっていたか、私たちにはよくわかります。どんなに論理的な論議が明らかに示されたとしても、リサは、それらを受け入れるのにふさわしい心の状態ではなかったのです。

合理的な思考がなしうる最善のことは、神の存在を示す一連の（指示）を示すことです。そのうちのいくつかを、また、すべてを受け入れることができたとしても、せいぜい第1原因、至高の存在、偉大な知性を洞察したにすぎません。これは信仰の行為ではなく、意味のある方法で提示された明確な証拠による論理的仮説への知的同意にすぎません。

今まで、前述の詩は別として、私たちは神は人格的属性をもった存在というよりも（それ）であることをほのめかしてきました。特に、もし何も理由があげられない場合は、知らないうちに神に対して固有名詞が使われてきた変化をあなたは直ちにつかむことでしょう。しかし、神は、「それ」よりも「彼」であることを知ることは必要です。

時間と空間の創始者は、明らかに私たちのように時間と空間に制限されません。神はあらゆる人間の範疇を超越しています。しかし、このすべてが語られるとき、神を「彼」として語ることのほうが自然となるでしょう。ルイズ・カッセルズはこの点をこう言っています。

「われわれは固有名詞を用いて神に言及する。なぜならばわれわれには生ける存在、思考する存在、目的をもった存在の属性である人格があるからである。それは、われわれの理性で観察しうる創造された宇宙の最も高度で複雑な現象である。「あらゆる存在の根拠^k」として、神はわれわれが人格性を究極的に考えようとする場合の思考を、無限に超えている存在である。彼は確かに生ける人格以下の存在ではない。それ故に、われわれが神を「彼」と言うのは、われわれが神を人間学的に考えているからではなく、われわれが有する固有名詞で最も不適切でないためである」（カッセルズ P.10）。

ロンドンの大学の物理学教授であり、英国科学普及会の天文学教授でもある英国の科学者ロバート・L・F・ボイド教授は、神が人格である点を理解する上で私たちに助けを与えてくれます。彼は3種類の知識——数学的知識、科学的知識、人格的知識を論じています（ボイド P.10-11）。

純粋数学において、知る側は孤立しています。彼の知識は彼が造った公理の結果です。公理が自然界に関わるまでは、数学は不毛です。そこには単に「われとそれ以外に何も無い」関係があるだけです。もっとも、そのような関係を関係と呼べればの話ですが。

一方、科学的知識はデータを外部に、すなわち物質界に求めます。これが世界の新しい知識となります。科学者は立って現象を観察しますが、現象のほうは、ふり返ったり応答したりすることはしません。彼は最高の立場に立ち、「われとそれ」関係をとっています。

人格的知識を獲得する主たる手段は「出会い」によるものです。これは経験的知識とも呼ばれます。経験による知識は時にはもっと広く定義されますが、私は「われと汝」という表現をその関係に用いています。観察は純粹な出会いと精神の交流との代わりになりません。人格的出会いは自己啓示を含み、自己をあらわす「われと汝」の関係を含んでいます。

この3番目の知識の範疇に、私たちは神を「それ」よりも「彼」として見ます。1,000年以上も前に聖アウグスチヌスが言っている通りです。「あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」(告白、第1巻第1章)。

挑戦

聖書のアプローチ全体は、聖書が人格をもつ愛の神の存在を前提としている点で、これまで論じてきたものとは違っています。しかし、別の相違もあるのです。聖書は人間が神を探求していることよりも神が人間を探求していることを記録しています。神が存在することを確信し、あとはひとつ別の哲学的問題を解いたと思って、神とは無関係に生活するだけでは十分ではありません。

これまで言及してきたあらゆる点にもかかわらず、問題は論理的推論で神の存在を「証明する」ことではありません。むしろ神が私たちのために行動され、ご自身を知らされたことが問題なのです。

神は確かに存在します。第1原因、動かされない運動者、すべての存在の根拠、あなたが用いたければ他のどんな哲学的用語を用いても結構です。しかし、大切なことは、彼は歴史を通じて人間の状況に語りかけ、行動してきた人格であるという点です。彼は最初アブラハムに語り、旧約聖書が記録しているように、それから彼の預言者を通して語ってきました。そして最後には、それ以上は不可能という最高の方法で、彼は御子イエス・キリストの受肉によって語りました。

この課を終えるにあたって、私はあなたが神に直面するようにあなたにチャレンジしたいと思います。神の存在をためしてみてください。私は、一方で神についての疑いで苦闘していたひとりの正直な学生が次のように祈ったのを聞きました。「神よ、もし神がいるなら、あなたがわかるように、あなたを知ることができるよう助けて下さい。あなたに愛があるなら、私を愛して下さい。私を必要としているなら、私のところに来て下さい。アーメン」。

あなたはきっと神について多くの友人と語ったことがあるでしょう。きっと

この課を自分にあてはめてみたことでしょうか。あなたはおそらくこの重要な問題をしばしば思案し、考えてきたことでしょうか。もう一步進んで、自分自身で神に語りかけて下さい。その瞬間に神がとても近くにいることが感じられないにしても、親友に話しかけるように彼に話してみてください。そうすれば、あなたは「冷たい証明」のレベルから、「われと汝」という人格的出会いの領域に飛躍するでしょう。

あなたが始める場所が必要だと感じるなら、前に引用した同じ祈りの詩をくり返すとよいでしょう。あるいは、以下のような言葉で神に語ってみてはどうでしょう。

人はひとつの存在を恐れ

ひとつの存在を敬うことができる。

しかし、人は父なる神を愛する

ご自身が愛そのものであるお方を。

父よ、あなたに対する

このような無条件の愛を私に下さい。

他の人が自分の神々をつくり出そう

とするなら

私にとってそうならないようにして

下さい (ゲッシュ P.60)。

引用参考書——第2課

- 1 . Berger, Peter L. *A Rumor of Angels*. (天使の噂) Middlesex, England: Penguin Books Inc., 1970,
- 2 . Boyd, Robert F. L. *Can God be known?* (神を知ることができるか) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.
- 3 . Cassels, Louis, *Christian Primer*. (キリスト教の初歩) Garden City, New York, USA: Doubleday and Company, Inc., 1964.
- 4 . Fremantle, Anne. *The Age of Belief*. (信仰の時代) New York, New York, USA: The New American Library, 1954.
- 5 . Gesch, Roy G. *Help! I'm in College*. (助けて下さい。私は大学にいます) St. Louis, Missouri, USA: Concordia Publishing House, 1969.
- 6 . Lepp, Ignace. *Atheism In Our Time*. (われわれの時代の無神論) New York, New York, USA: The Macmillan Company, 1968.
- 7 . Ramm, Bernard L. *The God Who Makes a Difference*. (違いを生じさせる神) Waco, Texas, USA: Word Books, Publisher, 1972.
- 8 . Reid, J. K. S. *Christian Apologetics*. (キリスト教弁証論) London, England: Hodder and Stoughton, 1969.
- 9 . Strong, Augustus H. *Systematic Theology*. (組織神学) Old Tappan, New Jersey, USA: Fleming H. Revell Company, 1970.

-
10. Thiessen, Henry Clarence. *Introductory Lectures in Systematic Theology*. (組織神学緒論) Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1956.
 11. Titus, Harold H. *Living Issues in Philosophy*. (哲学の問題点) London, England: Van Nostrand Reinhold Company, 1970.

今後の学びのために

Bierman, A. K. and Gould, James A. *Philosophy For A New Generation*. (新世代の哲学) London, England: The Macmillan Company, 1970

54, 55章は有益で興味深い哲学的本文と同時に、神の存在を合理的に論じている聖アンセルムスとトマス・アクイナスの実際の原文を含む。

Boyd, Robert F. L. *Can God be known?* (神を知ることができるか) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.

この16ページの小冊子は、第1課で論じられた認識論の問題に関してすぐれている。3種類の知識について語っている点でこの課においても有益であった。

Brown, Colin. *Philosophy and the Christian Faith*. (哲学とキリスト教信仰) London, England: Tyndale Press, 1969.

1章で神の存在の古典的論議が論じられている。しかし、この本全体がキリスト教と哲学に関心をもっている人たちに最適である。

Cassels, Louis. *Christian Primer*. (キリスト教入門) Garden City, New York, USA: Doubleday and Company, Inc., 1964.

1章は特にこの課の主題をよく説明している。

Frankl, Viktor E. *Man's Search for Meaning*. (人間の意味探求) New York, New York, USA: Washington Square Press, 1963.

厳密な意味で宗教書ではないが、第2次世界大戦のナチ強制収容所の内部で知った、生きる支えとなる信仰に対する人間の必要の感動的直接的記録である。

Reid, J. K. S. *Christian Apologetics*. (キリスト教弁証論) London, England: Hodder and Stoughton, 1969.

第6章はこの課の主題、特に神の存在の合理的「証明」に関連している。

Strunk, Orlo, Jr. *The Choice Called Atheism*. (無神論の選択) Nashville, Tennessee, USA: Abingdon Press, 1968.

第1章が特に無神論と不可知論に関する第1課の部分にあてはまる。

Titus, Harold H. *Living Issues in Philosophy*. (哲学の問題点) London, England: Van Nostrand Reinhold Company, 1970.

この本には、このコースの第1課の主題である認識論に関する非常に良い箇所がある。また、この課の主題に関しても良い資料となる。価値論に関して19章、宗教に関しては24章を見るとよい。これは哲学用語の非常にすぐれた解説書ともなっている。

自 習

1 新約ロマ 1 : 1—2 : 29 を読みなさい。

人と神との関係について、1 : 18—25 から何を学びますか。.....

.....

1 : 18—19 と 2 : 13—16 中に、神の存在に対する道徳的論議のどのような根拠を見いだしますか。.....

.....

2 以下の見出しで提示された証拠の長所ないしは肯定的な面を簡単に書きなさい。

ア・ポステリオリ

ア・プリオリ

価値論

3 もし至高の存在があなたに意味をもつなら、そのような実在は人格的な属性をもち、人間に関わりあうことができると考えられますか。あなたの意見では、なぜそうなりますか。また、なぜそうではありませんか。

.....

4 人格的な出会い——「われと汝」の経験によって、神の実在を発見したいと思いませんか。.....

.....

5 あなたの最も深い思い、夢、疑問を言い表わすような神への祈りを短く書きなさい。.....

.....

自習のガイドライン

以下の解答は、あなたの考えた答えにあるべき内容を示唆したにすぎないことを忘れないように。

1 人間は神の啓示した真理を受け入れないことを故意に選んできました。この反逆の結果、今日の人間は神の怒りを見る状態に落ちこみました。しかし、それでもなお人間は神をあがめ、神に感謝する地点に戻っていません。18, 19節でパウロは、人間は良い正しいことを知ることができるし、知るべきである。なぜなら神はすべてのことを彼に明示しているから、と述べています。人間のうちには「道徳的感覚」ないしは「良心」が現存し、人間はそれらを無視する道を選びました。これは道徳的論議です。2章13—16節で、パウロは、善悪を示すのは書かれた律法ではなく「心に書かれた律法」と主張しています。人間には生来良心というものがあって、その良心によってさばかれ、「対立する思い」や与えられている良心に従わない者は罪ありと訴えられます。

2 ア・ポステリオリの神の存在証明は事実深く根ざしています。方法論は科学的方法のそれです。現実のものから始めて、原因を捜し求めます。

ア・プリオリ論議は人間のうちにある宗教的要素（人間の有限性も含む）の普遍性に訴えます。それは普遍的なものですから、妥当性のある土台をもたなければなりません。

価値論の論議も善悪概念の普遍性に訴えます。もし律法や道徳があらゆる文化、あらゆる時代に現存するとするなら、あるものがある人が人間のうちに律法や道徳感覚をつくらなければならないでしょう。

3 この答えは、あなたがどのように考えるかという立場によってまったく

違ってきます。神を人格的属性をもつ者として見る理由には「美的論議」であげたもの、カッセルズの言葉、ボイドの論議、あるいは単にあなたが属している宗教的文化が入ってくるでしょう。この立場をとることのできない理由には、何よりも神の存在に関する疑いがあげられるでしょう。

4 あなたの答え

5 あなたの答えですが、以下のことを含むでしょう。

- あなた自身についての気持ち、あなたの長所と短所、あなたの良い点と悪い点、物事をやりとげた喜び、無価値の感情。
- 人生と神、存在一般の意味と特にあなたの人生の意味、悪と悲惨の理由。
- この世とあなた自身の人生における未来への希望、あなたのことやあなた自身から価値あるものをつくり出したいという特別な渴望。
- 非常に一般的なもの（「私は私の人生に何をすべきかを知りたい」）か、非常に特別なもの（「私は安い場所に滞在したい」）とについて知りたいという必要、その必要が満たされたいという必要。
- あなたが感謝していること、よさを認め価値を認めるようになってきたもの、それらを失うと人生の目的を果たせなくなるようなもの。

自己採点復習

1 無神論者，不可知論者，クリスチャンは神の概念に対して別々の態度をとっている。各自に基本的な構え，訴え，欠点（論議のレベルで）がある。これらの論議はどのグループが用いるだろうか。論議の前に適切な番号を語群から選んで書き入れなさい。

- a 神を含めて何をも確かめることはできない。
 - b だれでも彼にとって「神」となる何かをもっている。
 - c 人は幸福な生活をおくるために神を必要としない。
 - d 神の存在はあらゆる疑いを除いて客観的に証明することはできない。
 - e 神を信じることは心理的弱点のしるしである。
 - f 愛のない宇宙で我々は孤独である。
 - g 神は個人的に神を経験することによってのみ証明されうる。
- 〈語群〉 1) 無神論者 2) 不可知論者 3) クリスチャン

思考の刺激：あなたの経験と人生の知識に照らして，これらの叙述の欠点は何ですか。

2 神の存在のア・ポステリオリ論議についての以下の文を完成しなさい。空欄に答えを書きこみなさい。

- a 「5つの方法」は.....によって考え出された。
- b 運動の法則は.....を指し示す。
- c 第1原因からの論議は.....論議である。
- d 完成の段階は.....の存在を示唆する。
- e 意図からの論議は.....論議である。
- f これらの論議の1つの欠点はそれらが.....としての神しか指し示していない点である。
- g これらは神の存在に対する証明でなく，.....である。

思考の刺激：あなたは宇宙の存在理由と宇宙の秩序を認めますか。あるいは、生命の発生と成長における偶然説は統計的に支持しがたいと言っている生物数学者に反対しますか。

- 3 神の存在のア・プリオリ論議についての言葉を完成しなさい。空欄にあな
たの答えを書き入れなさい。
- a 本体論的論議は最初 によって述べられた。
 - b 思索する人にとって、神は である。
 - c 神の観念は であるとも論じられることがある。
 - d 神の信仰の普遍性は、信仰が であることを示している。
 - e 対照的に人間は である神の存在を認識する。

思考の刺激：あなたの地域社会において、どういうものが合理主義への不
満と「依存感」への回帰を（いかにまちがって教えられよう
とも）示していますか。（ESP——超能力、麻薬経験、占
星術、オカルトの流行を考えればよいでしょう）

- 4 以下の叙述のうち、どれが価値論からの論議と調和しますか。正しい叙述
に相当するものを○で囲みなさい。
- a) すべての人には生まれながらにして善悪の感覚がある。
 - b) 人生に意味があれば、人は悲惨にも金持ちにもなりうる。
 - c) 良心は神の存在を律法の賦与者として認識する。
 - d) 美の普遍的感覚は設計者・創造者の存在を暗示する。
 - e) 芸術家は審美感が鋭いので非常に宗教的である。
 - f) 「美は真実であり、真実は美である。これが地上で汝が知るすべてであ
り、汝が知る必要のあるすべてである」（ジョン・キーツ）。
 - g) カントは価値論を土台に論議を体系化した。

思考の刺激：あなたは（道徳的、美的）価値からの論議を、これまでの論

議以上に多少なりとも有効であると思いますか。あなたの人生にこれらの価値はどれほど基本的なものでしょうか。

5 知識の種類とボイドによってあげられている名称と示唆されている関係をつなぎなさい。空白に適切な名称と関係を下記から選んでその番号を書き入れなさい。

a + 知識 (人格との出会いによる)

b + 知識 (公理から創造されるもの)

c + 知識 (データの観察による)

- 1) 数学的 2) 科学的 3) 人格的 4) われと汝 5) われとそれ
6) われとそれ以外の何ものでもないもの

思考の刺激：人格としての神観念は創造的力（それ）としての神よりあなたに意味がありますか。人格的な神は神の被造物の知的存在にご自身を知らせたいと願っているとあなたは考えますか。

自己採点復習解答

- 1 a 2)
b 3)
c 1)
d 2) と 3)
e 1) と 2)
f 1)
g 3)
- 2 a アクイナス
b 第1運動者・原則
c 宇宙論的
d 完全な基準
e 目的論的
f 創造者・第1原因
g 指示
- 3 a 聖アンセルムス
b 考えうる最も偉大な存在
c 生来のもの
d 直観的
e 無限
- 4 a), c), d), g)
- 5 a 3) + 4)
b 1) + 6)
c 2) + 5)

- a カミュ (1913-1960) とサルトル (1905-1980) は、両者ともフランス人で最もよく知れわたった現代の実存主義哲学者である。2人の著書は現代の思想に多大の影響を与えた。
- b アリストテレス (B.C. 384-322) はギリシャ人でプラトンの弟子。彼の時代に知られていたほとんどすべての科学について書いたと言われる。
- c 私は聖アンセルムスに対する反論を知っている。彼の本体論的証明は最初アンセルムスと同時代人の僧グアニコによって攻撃された。彼は「愚者のために」この論議を非難した。トマス・アクイナス (1225-1274) はその証明を否定した。ダンス・スコタス (1265-1308) はそれを言い直した。レーネ・デカルト (1596-1650) はそれを再確認した。ゴットフリート・ヴォン・ライブニッツ (1646-1716) はそれを修正した。インマヌエル・カント (1724-1804) は反論した。ジョージ・ヘーゲル (1770-1831) は改造し、再確認した。ほとんどの現代哲学者はカントによる批判が決定的であると考えている。しかし、最近、アメリカの哲学者V・マルコムとC・ハートショーンによってそれは再生されてきた。神の存在は論理的に必要か論理的に不可能かのいずれかである、と彼らは言う。論理的に不可能であるとは証明されてこなかったもので、それは従って論理的に必要である。にもかかわらず、私の目的は決定的な証拠を示すことではなく、単に神への指示としての本体論的論議を提示するにある。(聖アンセルムスへの反論の要約はフリーマントルP.88によってあげられている。)
- d アクイナスとアンセルムスの実際のテキストの翻訳については、ビエールマンとゴウルドの「新世代の哲学」54—55章を参照のこと。
- e ハロルド・H・テトスの「哲学の問題点」P.542によると、ニヒリズムは通常以下の社会的教義に言及する。すなわち、社会状態があまりにも悪いので現在の社会秩序は、より良い何かの余地をつくるために一掃されるべきか破壊されるべきである。
- f 使徒パウロもローマ人への手紙の中で、この基本的論議を用いたことをここで注目するのも興味深い (ローマ1:19, 32, 2:14—16を参照のこと)。
- g C・S・ルイスは、不可知論からキリスト教に転向した英国の作家であり教授であった。彼はキリスト教に関する著書で有名である。
- h カール・グスタフ・ユングはスイスの心理学者、福音派の牧師の子であった。彼はフロイトから多大の影響を受けており、心理学に新しい共通用語「内向」と「外向」を導入した。

- i ヴィクトル・E・フランクル「人間の意味探究」(ニューヨーク, ワシントン, スクウエ社, 1963)。ロゴセラピーという用語は、意味をあらわすギリシャ語のロゴスから来ている。ロゴセラピーは「人間の意味探究と同時に人間の存在の意味に焦点を合わせる」。フランクル博士によると、「何とかして人生の意味を発見しようとする努力は、人間の中に動機づけを与える主な力である」。サイコセラピスト(精神療法医)として、彼は精神分析によって行われている過去を強調することよりも、未来を指し示すためにロゴセラピーを用いている。患者は人生の意味に直面し、それに向かって再度方向づけられる。
- j 確かに、これらすべての論議には批判の余地がある。私はこれらの論議は「水ももらさない」完全なものであると思っていない。しかし、これらの項目には、神の实在を説得力をもって指し示す集合的な力がある。
- k カッセルズは、ドイツの神学者ポール・ティリッヒ(1886-1965)がつくった用語を用いている。
- l オーストリアのユダヤ人哲学者マルチン・ブーバー(1878-1965)が、最初に「われと汝」「われとそれ」という対話用語を作り出した。この主題に関する彼の本は、初期の草稿では1919年の秋の日付けになっているが、実際に「われと汝」という題で出版されたのは1923年であった。
- それ以来、上記に引用したロバート・ボイド博士を始めとする多くのキリスト教思想家たちは、イエス・キリストとの人格的出会いを説明するのに「われと汝」という用語を用いてきた。しかし、ユダヤ人であったブーバーは、「汝」をキリストではなく神ご自身と考えた。この学習では、この用語は人とイエスとの出会いを論じるために用いられている。
- おそらくブーバーのドイツ語作品の最善の英訳は、ウォルター・カウフマン「われと汝」ニューヨーク, チャールズ・スクリブナーズ・サンズ, 1970であろう。

第3課

イエスについて

前の課において試みてきたことは、思考を用いてこの課程を続けるように励ますことであり、神を示す多くの「指示」のいくつかを示すことであり、神を人格の持ち主として認識できるようにさせることでした。

これまでは、イエス・キリストについてほんの少ししか語ってきませんでした。しかし、この課では、この人とこの人の主張をもっとくわしく調べてみるつもりです。この課であげられる証拠は、彼がその宣言通りの人物であり、その主張も現代の状況に適合することを信じるに足るものを選択しました。

クリスチャンの人生観は肯定的です。それは「ノー」ではなく「イエス」です。それは目的をもっています。クリスチャンとして、私たちはイエス・キリストが主張通りのお方であることを受け入れて、イエス・キリストを通して人生の意味への解決を発見したと感じています。それは、ほら穴からとび出てまばゆい太陽の下に出るようなものです。突然、光が臨みます。あやふやでありまいな不安定な感情はなくなります。クリスチャンはこのすばらしい発見を、人々が「われと汝」というイエス・キリストとの出会いを持ちたいと思うような言葉で他の人に伝えようとしています。

1971年12月、87歳の世界的に有名な著述家、伝道者E・スタンレー・ジョーンズ博士が心臓麻痺にかかりました。5時間にわたって彼はまったく体を動かせないまま横たわっていました。彼の娘が病床に呼ばれました。彼女が到着すると、彼は彼女に気づき、大切なことを言いたい、と知らせました。

彼は弱々しいほとんど聞きとれない声で言いました。「娘よ、私は今死ぬわけにはいかない。“神の然り（肯定）”を書き終えるまでは生きなければならない」（ジョーンズ P.7）^b。大きな苦しみと困難の中で原稿は完成しましたが、彼は満足に見ることも書くこともできなかったため、カセットテープの助けをかりなければなりません。その本は彼の死後2年たった1974年の春に出版されました。

本のタイトルは使徒パウロの次の言葉から来ていました。「神の“しかり”は彼（キリスト）の中についに鳴り響きました。なぜならば彼のうちに神の全ての約束を肯定する“しかり”があるからです」（第2コリント1：19-20モファット訳）。

ジョーンズ博士は、全生涯をキリスト教の牧師としてほとんどインドの地で奉仕したあと、また麻痺の病気にかかったあとでも、確固たる確信をもって次のように言いきることができました。

「そして遂に、とうとう神の“しかり”は彼を通して響きわたった。イエスこそ“しかり”である。この宇宙の背後には全被造物を愛しておられる父なる神がおられる。この父はイエス・キリストのみ顔の中にあらわれている。人生は全く変わりうる。われわれの空虚さは、われわれの内外の生活のあらゆる場所が聖霊に占領されるに及んで完全に充足される」（ジョーンズ P.21）。

アウトライン

- イエスの神性
- イエスの復活
- イエスの目的
- イエスの弟子
- 挑戦

考えるための問題

1. 神が私たちに向かって「手をさしのべ」「私たちに話してくれるように」神に対して願う人間の求めの意義は何ですか。
2. 歴史家は「キリストの神話」にどう対処していますか。
3. イエスは道德家であると同意するだけで十分ですか。
4. イエスと他の3大宗教の創設者とをどのように比べることができますか。
5. あなたは弟子のペテロが経験したような人生の変化を経験した人に会ったことがありますか。
6. クリスマンにとって弟子となることは何を意味していますか。
7. あなたはイエス・キリストの人格によって個人的に挑戦を受けていますか。

用語の意味

- 公理的 —— 自明の真理として考慮される前提に関係するもの。
- 出会い —— 顔と顔を向い合わせる。会うこと。
- 終末論的 —— 宗教的待望における世の終わりとそれに関連した出来事に関するもの。
- 福音 —— キリストと神の国と救いに関する良い知らせ。福音が大文字で書かれた新約の最初の4巻は、イエス・キリストの生涯と死と復活を伝えている。
- 受肉 —— 肉体をとり、実体をとっていること。イエス・キリストにおける神性と人性に関係する。
- メシヤ —— ユダヤ人が待ち望んでいた王，解放者。ある希望や主義をもった自称の，もしくは認められた指導者。

学課の展開

「神が私に御手をさしのべて、御顔をあらわし、私に語ってくれるとよいのだが！」

これはイングマー・バーグマンの「第七の封印」に出てくる登場人物の懇願です。

文学には、人間の絶望と宇宙における孤独感を表わしたこのような流暢な表現が多くあります。おそらく最も痛烈な例は、妻の死を聞いたマクベスの口に以下の言葉を入れたシェークスピアの強力なペンから来ているものでしょう。

「……消える、消える、短いろうそくが、人生はほんの歩く影、下手な役者。舞台の上で一生をいばって歩き、いらいらするそのあとでは何も聞こえない。人生は物語、白痴によって語られ、騒ぎと怒りに満ち、何の意味もないもの（マクベス5幕5場）」

このコースが書かれたものは、正にこの人間の絶望感と取り組むためなのです。

第1課で、私たちはあなたがこの教材の真剣な学びに身を入れることができるような事例をあげようとしてきました。第2課では、神を指し示す多くの指示をあげ、神は「それ」ではなく「彼」として最も良く表わされうることを確立することが目的でした。今、私たちはキリストの人格を考えなければなりません。

神は実際にご自身を啓示しておられます。人間は宇宙でひとりぼっちではありません。神は自然の中で私たちに語っているばかりか、御子イエス・キリストを通して私たちに御手をさしのべています。「御子（キリスト）は神の栄光

の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます」(ヘブル1:3)。「神の本質の完全な現われ」という言葉は、ギリシャ語のキャラクター(人物・性格)の翻訳です。古代のギリシャ人は、貨幣の表面の版画やシールやスタンプを表わすときにこの言葉を用いました。このようにして、聖書記者はこの表現を用いて、キリストは神の性質の「正確な現われ」であると言っているのです。彼は時間と空間において私たちと共にいたし、今も人間の歴史の一部となっています。それ故に、イエス・キリストの人格を注意深く、考え深く考察することはきわめて大切なことです。

イエスの神性

正統的キリスト教の教えは次のことを主張します。イエス・キリストは神であること、処女から生まれ、超自然的なわざを行ない、全人類の救いのために十字架で死に、死から復活し父なる神のみもとに昇天してあがないの計画を完成し、今は主の主、王の王として統治しているのです。何という主張でしょうか。教会だけではなく、イエスご自身もこのように主張しています。

さて、少し考えて下さい。これらはすばらしい主張です。これらの驚くべき断言に対して、考える反応を4つにしぼってみましょう。

彼は伝説上の人物であったか

イエスと彼の働きは伝説であるという説は、キリストの神性に対する最も重大な反対意見ですが、少数の人たちによって主張されているものです。この説の追従者にはいくつものグループがありますが、主に2つの方法で表わすことができます。ある人は断定的な言い方をします。「歴史家は今日イエスの歴史性を全く捨てている」(マクドウェル P.83)。

しかし、他の人たちは、たとえばカリフォルニア大の哲学教授アブラム・ストロールのような人は、もっと複雑な立場をとっています。彼は主張しました、「イエスといわれる人物はおそらく存在したであろうが、彼についての伝説があまりにも多くつくられたために学者がイエスの実像をさぐり出すことは不可能である」(モントゴメリー 1969 P.37)。

この見解をとると、イエスの弟子たちは人々にイエスの虚像を与えたと非難されていることになります。第1世紀のパレスチナ人は歴史を通じて預言者によって約束されていた「メシヤ」、解放者を求めていたので、この非難はもっ

ともらしく聞こえます。イエスの弟子たちは、イエスの神性の後期の主張を紹介しなければならなかったことになります。ジョン・W・モントゴメリー教授はこの見解が受け入れがたい理由をいくつかあげています（モントゴメリー 1965 P.66-72）。

第1に、ほとんどのユダヤ人がメシヤについて抱いていた考えと、イエスがご自身のことを語ったメシヤ像とは大きな違いがあったという点です。彼はユダヤ人の期待したタイプとはまったく違って、彼らの国から見ると貧弱な候補者であったでしょう。

第2に、イエスの使徒たちと弟子たちとは高度な倫理的基準をもっていた人たちであったという点です。そのような訓練を積んだ人たちとして、彼らには心理的にも宗教的にも倫理的にもイエスを神にまつりあげようとするようなことはできなかったでしょう。たとえば、神の御名は非常に尊厳視されていたために、ユダヤ人たちは神の御名を発音すらしなかったし、まして普通の人に神の御名を帰することは考えられないことでした。彼らの深い、幾世紀にもわたるこうした伝統を知れば、彼らがこのような物語をでっちあげたなどということとは信じられないことです。

第3に、復活の歴史的証拠は、イエスを神格化しようとした熱狂的な弟子たちの発明ではありえなかったという点です。イエスの生涯は彼の死後わずか数年内に記録されたものでした。初期の記録から神話か伝説が出てくるには十分な時間がたっていません。少なくとも、彼の生涯についての2冊の本は目撃者による記事でした（マタイとヨハネによる本）。他の著者たちも確実に目撃者による記事と他の主要な資料を入手したでしょう。

実際は、イエスの弟子たちは新約聖書の記録ではなかなか信じられない者、疑いやすい者として描かれています。確かに彼らは、世界の多くの人たちをおよそ2000年にわたってイエスが神であることを信じさせることができたよう

な、イエスの伝説を考えるような人たちではなかったのです。これは鋭い攻撃にはちががありませんが、この説は不適當で不可能な説としてしりぞけなければなりません。

歴史的イエス・キリストは存在しないとする教義は、彼の実在を示す豊富な証拠を無視しているにすぎません。英国マンチェスター大学の聖書批評学と釈義の教授F・F・ブルースは、以下の言葉をもってこのようなアプローチの欠点を表明しています。

「ある著者はキリスト教神話の幻想をもてあそぶかもしれないが、彼らは歴史的証拠を根拠にそのようなことはしていない。キリストの歴史性は偏見のない歴史家にとってジュリアス・シーザーの歴史性と同様自明のことである。キリスト神話を言い広める者は歴史家ではない」（ブルース P.119）。

彼は嘘つきか

イエスは故意に人々をだましたのでしょうか。この非難はほとんどの人にとって考えられないものです。彼の神性を信じていない人たちでさえ、彼が善人であったことを、ふつうなお信じているからです。彼らは彼を高度な倫理的道德的基準を持った人、偉大な教師、偉大な道德哲学者、偉大な模範として賞賛します。

アメリカ人となったブリトン人トーマス・ペイン（1737-1809）は、彼の「理性の時代」という本の中でキリスト教を激しく攻撃しました。しかし、この強烈なキリスト教の反対者はイエスについてこう言っています。

「ここで言われていることは、イエス・キリストのリアルな人格に対してかすかな輕蔑をもってさえも適用することができない。彼は有徳の優しい男であった。彼が伝え、実行した道德は最も慈悲深いものであった。同じような道德体

系は孔子によって、ギリシャ哲学者の何人かによって、また、あらゆる時代の多くの善良な人間によって昔伝えられたものではあったが、それは他を寄せつけない群を抜くものであった」(フォーステス P.200-201)

イエスは世界最大の道徳家でした。彼は同時に陰険ないかさま師になりえたでしょうか。

「善良な」人間が、実際そうでないのに、肉体をとった神と主張して大衆をわざとだますでしょうか。彼は当時の人々に、悪魔は偽り者の父であり、偽りを言う者は悪魔の子であると熱心に宣言しました(ヨハネ8:44参照)。彼は自分から神の子であると主張しました。もし、彼の神性に対する主張が拒絶されるとしたら、彼の全生涯、働き、教え、名声は今日の私たちにあまり意味がなくなります。

しかし、彼の生涯、働き、教え、名声はすべて神性に対する彼の主張を固く支持しました。彼はご自分についてこう言いました。

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい」(ヨハネ14:10-11)。

イエスは嘘つきという評判がたちませんでした。この攻撃は支持できません。健全な倫理哲学も支持しないでしょう。

イエスは気違いであったか

イエスを最も偉大な道徳家と受け入れても、神の御子としては受け入れられない人たちの唯一の道は、彼は精神のバランスを欠いていた、おそらく自己をあざ

むいていたと信じることです。これはとても納得のいく結論とは思えません。というのは、精神のバランスを欠く人間が歴史上最大の偉人の列に加えられるほどの仕事を成し遂げそうにもないからです。

それでもそのように信じるほうを選択した、偉大な人たちが何人かいます。有名な人道主義的医者また哲学者のアルバート・シュバイツァー(1875-1965)はそのような人でした。「史的イエスの探究」という彼の本の中で、彼はイエスが自己の性質を誤解したという立場をとりました。それから彼は、イエスを精神病の非難から弁護する必要があると感じました。ストラスブルグ大学に提出された彼の1913年の医学論文は、「イエスの精神病的研究」という題がついていました。彼は、人間イエスは「正常な状態であったかもしれないが、自己を世の終わりに世をさばくために天の軍勢と共に再び来る終末論的人の子と考えた」ことを示そうとしました(モントゴメリ P.63-64)。

シュバイツァー博士の仕事は、歴史的な文脈の中でイエスを説明しようとした正直な人間の試みでした。しかしながら、彼の説明が不十分なことは、イエスについての彼の前提に従う人、受け入れる人や学者が少ないことによって証明されています。

もし彼が受肉した神の御子であると自分を考え、しかも実際はそうでなかったとしたら、イエスは狂っていたという結論を避けることはできません。しかし、イエスの健全な教えを考えると、彼が精神的に狂っていたとはとても受け入れることはできません。事実はその逆でした。精神分析医のJ・T・フィッシャーは、イエスに関して以下のようにはっきり断言しています。

「仮に最もすぐれた心理学者と精神分析医によってこれまで書かれた精神衛生学に関する権威ある論文をすべてまとめたとしても、そのすべてを結び合わせ、洗練を加え、多くの余計な言葉を整理したとしても、そして、これらの純粋に科学的な知識を現代の最も有能な詩人に要約して表現してもらったとして

も、拙劣で不完全な山上の説教集ができるであろう（マタイ6-8章）。それは山上の説教と比較すると全く問題にならないであろう。およそ2000年間も、キリスト教界はあくことなき実を結ばざる渴望に対して、その手に完全な解答を握ってきたのである。ここには、楽天的で精神的な健康と満足を伴った成功せる人生の青写真がある」（フィッシャー P.273, モンゴメリー, 1965, P.65より引用）。

イエスは本当に主なる神か

もしイエスが、狂信的な弟子たちによって夢想された神話的存在や嘘つき、精神的なバランスを欠いた者として非難されえないとすると、残るはただ1つだけです。彼は自ら語った通りの人、すなわちキリスト、神の御子、人の子にちがいません。

イエスは、弟子たちと2階座敷にいたとき、彼らに多くのことを語りました。彼らに語った1つのことは、「あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです」（ヨハネ13:13）。私たちは今、キリストの主張、その複雑さ、困難さと取り組む責任があります。しかし、究極的に私たちの前に置かれた問題は、ひとことと言えば「イエス・キリストは主なる神であるのか、そうでないのか」といえます。個人生活にイエス・キリストの完全な力を知るには、人はこの事実を知的に心情的にまったく確信しなければなりません。

イエスが私たちとは関係ない単なる知的的好奇心にとどまる限り、生ける神との個人的接触はありません。最後の段階は、イエスをあなたの主として受け入れること、彼を個人的に経験的に知ることです。

私たちはここでイエス・キリストの証拠が知的に健全であることを示そうとしてきました。4つの福音書の記録は彼の完全性、彼の罪なき性質、彼の謙遜

を表わしています。それ以上の証拠は、神的証印あるいは権威と奇跡の伴う幾世紀にもわたる時間を超えた彼のメッセージを通して、歴史的影響をもたらしたことに見られます。キリスト教が行くところではどこでも、個人の尊厳は高められ、神と人への奉仕の責任感は強められました。

「西洋世界全体において、カレンダーが新しくなるたびに、年月日が告げられるたびに、貨幣がつくられるたびに、全歴史の中心にいますお方への証しがある。私たちはキリスト以前 (B.C.) が私たちの主の年 (ラテン語の *anno domini*, A.D.) と年数を計算する。彼の誕生は無神論者と不可知論者、信者と未信者によって告げられる。このような方法によってだけ告げられるのである」(メンジー P.88)。

歴史、倫理、心理学、経験からの証拠は、明らかにイエスを主なる神と見方を示しています。中には、その要求ゆえに証拠を拒否する人がいるかもしれませんが。しかし、イエスが誰であるかをあなた自身で決める際には、道徳的正直さがなくてはなりません。

次ページの図は以上までのところを要約し、イエスの本質に関するいろいろな説を図で示したものです。よくこれを考えて下さい。彼の主張は正しいと受け入れることができますか。もしできるなら、あなたは最も重大な選択をすることになるのです。

イエスの神性主張（3つの可能性）

彼の主張はうそだった

彼は自己の間違いを知っていた。それは故意であった。彼は嘘つきであった。

彼は神話、伝説である

彼は実在しなかった。
彼は架空上の人である。

彼は、自分の主張が間違っていたとは知らなかった。彼は、自分の言葉どおりの人物である、と考えたにすぎない。彼は精神異常者であった。

彼は実在したが、彼について多くの物語がつけられたため、私たちは真実を知ることができない。彼は伝説上の人物である。

彼の主張は正しい

彼は、彼の言葉どおりの人である。あらゆるひざ、あらゆる頭、あらゆる舌は、彼が主なる神であることを告白するであろう。

だが、2つの選択がある。どちらかを選ばなければならぬ。

あなたは受け入れることができる。
あなたは拒むことができる。

イエスの復活

世界の4大宗教を除くすべての宗教は哲学的命題から始まっています。4大宗教は創始者の人格的影響力に基づいています。4大宗教とはユダヤ教、仏教、イスラム教、キリスト教のことです。ユダヤ教の父祖アブラハムはおよそB.C.1900年に死にました。仏陀の死の最初の記事はマハパリニバーナ・スッタに記録されていますが、そこには彼が死んだとき、それはあとに何も残らない完全な死去であったと言われています。イスラム教の創始者モハメッドはA.D.632年、61歳のときに死にました。彼の墓は忠実な巡礼者たちによって定期的に参拝されています。ユダヤ教、仏教、イスラム教の正統的教えの中には、創始者の肉体的復活に対する本文の主張は何もないのです（マクドウエルP.185-187）。キリスト教にはその主張があります。

この点、キリストはユニークです。なぜなら、彼は自分が十字架で死ぬだけではなく、3日目に再び生き返ることを教えたからです。このことは彼の預言通りにすべて起こりました。イエスの生涯を記録したあの信頼できる人たちは、他の多くの人たちと共に、イエス・キリストの復活の真実性に対する目撃者でした。彼の復活は、新約聖書の最初の奇跡です。それはまた、あらゆる時代のあらゆる人にとって、最も意味のある奇跡です。

この異常な歴史の事実を否定し、疑わせようとする巧妙な試みがこれまでなされてきました。イエスは本当は死ななかつたのだ、苦痛で失神したにすぎない、と言う者もいます。復活そのものと同様に古いもう1つの考え方は、イエスの体は彼の友人たちや弟子たちによって墓から盗まれたものだ、というものです（マタイ28：13）。いや、彼の死体を盗んだのはイエスの敵であると教える者もいます。もっとこじつけたような見方は、墓は本当は空ではなかつた、イエスの弟子たちがキリストの超自然的幻を見たもので、復活は彼らにまつわりついていたキリストの霊の意識にすぎない、というものです。言いかえる

と、それは本当は体の復活ではなく、霊の復活であった、というものです。

4番目の説によると、イエスの弟子たちは悲嘆にくれて、生きているイエスに会いたいとの願望が強かったので、彼らは幻覚を経験したか、視覚的幻想の犠牲になったのだ、と説明されます。イエスの死体は墓に入れられなかった、つまり、死体はちゃんと埋葬されないでイエスと一緒に処刑された犯罪人の死体と共に穴にほうりこまれたのだ、という人、また弟子たちと忠実な追従者たちは墓をまちがえたのだと信じている人もいます。

復活を否定するためのこれらすべての説明は、捨てなければなりません。なぜでしょうか。少なくとも4つの大きな理由があります。

第1に、これらの説は相互に排他的で、記録された物語と調和しない拡大解釈を反映しているということです。

第2に、イエスの弟子たちを嘘つき、盗人、精神異常者、愚か者と非難する納得のいく根拠は何もないということです。

第3に、イエスの復活は、新約聖書中、復活後、何回も現われた彼を見た500人以上の人たちによって証言されている点です。使徒パウロは記録しています。「その後、キリストは500人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます」(第1コリント15:6)⁹

第4に、クリスチャンは、自分たちは真理と光と命と力をもっていると言います。この同じ人たちが、実際起きてもないのにイエスは復活したなどといって世の人をかつごうとしたのだと非難することは、つじつまが合いません。さらに、多くの目撃者は、イエスが死人からよみがえった事実を否定するよりも、死刑に処せられることを選びました。偽りであるとわかっていること

を弁護するために、彼らは命を捨てるようなことはしないでしょ。復活は実際に起きたのです。それはだましごとではなく、本当です。

キリストの死にまつわる事実だけでなく、イエス・キリストの神性の非常に興味深いもう1つの証拠についてほんのひと言。神の御心を人々に教えるために旧約聖書で神が用いた1つの手段は、神から人々にメッセージを語った「預言者」によるものでした。これらのメッセージの中には、幾世紀も通じて、様々な神の代弁者たちによって、来たるべき約束のメシヤ、救い主についての預言が多く含まれています。キリストの誕生、生涯、奉仕、死、復活に関するすべての預言は、イエス・キリストにおいて完全に成就しました。

復活に関してはもっと多くのことを言うことができます。おそらく、あなたはこの章の最後に挙げられている参考資料のどれかを読んで、学習を深めることができるでしょう。この大切な部分を、新約学者のバーナード・ラム博士の言葉をもって要約してみましょう。

「クリスチャンはイエス・キリストの復活を歴史的事実として受け入れる。クリスチャンは、その神論のゆえに復活は起こりうると考える。その理論的根拠はキリスト教神学の中に見いだされる。その歴史性は、新約記録の全ページにわたる旧約預言からの確かな広範囲に及ぶ証言によって、教会史における初代教父の著書によって、そして初代の信条において証明されている」(ラム P.193)。

イエスの目的

もしイエス・キリストが神の御子であり、もし彼が十字架で死んで死から復活したなら、その背後にある「真の」目的と意味は何なのでしょう。そう、キリスト教の核心はイエス・キリストとの人格的、個人的出会いでした。

おそらく、イエスがこの世に來臨した目的を理解する一番わかりやすい方法は、イエスと他の人たちとの古典的な出会いの形態を見ることでしょう。イエスの最初の弟子たちの中から、ガリラヤの漁師シモンのゆるやかな人格の変化を見てみましょう。

シモンは、太陽のもとでの労働で日に焼け、外の匂いのしみこんだプロの漁師でした。彼は気が早くて怒りっぽい衝動的な人間でした。シモンの兄弟アンデレは、彼をイエスに紹介しました。イエスはシモンに出会うと「あなたはヨハネの子シモンだね。だがこれからは、ペテロ、つまり『岩』と呼ばせてもらうよ」（ヨハネ1：42 リビング・バイブル）。イエスはシモンに現われる変化を直ちに知って、彼の名前を「岩」を意味するペテロと変えることで、そのことを示したのです。イエスは、以前のカッとしやすい衝動的な人間シモンをペテロに変えて、やがて「岩のように不動」の人物になるであろう変化が起こることを知ったのです。

イエスは、すべての人をこのように見ます。彼は人間の弱さを見、知っています。人が彼に向き直るとき、彼はその人を強い、健康的な人物にしようと計画します。このように彼は私を見、このように彼はあなたを見ています。

あなたは、「私はイエスを受け入れていないのに、どうして彼が私のことを知ることができるのだろうか」と言われるかも知れません。あなたの心の奥での思いは、彼には開かれた本と同じなのです。世のすべての人には隠されている秘密があるかもしれませんが、彼から隠されている秘密は1つもありません。イエスは私を知り、あなたを知っています。イエスは生まれてきたあらゆる人の歩みに、時には人の注意を向けようとして、つき従っています。あなたが、ここまでこの学びをしてこられたのも、偶然ではなかったのです。ペテロがもったイエスの経験をあなたも持って下さい。

ペテロの人生の変化は、どのようにして起きたのでしょうか。基本的に3つ

の段階が含まれていました。

第1に、ペテロの側に意志の働きかけがあったということです。彼は意識的に自己をキリストに明け渡しました。彼はあとであやまちを犯しました。1度限りで彼は完全になったのではないのです。彼には、軽卒に語り、せっかちに行動し、あわてて約束したときがありました。それでも彼は、キリストにささげきっていました。そして、彼はイエスに従い、イエスを信じ、信頼しつづけたのです。徐々に彼は、キリストの影響力が彼の人生に強くなるにつれて、理解し始め、変わり始めました。

第2に、ペテロはちゅうちょなしに、無条件でキリストを知的に受け入れなければならぬことに気がつきました。彼はまず意志（心）と情緒（感情）をイエスにささげました。しかしペテロは、彼の知性や理性にも同じことをしなければならないことに気づきました。彼は考えることをやめたり、「知的自殺」を遂げたりすることもしませんでした。しかし彼は、疑問が解けなくても、個人的な悩みがあっても、論理的に反対と思えるようなことを感じて、キリストを信頼することを固く決心しました。これをイエスは「信仰」と呼んだのです。もし人がイエスを見なくても、信じる信仰さえ持てるなら、確信と洞察と理解が与えられる、と教えました（ヨハネ20：29）。

第3に、ペテロは残る生涯を、イエスに完全に疑いをさしはさまないで服従しました。これは献身の究極的なテストです。それは人生の旅路を正確に知らなくても、常に安易な道であるとは期待できなくても、喜んでキリストに従うことです。

これがデートリッヒ・ボンヘッファー（1906-1945）が言う「弟子となること」（ボンヘッファー P.36）です。彼は高く評価されている若いドイツ神学者であり、その著書は多くの言葉に翻訳されています。

イエスとの出会いは高価なものです。それは、あなた自身の意志を神の意志に服従させることを意味します。ペテロは、自分が何をしているのか十分わからないでイエスに従いはじめたかもしれません。彼の直面した問題が大きくなるにつれて、彼は自分の信仰も成長したことを知りました。彼はまた、困難にもかかわらず、キリストに一切をまかせたとき、人生は以前よりも良くなったことを知りました。

これがイエスの来臨の目的です。神の御子が人となることで、人が神の子供になるためです。神は神の子たちが神の命と働きに永遠にあずかることを願いました。この目的を達成させるために、神はこのような方法を選んだのです。すべての人は、ちょうどペテロのように、イエス・キリストの強くて優しい影響力の下で変えられうのです（第2コリント5：17）。

イエスの弟子

この課の目的は、単にあなたを導いて頭をうなずかせて、かつて歴史的イエスのいたこと、今も彼の主張通りに生きていることに同意させるためではありません。知的同意は十分ではありません。イエスをシーザーやプラトンを信じるように信じるだけでは、私たちの目的は果たせません。

シーザーやプラトンは死にました。ですから熱烈に彼らを信じて、彼らに反対しても、少しも大した問題にならないのです。しかし、イエス・キリストは今も生きています。「今も彼を愛し、彼を憎んでいる人たちがいる。キリストを愛するための情熱があり、彼を滅ぼすための情熱がある。彼に反対する多くの人の怒りは、イエスが死んでいないことの証拠である」（ポーウィP. 8）。だからひとたびイエスが完全にわかったら、彼に対して無関心な態度はとれないのです。

「私たちは彼の権威に頭を下げ、彼の教えを受け入れなければならない。私たちは彼の意見によって自己の意見が形づくられるようにしなければならない。彼の見方によって自己の見方を調整しなければならない。そして、これには彼の心地よくない流行おくれの教えが入っているのである」(ストット P.210)。

私たちがイエス・キリストに従うように召されるとき、彼のみを愛することへの召しなのです。弟子となるとは、キリストに密着することです。キリスト教は単に多くの宗教的情報を知るのではなく、イエスを主なる神と知ってイエスにどこまでも忠実に従うことです。

あなたはイエスを信じることができませんか。おそらくそれは、あなたが抵抗してイエスに委ねることをしていないからでしょう。最も抵抗の少ない水路を流れている、山の小川のようにならないで下さい。ボンヘッファーは絞首刑に処せられました。彼のクリスチャンとしての献身が、時の体制と衝突したからです。彼は「安価な恵み」と「高価な恵み」のことを語っています。「安価な恵みとは、イエスの弟子とならない恵みであり、十字架のない恵み、生ける受肉せるイエス・キリストぬきの恵みのことである」(ボンヘッファー P.36)。

キリストは、自己否定、隣人との和解、他者への奉仕、人生に深く関わること、善を求めて悪と戦うこと、そして必要とあらば苦しむことについてさえ語っています。弟子となるということは、どのような価を払うにせよ、勝利のキリストに忠誠をつくすことであって、世捨て人となって社会から隔絶することではありません。それは、市場の騒がしさと悪臭の中で、堅く真理に立つことを意味します。あなたは安っぽい恵み、浅い経験、気まぐれな礼拝、忠実でない弟子にどのような価値をおきますか。この種のクリスチャンは非常に多いのです。キリスト教が真剣に受けとめられていない1つの理由は、ここにあります。不幸にも、クリスチャンであると主張している者の中にも、それを十分真剣に受けとめていない人がいるのです。キリストの召しは完全な弟子となる

ことであり、意識的に自覚をもってすべての主なるイエス・キリストにささげられた意志であり、知性であり、感情なのです。

挑戦

C・S・ルイスはこの課を要約しているような、非常に明確な挑戦を提示しています。

「単なる人間にすぎない者が、イエスの言ったようなことを言ったとしても、偉大な道徳的教師にはなれない。彼は気違いか——『おれは落とし卵だ』と言ってきかない男と同類か——さもなければ地獄の悪魔か、そのいずれかであろう。あなたは選択しなければならない。この男は神の子であったし、今もそうだと考えるか。さもなければ、狂人もしくはもっと悪質なものと考えるか。彼を愚者としてとじこめ、彼につばをかけ、悪鬼として彼を殺すか。さもなければ、彼の前にひれ伏して、これを主または神と呼ぶか。どちらでも選ぶことができる。しかし、彼を偉大な人間の教師などと考える恩きせがましいナンセンスだけはやめようではないか。彼は、そんなふうを考える自由を与えてはいない。そのように考えさせるような意図は彼には全くなかったのである」(ルイス P.56)。

あまりにも多くの人が、イエス・キリストのチャレンジに直面したくない、という理由だけで、片手をふってキリスト教を捨てようとしています。いろいろな所にいるあなたがたは、キリストの人格にぶつかったなら、彼を人生に迎え入れることがどのような道徳の意味を持つようになるか、恐れてはなりません。証拠を十分に調べ、考えるまで、彼を拒否して絶望の夜にまいもどってはなりません。恐れるか、怠慢か、のいずれかで多くの人が彼を受け入れようとしないのです。キリスト教の行動基準と弟子化へのチャレンジに直面しない背

後には、逃避主義者の恐れがひそんでいます。逃げた方がやり易く、気が楽に見えます。

イエス・キリストは、人と神との和解をもたらすために来ました。この和解の精神をもって、イエスは、人種、皮膚の色、背景、過去の行動にかかわりなく、あらゆる場所のあらゆる人を招きました。すべての人が、彼のもとに来るように招かれているのです。

そうだとしたら、なぜ人々はあたかも彼が何も重要なものを持ち合わせていないかのように、イエスが出てくる本を1度も開きたくないと思い、彼を素通りしたいと思っているのでしょうか。どのような理由であれ、あなたはそのようなことをしないで下さい。むしろ、あなた自身を深く見つめて、以下の祈りをささげて彼に向かって次の重要なステップをふんで下さい。

父なる神さま、イエスを単なる
偉大なる教師と考えることで
満足してしまうようなこと
ないようにして下さい。
イエスを私にとって
私の最良の友以下
私の永遠の救い主以下
私の確かな力以下
私の不滅の希望以下
の存在に決してしないで下さい。
そしてイエスが私にとって
意味あることを、いつも人
に透けて見えるようにして下さい。

(ゲッシュ P.60)

引用参考書——第3課

1. Bonhoeffer, Dietrich. *The Cost of Discipleship*. (弟子となる価) New York, New York, USA: The Macmillan Company, 1959.
2. Bowie, Walter Bussell. *The Master*. (主なる神) New York, New York, USA: Charles Scribner's Sons, 1958.
3. Bruce, F. F. *The New Testament Documents*. (新約文献) Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1960.
4. Fisher, J. T. and Hawley, L. S. *A Few Buttons Missing*. (失われたわずかのボタン) Philadelphia, Pennsylvania, USA: J. B. Lippincott, 1951.
5. Foerstes, Norman, ed. *American Poetry and Prose*. (アメリカの詩と散文) Boston, Massachusetts, USA: Houghton Mifflin Company, 1934.
6. Gesch, Roy G. *Help! I'm in College*. (助けてくれ、私は大学にいる) St. Louis, Missouri, USA: Concordia Publishing House, 1969.
7. Jones, E. Stanley. *The Divine Yes*. (神の然り) New York, New York, USA: Abingdon Press, 1975.
8. Lewis, C. S. *Mere Christianity*. (キリスト教の精髓) New York, New York USA: The Macmillan Company, 1967.
9. McDowell, Josh. *Evidence That Demands A Verdict*. (判決を必要とする証拠) San Bernadino, California, USA: Campus Crusade for Christ, Inc.,

- 1972.
10. Menzies, William. *Apologetics: Study Guide*. (弁証論学習の手引) Brussels, Belgium: International Correspondence Institute, 1976.
 11. Montgomery, John Warwick. *History and Christianity*. (歴史とキリスト教) Downers Grove, Illinois, USA: Inter-Varsity Press, 1965.
 12. _____ *Where Is History Going?* (歴史はどこへ行くか) Minneapolis, Minnesota, USA: Bethany Fellowship, Inc., 1969.
 13. Ramm, Bernard. *Protestant Christian Evidences*. (プロテスタント・キリスト教の証拠) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1953.
 14. Shakespeare, William. *The Works of William Shakespeare Gathered into One Volume*. (1巻に編集されたウィリアム・シェークスピアの作品) New York, New York, USA: Oxford University Press, 1938.
 15. Stott, John R. W. *Christ The Controversialist*. (論客イエス) London, England: Tyndale Press, 1970.

今後の学びのために

Bonhoeffer, Dietrich. *The Cost of Discipleship*. (弟子となる価) New York, New York USA: The MacMillan Company, 1961.

この本全体が一読の価値がある。多くの人に影響を与えてイエス・キリストに向かわせた本。

Lewis, C. S. *Mere Christianity*. (キリスト教の精髓) New York, New York, USA: MacMillan Company, 1965.

あらゆる人が時間をさいてこの偉大な英国の文学批評家、作家、クリスチャンによるすばらしいこの本を読むことをおすすめする。

McDowell, Josh, ed. *Evidence That Demands A Verdict*. (判決を必要とする証拠) San Bernadino, California, USA: Campus Crusade for Christ, Inc., 1972.

この本にはキリスト教に関する引用、事実、情報が満ちている。5—10章でイエス・キリストが論じられている。

Morison, Frank. *Who Moved the Stone ?* (だれが墓石を動かしたか) London, England: Faber and Faber Limited, 1969.

イエス・キリストの復活の事実に関するすぐれた研究書である。

Ramm, Bernard. *Protestant Christian Evidences*. (プロテスタント・キリスト教の証拠) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1953.

6,7章でイエスの復活が論じられている。個人学習には非常に有益である。

Stott, John R. W. *Christ the Controversialist*. (論客イエス) London, England: Tyndale Press, 1970.

キリスト教を真剣に求めている人々にとって価値ある良書である。

自習

- 1 ピリピ2：5—11を読みなさい。このテキストは「肉をまとわれた」神について何をあなたに語っていますか。

.....

- 2 あなた自身の意見に従って、イエスの主張についての4つの可能性を評価しなさい（各項目について短評を加えること）。

伝説.....

嘘つき.....

犯人.....

主なる神.....

- 3 復活物語を読みなさい（マタイ28：1—15、マルコ16：1—14、ルカ24：1—41、ヨハネ20）。マタイとルカの記事から、その中の2種類の人たちの反応をあげなさい。弟子たち（信者たち）とその他の人たち（未信者たち）の反応。

弟子たち.....

他の人たち.....

- 4 他の世界3大宗教と比べたキリスト教の独自性は、キリストは復活し、今も生きていることです。キリストとの個人的関係を持つとすると、このことはあなたにとってどのような意味をもちますか。

-
- 5 旧約聖書はイエスのベツレヘムでの誕生の数百年前に、イエスに関する情報をもっていたと言われます（ルカ 2：1—7）。以下の旧約の御言葉を読み、その箇所がイエスについて具体的に何を指しているのかを考えて下さい。

イザヤ 7：14

ミカ 5：2

ゼカリヤ 11：12—13

イザヤ 53：9

- 6 シモンの生涯にあらわれた変化と、完全に弟子になることへの挑戦を、どのように感じますか。
-

自習のガイドライン

1 神は人間のかたちをとり、人間となった。彼は死にさえも自発的に従う従順なしもべとして来た。しもべとしての彼の義務は今は終わり、ある日すべての人が、人となられた神が主なる神であることを認めるようになる。

2 あなたの答え

3 〈弟子たち(信者たち)〉

女たち——途方にくれた(ルカ24:4)

恐れた(ルカ24:5)

恐れと大きな喜び

(マタイ28:8)

理解(ルカ24:8)

礼拝(マタイ28:9)

〈他の人たち(未信者たち)〉

番兵たち——恐れおののいた

(マタイ28:4)

番兵たちと大祭司たち——なく

なった死体の問題を説明する

ための話をでっちあげた

(マタイ28:11-15)

弟子たち——不信仰(ルカ24:13)

混乱と悲しみ〔エマオ〕(ルカ24:13-24)

信仰と喜び〔エマオ〕(ルカ24:31-35)

驚きと恐れと疑問(ルカ24:37-38)

あまりに良い知らせで信じられない〔喜びが

大きく信じられない〕(ルカ24:41)

礼拝と疑い(マタイ28:17)

理解(ルカ24:25)

喜びと礼拝(ルカ24:52, 53)

4 人は事実以外のことを語ることはできない。もしイエスが生きているということが事実であるなら、彼との関係をもつことができます。このように、

復活が事実であるときにのみ、個人的な関係が成立するのです。

- 5 イザヤ7：14——少女（処女）が子を生子、彼の名はインマヌエルと呼ばれる（神われらと共にいます）
- ミカ5：2 ——ベツレヘムがメシヤの出生地となる
- ゼカリヤ ——イエス（メシヤ）は30シケルで裏切られる（マタイ26：14—16，マルコ14：10，11，ルカ22：3—6）
- イザヤ53：9——彼は富める人の墓にほうむられる（マタイ27：57—60，マルコ15：43—46，ルカ23：50—53，ヨハネ19：38—41）
- 6 あなたの答え、あなたはシモンの生涯にあらわされた態度と行動のゆるやかな、また継続的な変化を見るであろう。

自己採点復習

1 神はどのような方法で人類の必死の願いに答えましたか。正しい応答を○で囲みなさい。

- a) 神は人間を無意味な人生のままにさせた。
- b) 神はイエス・キリストを通してご自分を示された。
- c) 神の性質は自然の中に啓示され、それで充分である。
- d) 神は時間と空間と人間歴史の中に入ってきた。
- e) 神は人間は宇宙でひとりぼっちであることを示した。

思考の刺激：これは神の性格について、何を示しているだろうか。これは人生について何を示しているだろうか。

2 伝説上のイエスとクリスチャンの応答についての以下の論議を組み合わなさい。空欄に適切な応答の番号を書き入れなさい。

- | | | | |
|---------|-------------------------------|----|------------------------------------|
| a | 弟子たちはわざと物語を偽造した。 | 1) | これらの人たちは、すぐ信じることのできない疑い深い人たちであった。 |
| b | 弟子たちは自分をあざむいた。 | | |
| c | 弟子たちはメシヤを必死に求めていた。 | 2) | 時間が十分なかったこと、目撃者が多いことは、このことを反証している。 |
| d | 弟子たちは狂信的に復活をつくりあげた。 | 3) | だれかを「神」と呼ぶことはユダヤの伝統に反していた。 |
| e | 弟子たちはイエスをもっと偉く見せるために彼に神性を帰した。 | 4) | 弟子たちは倫理的に伝説をねつ造することはできなかった。 |
| | | 5) | イエスはユダヤ人が考えた解放者とは異なっていた。 |

思考の刺激：あなたがイエスは歴史的存在であることを信じる、十分な証拠がありますか。

- 3 イエスは故意に人々をあざむいたという考えに、以下のどの論議が答えているでしょうか。適切な論議を○で囲みなさい。
- a) 彼は肉体をとった神であると主張した。
 - b) 彼は有徳の人として世界中の人から賞賛された。
 - c) 嘘をつくことは彼の品性と一致しない。
 - d) 彼は偽り者としての悪魔に敵対した。
 - e) 彼は神の権威と、彼を通じて行なった神のわざに訴えた。

思考の刺激：イエスは善良な人で偉大な道徳的教師であった、というキリスト教の反対者に同意しますか。

- 4 創始者の復活はキリスト教を他宗教と区別している。以下のうち、復活に対する合理的証拠はどれか。あなたが選ぶ証拠を○で囲みなさい。
- a) 弟子たちが行き着いた墓は空であった。彼らはイエスの死体を発見できなかった。
 - b) 死と復活はくわしい預言と一致している。
 - c) 弟子たちは復活を切に望んでいたので、復活を信じた。
 - d) 弟子たちは復活を否定するよりも死を選んだ。
 - e) 500人の目撃者は、復活を証言することができた。

思考の刺激：この種類の証拠が他の歴史的出来事にもあるなら、あなたはその出来事を信じますか。

- 5 シモン・ペテロの、イエスとの出合いに関する以下の叙述には、正しいものと誤ったものがある。空欄に、正しいものに○、誤ったものに×を書きこみなさい。

- a) 彼は突然、完全になった。
- b) 彼は無条件でイエスを受け入れた。
- c) 彼は安価な恵みを信じた。
- d) 彼の献身は意志の行為であった。
- e) 彼はイエスに出会ってからは、1度も興奮したことも衝動的になったこともない。
- f) 彼は岩に変えられた。
- g) 彼の生涯は弟子となることの模範である。
- h) 彼は知的自殺をした。
- i) 彼はすべてがわからないときも、キリストを信頼した。
- j) 彼は疑問をもたないでイエスに従い続けた。

思考の刺激：イエスはペテロの過去の仕事ではなく、その可能性を見て彼を選んだ。あなたは同様に、自分と他の人を見ていますか。

6 以下の文を「キリストの弟子」の定義からつけ加えて完成しなさい。学課の展開から答えをさがして空欄に書きこみなさい。

- a) _____ に対して情熱的であること。
- b) 彼の _____ と _____ を受け入れること。
- c) 絶対的にイエスに _____ こと。
- d) 多くの _____ を知る以上のこと。
- e) イエスを _____ と知ること。
- f) 人生に深く _____ こと。
- g) 隣人との _____ 。
- h) 日常生活で _____ に堅く立つこと。

思考の刺激：あなたの生活に、これと似た献身がありますか。その共通点と相違点とは何でしょう。

自己採点復習解答

- 1 b) と d)
- 2 a) 4)
b) 2)
c) 5)
d) 1)
e) 3)
- 3 b), c), e)
- 4 b), d), e)
- 5 a) ×
b) ○
c) ×
d) ○
e) ×
f) ×
g) ○
h) ×
i) ○
j) ○
- 6 a) イエス
b) 権威 教え
c) 従う
d) 宗教的情報
e) 主なる神
f) 関わる
g) 和解
h) 真理

- a 前課の脚注で説明したように、私は神であり人であるイエス・キリストとの個人的出会いを言うのに、マルチン・ブーバーの「われと汝」の表現を用いた。この意味で、「われと汝」はキリスト教の表現そのものである。
- b 資料のいくつかは本の見返しからとった。この偉大な人物の霊的な「遺書、遺言」への序言は、彼の娘のユニース・ジョーンズ、マシューズによって書かれた。
- c この言葉は、米国ニューヨーク州の政治家として候補に立った、マルキストによって語られた。
- d この表はマクドゥエル P.108から採用し、拡大したものである。
- e パウロは、これらの証人は今なお生きて確かめられることを強調して、復活の事実を調べるように言っていることに注意せよ。ローマの法廷で弁護したとき、パウロが言ったように、「これらのことは片隅で起こった出来事ではありません」（使徒行伝26：26）
- f ボウイはギオバニ・パピーニの「キリストの生涯」、1923, P.6から引用している。パピーニ（1881—1956）は、イタリアの哲学者、歴史家、批評家で、キリスト教の反対者であった。1920年に、彼はローマ・カトリックに回心し、現在、1921年に書かれた「ストリア・ディ・クリスト」（キリストの生涯）という有名な本で最も良く知られている。

第4課

聖書は神の言葉か

私の好きな教授であるドナルド・F・ジョンズ博士は啓示について本を書き、神観念に反対するヒューマニズムの偏見は聖書を他の本と同一視するに至っていると説明しています（ジョンズ P.19）。ひとたび神の概念が受け入れられると、啓示の概念も受け入れることができます。

第1に、啓示の「可能性」が存在するということです。宇宙を創造することができる神は、同時にご自分を人間に明らかにできる力を持っているはずで

第2に、啓示の「蓋然性」が存在します。被造物に明示されている神の性格は、啓示を予想させます。創造者なる神は、彼を理解できる被造物におそらくご自分を知らせたいと願うでしょう。

第3に、啓示の「願望性」があります。あらゆる時代、あらゆる場所の人々は、ある種の超自然的啓示を望んできました。あらゆる文化には常に1つの宗教が付きものです。神は、神によって満たされないような願望をもった人間を創造したとは思われません。

第4に、啓示の「必要性」があります。良心と理性だけでも罪の自覚を与えるのに十分ですが、罪から救われるためには啓示が必要です。ある種の啓示された救いの計画だけが、人は罪の刑罰と力から救われうるということを保証できるのです。

私たちはすでに、神の御子イエス・キリストにおける神の自己啓示を見てきました。しかし、イエスの生涯と教えを私たちに告げる資料や文献はどこにあるのでしょうか。聖書がキリストとキリスト教に関する私たちの資料であり、案内書です。私たちはこの本を調べて、その背景と信頼性について知らなければなりません。それがこの課の主題です。

アウトライン

- 聖書はどこから来たか
- 聖書の困難性
- 聖書の権威
- 聖書を理解する方法
- 挑戦

考えるための問題

1. ラブストーリーと科学の教科書の主な違いは何ですか。
2. 誤りのない本が作られるいくつかの重要な要素は何ですか。
3. 現代の科学的探究と発見は、誤りのない聖書概念を助けますか。それとも傷つけますか。
4. あなたは聖書の中にどのような誤りがあると一番考えますか。
5. 聖書の権威を考えると、どのように論理は用いられますか。
6. あなたはどのようにして聖書を個人的に徹底的に研究しますか。
7. あなたは新約聖書のある箇所を選んで真剣に学ぼうとしていますか。
8. あなたは真理をどこで発見しても、その真理を喜んで受け入れようとしていますか。

用語の意味

- 対型 —ある型と一致するもの、あるいはその前ぶれとなっているもの。
- 黙示録 —新約聖書最後の書卷。世界の究極的運命の預言に関係している。
- アラム語 —紀元前9世紀から知られ、バビロン捕囚以後のユダヤ人を含めた種々の非アラム人によって、共通語として採用されたセム語。
- 高等批評 —聖書の文学的歴史と著者の目的と意味を決定する、聖書文献研究。
- ヒューマニズム —理性による自己完成の能力を人間が持つことを断言し、しばしば超自然を拒絶する哲学。
- 無誤性 —誤りのないこと。無謬性。
- 預言 —神の意志と目的の宣言。
- 予型論 —キリスト教時代の物事は旧約聖書の物事によって象徴され、予表されているという教理。
- 型 —これから生起しようとしている事を表徴しているもの。

学課の展開

数年前、私は大きな大学で人類学の教授に会いました。彼は第3章で述べたような意味で、すなわちイエス・キリストとの人格的關係によってクリスチャンとなったばかりの人でした。彼は人類学の科学的規範と、彼の新しい信仰とを調和させようとしているところでした。

私たちは人類の起源と五書の著書（旧約聖書の最初の5巻）について、創世記の最初の数章を語り合いました。少しがっかりして、彼は言いました。「モーセがもう少し、くわしく人間の起源について語ってくれたらよかったのに」。

同じような切望は、聖書について多く語られてきました。まず最初に、聖書は特別な本であり、きわめて特殊な目的をもって書かれたものであることを認識する必要があります。聖書は法廷や実験室のために書かれたものではありません。わずかの手がかりしかない人間が、つかみどころのない神を捜し出そうとしているような推理小説ではありません。

聖書は、神と人間が愛と理解をもって1つになるという愛の物語であり、歴史の記事である、と言えば最もふさわしいでしょう。聖書は、神の实在と人格を前提としています。聖書は議論の弾薬を与えるため、論点を証明するため、あるいは単に他の宗教体系に別の「聖なる本」を加えるために書かれたものではありません。

英国聖公会牧師のミカエル・グリーンがあげた以下の聖書の特別な目的は傾聴に価します。

聖書は科学の本ではない。それは人間と人間、人間と宇宙、人間と神との

トータルな関係について語っている本である。聖書が科学的分野に立ち入っている場合、たとえば、太陽は「昇る」と語り、天は「上にある」といったごく普通の日常語で聖書は語っている。人間や宗教が、聖書の特定の解釈を土台に、物質の世界について信じていることを科学者におしつけることはゆるされない。反対に、聖書は神が人間を自然を治める存在としてつくられたこと、さらに宇宙において、創造者の道を探求する存在としてつくられたことを信じるように私たちに励ましている（グリーン P.43）。

聖書はどこから来たか

私たちはふつう、聖書を旧約と新約の2つの部分をもった1冊の本と考えます。聖書は小さな多くの本を編集したもの、寄せ集めたものと言っても間違っていない。聖書は「生きた書物」、一種の霊的宝庫の百科辞典です。聖書には「統一性」と「多様性」があります。このこと自体、超自然的著者を指し示しています。聖書に関して以下の6つの面を簡単に見ていきましょう（この課の全体は、これらの主題の1つ1つにあらわれます）。

時間

聖書の記述と編集には、およそ1600年間で費やされました。モーセはB.C. 1500年頃始めました。使徒ヨハネは聖書の最後の本（場所と時間の流れから最後）をA.D. 100年頃書きました。長い年月がかかったため、著者たちが相互に協力して均整のとれた作品に仕上げる余地はありません。にもかかわらず、聖書が完全に統一されているのは、このような完全で優れた作品を生み出すのに神の絶えざる影響があったことによるのです。

著者

聖書の記述には、40人ほどの人たちが参画しました。これらの著者たちは、人生のあらゆる分野から来た人たちです。その中には、牧者（アモス）、賢人（ソロモン）、王（ダビデ）、農夫（ミカ）、漁師（ペテロ）、医者（ルカ）、学者（パウロ）、政治家（ダニエル）、取税人（マタイ）、祭司（イザヤ）たちがいました。聖書記述に長い時間がかかったように、著者たちの背景、教育、言語、経験も多種多様であることに気がつかれるでしょう。超自然的な導きがなければ、このような多様なグループの合作で統一のとれた1つの作品など、とても完成させることはできません。

言語

記録された神のメッセージを伝達するのに、少なくとも3つの言語が用いられました。ヘブル語が旧約聖書の主な言語でした。新約聖書の言語は主にギリシャ語でした。第1世記において、ギリシャ語は古代世界の国際語でした。アラム語も旧約、新約の両方にいくらか用いられました。それはおよそ200年間（B.C. 500-300）の聖書世界の主な言語でした。聖書を書いた人たちは、当時、最も一般的に語られ、理解されていた言葉を使ったのです。特別に神に啓示された言葉とか、専門用語が使われたものではありませんでした。

文学形式

聖書には多くの文学形式、スタイルがとられています。いろいろな種類の律法——民法、刑法、道徳法、儀式法などがあります。その他に、詩歌、歴史、たとえと比喩、哲学、伝記、私信、教理、回想録、日記があり、預言と黙示文学という明確な聖書形態もあります。

場所

聖書の実際上の記述場所は多くあげられています。著者が行動をとった場所とほぼ同じ場所が多くとられました。たとえば、モーセはシナイ半島の荒野で書き、使徒パウロはローマの獄中で手紙を書き、ダビデはパレスチナの丘陵で詩篇を歌い、ヨハネは小アジア（現在はトルコとして知られている）沖のパトモスの小島から書き送り、ダニエルはバビロンで捕われの身のときに未来のビジョンを見、イザヤはエルサレムの聖なる都で預言しています。聖書は古代地中海地域と3つの大陸、アジア、アフリカ、ヨーロッパの多くの国で書かれました。

テーマ

聖書は人間に共通の感情、情緒、問題、関心事のいっさいを含む豊かなテーマを持っています。私たちはすでに、聖書は「人間と人間、人間と宇宙、人間と神とのトータルな関係について語っている本である」というミカエル・グリーンという言葉を見てきました。(グリーン P43)。これはその通りですから、人は以下のような多様なトピックスを見いだすでしょう。系図、倫理、健康のルール（肉体的精神的）、出産のアドバイス、地理、歴史、リーダーシップの原則、戦争と戦略、友情、祈り。およそ人間にとって興味があり大切だと考えられるほぼすべてのことが、直接的でない場合は、間接的にとりあげられています。人生の大きな問題の大部分があげられ論じられています。

しかも聖書は見事に「調和しています」。このことは、聖書は靈感されていることを認めなければ、説明がつかません。聖書で「靈感されている」と訳されている言葉（第2テモテ3：16）は、直訳すると「神が息を吹き込む」を意味するギリシャ語の「セオプニュストス」です。すなわち、靈感はその中に神性の本質を有し、靈感そのものに命と意味を与えている、ということです。この「神が息を吹き込まれた」という特質は、聖書を何百年を通じて、また多く

の言葉に翻訳された聖書訳を通じて、すべての重大な誤りや欠点から効果的に守ってきました。

聖書の困難性

今日非常に一般的な意見として、聖書には多くの誤り、くい違い、矛盾、誇張、神話があると言われていました。ある科学上の発見が解釈され、破壊的な批評の影響もあって、多くの人は、聖書を信頼する必要はないし、信頼することはできない、と思ひこむようになりました。私は、聖書のテキストと部分的にその内容はいくつかの問題を示していることを、率直に認めます。しかし、大部分において、これらの問題はごく小さいもので、聖書の真理と神的性格とは無関係のものです。

フランスの学者、ルネ・パーシュは聖書の困難性というこの問題を論じました。以下の指摘は彼の解説と研究に基づいています（パーシュ P.141-158）。

第1に、想像上の困難性があります。いわゆる聖書中の「解決できない問題」が大きく誇張されてきました。ふつうこれらは表面的なもので、批評家側の研究と思想の重大な欠如をあらわしているものにすぎません。「どこでカインは妻を得たか」とか、「どうやって小さな^aのどをしたくじらがヨナを丸のみにできたのか」といった質問はこのレベルの問題の例です。

第2に、今以上の完全な情報が将来与えられて解決される外見上の困難性があります。今日の知識を調和していないように見えるからといって、そのことだけで聖書に誤りがあると非難することは重大な誤りです。

たとえば、1世紀前、多くの学者は聖書の「歴史的な不正確さ」を非難しました。しかし聖書考古学はこの種の多くの反対を組織的に除去してきました。長い間、旧約聖書に多く記されているヒッタイト人は歴史家から大きな疑いを

もって扱われました。これらの古代人は聖書に記されているだけで、他のいかなる古代の資料にも出てきませんでした。そこで、聖書は誤っているし、これらの人々は実在しなかったと思われました。しかしながら、1906年に始まったトルコのボガズコイの発掘場所は、古代ヒッタイト帝国の首都の遺跡であったことが証明されたのです。

さらに、現代の精神医学は、聖書が何世紀も前にほめかした人間の人格（パーソナリティ）についていろいろ発見し始めています。高名な心理学者 O・ホバート・モーレーは、現代の心理学の概念を証明するのにイエスの言葉に言及しています。彼は、「人の罪が屋根の上から公言され、叫ばれるという概念はルカの手紙から来ている」と言っています。それから、ルカを引用して、モーレー教授は言葉を続けています。

「この聖句は、《神経症》の核を構成している罪責は、少なくとも2、3人の人にそれが前もって言い表わされ、意識的に故意に償われていなければ、意に反して《徴候的に》認められる、という事実のすばらしい認識を示している」（モーレー P.96）。

これと他の例に基づいて、モーレー博士はイエス・キリストが「きわめて鋭敏な（臨床医）」であった、と結論しています。（同 P.97）。

第3に、実際よりも見かけ上の困難がいくつかあります。注意深く研究してみると、あまりにもしばしば矛盾しているかに見える聖書の箇所は、実は補足的なものであることが判明します。なぜならば、パーシュが言っているように、

「2つのいかなる記述をも調和させることのできる方法を与える解決は、それらの記述が同一の、あるいは別々の著者に見いだされても、不正確か誤謬の仮定より望ましい、というのが歴史科学の第1原則である。はっきり認められて

いることだが、それ以外の根拠を土台にして行動することは、誤りを証明することではなく、仮定することである」(パーシュ P.221)。

たとえば、創世記には1章と2章に2つの相反する創造の記事があると非難されてきました。言葉が違う、思想形態が異なる、2つの違った神概念が提示されている、とある学者は主張します。

しかし、よく見てみると、問題と思えた箇所は実は「目的」の違いのためであることがわかります。2つの章の目的は別々です。だから、少し違ったスタイルの言語を使っても許されるのです。創世記1章は、宇宙と、自然の一部としての人間を含めたそこに住むものたちの創造記事です。しかし、創世記2章は、人間の環境とか従順のテスト、エバの創造の詳細といったさらにくわしいことをのせています。こうして、創世記2章の主な目的は、墮落に至る物事の性質を記述することにあります。第1章は、単に神の創造行為を記録したにすぎません。2つの章は矛盾しているのでも、単に反復しているのでもありません(フリーに基づく P.12—15, 29—31)。

さらに、実際そのような目的で書かれなかったとしたら、創世記の著者がこの2つの記事をわざわざ並べるのは愚かなことであつたでしょう。ここでの誤りは批評家の判断のうちにあるもので、聖書そのものの中にあるものではありません。

第4に、確かにまだ聖書学者が完全に満足のいく解答を見いだしていない問題があります。さいわいに、その数はわずかで、重要でないものばかりです。たとえば、別個の古代写本間にいくつかの違いがあります。すばらしいことに、これらの違いの数はわずかで、全体のメッセージにとって重要でないものばかりです。にもかかわらず、聖書本文批評は絶えずその異本と取り組んで、聖書が正確に何と言っているかを発見しようとしています。

印刷技術が発明される以前の時代には、筆記者、写本家によって犯された誤りはわずかでした。その誤りはふつうたったの一文字、一言語であるとか、時には聖書の一句ないしは短いテキストに関係していました。しかしここでも、このような誤りの影響力は小さなものです。

もう1つの問題は、ヘブル語、アラム語、ギリシャ語テキストに見られる「正確な意味のニュアンス」を決めることは必ずしもできることではない、という点です。そうすると、本来用いられたはずの最も明確な言葉から離れた言葉で翻訳される場合もあるかもしれません。ある箇所では、「正確な年代や出来事の連続」は決定しにくいことも確かです。しかしながら、このような困難性は、聖書の偉大な教理的テーマを左右するものではありません。

写本過程の中でわずかの誤りしか見いだされないとすることは、聖書の神的起源と保持のもう1つのしるしです。聖書記述のための長い年月や文化や著者の多様性、提示されている主題の中広さを考えると、このことは特筆すべきことです。それ以上にすばらしいことは、ほぼ2,000年間の教会歴史の中で聖書は何回となく異なる言語に翻訳され、多くの場合1つの言語に翻訳されてきた点です。それほど世界的に配布され、取り扱われてきたにもかかわらず、聖書は本質的には同じであり続けました。

聖書の権威^c

英国の偉大な学者、C・H・ドッド^dは、聖書はキリスト教によって、宗教文獻集か礼拝式文以上に見なされてきた、と言いました。「聖書は神から出た、従って誤りのない信仰と道徳上の至高の教理的権威と見なされてきた。歴史的キリスト教は啓示の宗教である」(ドッドP.8)。これは次のことを意味します。「キリスト教の究極の真理は、人間の理性だけでは発見できない。神の言葉の真实性を立証する聖霊による神の介入がなくてはならない。」これは18世紀までのキリスト教のまったく疑問の余地のない立場でした。その時以来、聖

書の権威は、「破壊批評」ないしは「否定的批評」とか呼ばれるヨーロッパ大陸の運動によって、激しい攻撃を受けてきました。聖書に代わって人間性を権威の座にすえようとする多くの本が書かれました。キリスト教社会は、聖書を敬い、聖書を正しく位置づける歴史的キリスト教の立場を破壊しようとした神学者たちから、痛めつけられてきました。

にもかかわらず、大多数のキリスト教信者と共に、私は聖書に対する自己の確信と、私はなお聖書に信頼できるということを再確信します。何年にもわたって聖書を攻撃してきた人たちは、聖書の立場を強めたにすぎませんでした。彼らは聖書のメッセージや信頼性を破壊することはできなかったのです。

聖書の無誤性を確立するには3つの方法が考えられます。

告白的方法

告白的方法とは、聖書は信仰によってのみ神の言葉と告白されるというものです。そこには、理性は理性以上のものを証明する際、用いることはできないことを理由に、理性的弁護は何ら与えられていません。この良い点は、そのようなアプローチが聖書研究の現代の科学的手段を活用することができ、なおかつ根底にある聖書への確信を放棄することがないということです。もちろん、この方法はすべての人を満足させるわけではありませんが、「信仰に傾いている」人にとっては有益な方法です。もっと疑問をもっている人にとっては、ものたりない方法です。

前提的方法

前提的方法は次のような前提に始まります。父・子・聖霊の三位一体の神は聖書の中で絶対的権威をもって人間に語る、という前提です。こうして聖書は自己証明的となります。論証の方法は以下のような手続きをとります。

前提A：聖書は神の誤りのない言葉である。

前提B：聖書は聖書自体の無謬性を断言する。

前提C：聖書の自己断言は誤りのない断言である。

結論：聖書は神の誤りのない言葉である。

おわかりのように、結論は最初の前提ではっきり述べられています。これは論理学で言う「循環論法」です。なぜならそれは、「証明すべき論点そのものを自明の理とみなして論ずる」からです。聖書は、そう主張しているから聖書の権威を断言する、さらにそれは靈感されているからその主張を信じるということは、表面的にはとても良い論拠に見えません。しかし、私たちはこのような手続きをとることでまったく論理学の境界線内にいることになります。

聖書はそれ自体で神の靈感を主張しているという断言をもって始めることは、完全に許されることです。演繹的論法の過程は、結論の真理は前提の真理次第であることを要求します。聖書はくりかえし、聖書が正に神の意図された人間への語りかけである、と断言しています。事実、旧約聖書だけで、3,800回以上も、それは「神の言葉」であると言い表われています。

古典的方法

古典的方法は「内的」「外的」証拠を問題にします。それは、聖書は一般的に信頼できることを知ることができるという前提に始まり、聖書は真に誤りがない、と結論します。

以下の論証が展開されます。

前提A：聖書は確実に信頼しうる文書である。

前提B：この信頼しうる文書に基づいて、私たちはイエス・キリストが神の御子であると信じるに十分な証拠を持っている。

前提C：神の御子であるイエス・キリストは誤りのない権威である。

前提D：イエス・キリストは、聖書が神の言葉そのものであることを教える。

前提E：御言葉は神から来るものであるから、神はまったく信頼しうる存在である故に、聖書はまったく信頼しうるものである。

結論：誤りのない権威としてのイエス・キリストに基づいて、クリスチャンは聖書を信頼しうる誤りのないものと信じる。

古典的方法は循環論法を用いていないことに注意して下さい。各前提には誤りうる理性的被造物による帰納法と演繹法との両方の論証が入っています。それには、前提とされる仮定や主観的な「信仰の飛躍」が含まれていません。それは、論理的推論と同時に、注意深い歴史的検証を問題にしています。私たちは歴史の日付、聖書文書、ナザレのイエスの生涯を持っています。この論議はイエス・キリストの完全性に基づいています（第3課の主題）。

19世紀のドイツ神学者、マルチン・ケーラーはこのように表現しました。「私たちは聖書を信じるが故にキリストを信じるのではない。キリストを信じるが故に聖書を信じるのである」（モンゴメリー P.247）

メソジストの創始者ジョン・ウエスレイは聖書の権威を興味深く論じました。彼は、聖書は3種類の作者のどれかによる創作であるにちがいない、すなわち善良な人間（あるいは天使）か、悪人（悪魔）か、神か、と言いました。善良な人間か天使は聖書を創作することはできなかったでしょう。なぜなら、

彼らは聖書が創作であるのに、主はこのように言われた、などと言って、書くたびにいつも嘘をいって本をつくることはしなかつたろうし、またできなかったであろうからです。悪人か悪魔も聖書を創作できなかったでしょう。なぜなら彼らは、あらゆる義務を命じ、罪を禁じ、悪行をさばいている本を書くことはできないからです。従って結論は、聖書は事実それが主張している通り、神の導きと靈感の下で書かれたにちがいないことが明らかです。

聖書を理解する方法

聖書は信頼しうる神の言葉であり、その教えは真理と直接一致するから、聖書は特別な方法で読むべきであることが結論されます。私たちは聖書を新聞やシェイクスピアや科学雑誌を読むように読んでではありません。聖書は注意深く、よく考えながら、神を礼拝する気持ちで読まなければなりません。

私たちは先入観に従って聖書を解釈したり理解しないように注意しなければなりません。私たち自身の個人的偏見を聖書理解にとり入れて、聖書を私たち自身のライフスタイルに合わせ、私たちの信じたことや以前教えられたことに合わせてしまうことはとてもたやすいことです。しかし、もしそうするならば、私たちは誤って聖書を用いることになり、その効果を破壊してしまいます。聖書が私たちに影響を及ぼし、私たちの考え方や個人のライフスタイルを左右するようにさせましょう。聖書の啓示の目的、目標は単に資料の山からは見いだせないのです。人格との出会いの中でつかむのです。人となられた神、イエス・キリストの人格は聖書に伝達されています。彼は聖書の主題に意味と深みを与えます。

新約聖書だけがイエスについて直接語っていることは確かですが、旧約聖書もキリストの来臨を語りました。このようにして、イエスは聖書を貫く「黄金

の糸」(テーマ)であり、聖書に連続性と目的を与えています。旧約と新約の関係を示した下の図を見て下さい。

〔旧 約〕	〔新 約〕
神に始まる。	キリストに始まる
モーセと預言者	キリストと使徒
内的原則を發展させる外的形式	外的形式を發展させる内的原則
旧約に包みこまれた新約	新約に開示された旧約
予型と預言	対型と成就
約束	実現
「あなたはどこにいるか」で始まる(人間——創世記3:9)	「彼はどこにいるか」で始まる(キリスト——マタイ2:2)

旧約と新約は2人の人がさおでぶどうの大きなかたまりを運ぶようなものです。前方の人(旧約)は荷をかつぎながら、ぶどうをちらっと見て進みます。後方の人(新約)は前方の人と自分たちのものであるすばらしい実を全部見えています。聖書のテーマである「あがない」は旧約聖書に示され、福音書で成就し、手紙と黙示録で適用され、完成されています。

聖書を理解する原則は、簡単に言えば3つの頭文字で要約できます。それは聖書解釈のABCと呼ぶことができるでしょう。accuracy(正確), background(背景), common sense(常識)です。

正確

人物、場所、出来事、事物、言葉は、テキストの特定の箇所内で正確に定義され、位置づけられなければなりません。語っているのはだれか、聞いているのはだれか、言われていることは何かを見つけることは大切です。あなたは、現在読んだり学んだりしている箇所に関連した重要な事柄を出来るだけ多く集

めるべきです。

背景

聖書は常に背景と文脈に照らして解釈しなければなりません。どんな聖句や箇所でも、連絡のない切り離された孤立したテキストとして解釈してはなりません。最も良い聖書の注解書は聖書であることを覚えておくに役に立ちます。これはどういうことかと言うと、しばしば1つの概念が1人の著者によって紹介され、別の著者によって拡大され、さらにもう1人の聖書記者によって完全な意味をもって説明されるということです。思想や教えが矛盾することはありませんが、聖書箇所の文脈を、それが聖書の全体とどのように関連しているかを十分知るために、理解することは大切なことです。聖句の文化的、地理的背景を考慮する必要性はどんなに強調しても強調しすぎることはありません。

常識

聖書を読む際に常識を用いるということは聖書がその言っている通りのことを意味し、ふつうは文字通りに受けとるべきことを理解するということです。しかし、高度に比喩的で詩的な言語もしばしば用いられていることを考慮に入れなければなりません。たとえば、「地の四隅」とか「地の周囲」、「神の足台」としての地は比喩的言語が用いられています。このような言葉は文字通りに理解されるべきではありません。なぜなら、そのように理解されると、聖書は私たちが球形の地球と無限の宇宙について知っていることと大きなへだたりができてしまうからです。聖書は、その主要目的を破るような進歩した科学用語を紹介するよりも、当時の人々がふつう知っている言葉、理解できる言葉を使っていることを忘れてはなりません。

私は何度も聖書を信じない人、聖書が神について言っていることを信じない人と語る機会を得ました。概して反対は真面目な気持からもちあがります。彼

らの知的な疑問と困難を扱ったあとで、私はしばしば、簡単な日常の言葉で、出合いと経験による個人的信仰を言い表わすことができました。ふつう、私が話している相手の方は、「私はこれまでもキリスト教をこんなふうにした話を聞いたことがない」とか、「私もあなたが話しているような単純な信仰と信頼を持てればよいのですが」というようなことを言って反応を表わしてくれます。おわかりのように、それは知的な論証ではありません。意志と心、感情と情緒の問題です。信仰とは本を信じるのではなく、人格との出合いです。

あなたに対する進言はこういうことです。新約聖書を通読するために必要な時間と労力を惜しまないことです。聖書研究の組織的なスケジュールを立て、それに従うようにして下さい。聖書を読みながらノートがとれるように、鉛筆と紙をそばに置きなさい。あとでもう一度見直したり、友だちと話したりするために、どんな疑問や問題でも、また洞察した点や考えたことを書きとめて下さい。聖書を読みながら、あなたが読んだ内容の深さ、意味、真理があなたの問題と生活に適用されるように、神の御霊の助けを祈り求めなさい。

あなたが注いだどんな努力も時間や労力の無駄にはなっていないのです。最初はどんなに微かな光であっても、暗やみでつまずいてばかりいるより、その光を見るほうがまさっています。あなたの見ている光に近づけば、光があなたに近づくことを知るでしょう。あなたと光が出会えば、それが出合いであり、それはこの本の目的です。使徒ヨハネはイエスについて言いました。「彼のうちに命があった。そしてその命は人の光であった」（ヨハネ1：4）。

挑戦

もし私たちが聖書を信頼できないなら、聖書が私たちに描いているイエスをいかにして知ることができるのでしょうか。神はこういう問題が起きるのを知っ

ていました。だから神は、彼の「生ける言葉」（イエス）を世に送られたばかりか、私たちのために彼の「書かれた言葉」（聖書）を真理と正確さをもって保存したのです。今日多くのことが相対的と考えられ、この世に絶対的なものが何一つとして残されていないかに見えるとき、神は信頼できる、神の子と神の言葉は信頼できるということを再び強調する必要があります。神は虚偽の絵、老人のたわごと、流行おくれの人生目標を与えません。

もしあなたがここまで学んできたなら、今語った提言のいくつかをあなたは進んで確かめてみると思います。そして、次の問題は、「どこから始めるのか」ということです。

ルイズ・カッセルズは言いました。「もしあなたが聖書を通して語っている神の声を心から聞きたいと願うなら、聖書を読むだけでなく、真剣に組織的に研究する心構えを持たなくてはなりません」（カッセルズ P.33）。

ふつうの本に対する正しいアプローチは、最初から読み始め、読み通すことです。しかしあなたは、聖書が多くの本からなっていることを思い出すでしょう。きっと創世記からではなく、新約聖書から始めれば、聖書が一番よくわかるでしょう。

ルカの福音書から始めることです。そのあとで使徒行伝を読むことです。この2冊は同じ人によって書かれたもので、1つの連続した物語となっています。福音書では、イエス・キリストの生涯を記録しています。キリストの誕生、働き、死、復活です。それは、ユダヤ人でない人によって、ユダヤ人でない聴衆のために書かれました。ルカは医者でした。そして、イエスの生涯の出来事を非常に注意深く記録した人です。彼はまた、細かい重要な点を見る目を持っていました。

使徒行伝では、ルカはイエスの復活と昇天後のキリスト教教会の始まりを記

しています。彼は、エルサレムに始まって古代ローマ帝国の果てに至る、キリスト教のインパクト（影響力）と伝播を追跡しています。彼は特に、使徒パウロの胸のおどるような旅行に注目しています。彼はパウロと一緒に広範囲にわたって旅行しました。

ルカと使徒行伝を読んだあとは、ヨハネの福音書を読むべきです。ヨハネの福音書にはイエスの奇跡も主な出来事もいくつかは出てきますが、ヨハネはイエスの行動とか生涯の出来事よりもイエスの言葉そのものを強調しています。ヨハネはおそらく、最も親しいイエスの個人的友人でしたから、彼の記事は非常に重要です。

次はパウロの手紙を読むべきです。パウロによって書かれた書巻は、宛先の個人名か、教会名がタイトルにつけられています。ロマ書、ガラテヤ書、コリント書は若い教会や新しいクリスチャンを助けて、キリスト教の信仰を当時の問題や状況に適用させるために書かれました。その結果、それらは、キリスト教のすぐれた点をいくつか選び出して私たちの信仰を文化に適用させる上で、今日大いに役立っています。

これまであげた著書を学べば、あなたはきっとイエス・キリストの教えと初代教会の生活をすべて見渡すことができるでしょう。そうすれば、新約聖書の残りは、読みたい順に読むことができるでしょう。でも、黙示録だけは最後に読んで下さい。ヨハネの福音書の記者は、黙示録の著者でもありました。これは黙示文学で、高度に比喩的文体で書かれ、何世紀にもわたって学者たちに研究と議論の材料を提供してきました。これはおもしろい読み物ですが、真っ先に読むべきものではありません。

もちろん、旧約聖書を忘れてはなりません。しかし、新約聖書を読んでから旧約聖書に入れば読み易いでしょう。詩篇から始めてはどうでしょうか。詩篇は世界最大の霊的詩集です。また、箴言もおもしろく読めるでしょう。

それから、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルといった預言書の何冊かを読んでみて下さい。そのあとで創世紀と出エジプト記へ行き、神の民の生活と出来事に神が関わったすばらしい記事をたどり始めて下さい。

このように私は聖書を読む順に従って各巻をあげてきましたが、ここにあげなかったものが重要でないというわけではありません。また、読む順序を変えてはならないということではありません。もしあなたが他のところに特別に関心をお持ちなら、そこから読み始めて下さい。聖書はすべて有益です。しかし、私たちが提案した背景を知れば、ある箇所は今まで以上に良く味わえるでしょう。

聖書研究には、人の心をつかんで、考えさせ、反省させ、行動させる何かがあります。私同様、これがあなたの発見になりますように。また、他の多くの人の発見になりますように。

引用参考書——第4課

- 1 . Cassels, Louis. *Christian Primer*. (キリスト教の初歩) Garden City, New York, USA: Doubleday and Company, Inc., 1964.
- 2 . Dodd, C. H. *The Authority of the Bible*. (聖書の権威) London, England: Nisbet and Co., Ltd., 1938.
- 3 . Free, Joseph P. *Archaeology and Bible History*. (考古学と聖書の歴史) Wheaton, Illinois, USA: VanKampen Press, 1950.
- 4 . Green, Michael, *Runaway World*. (逃走社会) London, England: Inter-Varsity Press, 1968.
- 5 . Johns, Donald F. *Proofs of Christianity*. (キリスト教の証明) Springfield, Missouri, USA: Gospel Publishing House, 1965.
- 6 . Montgomery, John Warwick, ed. *God's Inerrant Word*. (神の誤りのない言葉) Minneapolis, Minnesota, USA: Bethany Fellowship, Inc., 1974.
- 7 . Mowrer, O. Hobart. *The New Group Therapy*. (新しいグループの精神療法) Princeton, New Jersey, USA: Van Nostrand Company, Inc., 1964.
- 8 . Pache, René. *The Inspiration and Authority of Scripture*. (聖書の靈感と権威) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1969.

今後の学びのために

Henry, Carl F. H., ed. *Revelation and the Bible*. (啓示と聖書) Grand Rapids, Michigan, USA: Baker Book House, 1958.

この課の主題に大に関連性のある材料を非常に学問的に編さんしたもの。

Kuitest, H. M. *Do You Understand What You Read?* (あなたは読んでいるものを理解していますか) Grand Rapids, Michigan, USA: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1970.

最初オランダで発行されたこの本は、聖書を読み、解釈する上で有益である。

Montgomery, John Warwick, ed. *God's Inerrant Word*. (神の誤りのない言葉) Minneapolis, Minnesota, USA: Bethany Fellowship, Inc., 1974.

この本はこの課の全体に役立つ。11章はこの課の「聖書の権威」の中に要約されている。

Neil, William. *The Rediscovery of the Bible*. (聖書の再発見) London, England: Hodder and Stoughton, 1965.

1—13章が特にこの課に関連している。小さなサイズなので、手軽な参考書となっている。

Pache, René. *The Inspiration and Authority of Scripture*. (聖書の靈感と権威) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1969.

フランス人によって書かれたこの本は、実際の、学問的方法で聖書を論じている。個人的研究を一步進める上で有益である。

Tenney, Merrill C., ed. *The Bible—The Living Word of Revelation*. (聖書——生

きた啓示の言葉) Grand Rapids, Michigan, USA: Zondervan Publishing House, 1970.

10名の指導的新約学者による10章からなる本は、この課の主題に関係して役立つ。

自 習

- 1 使徒行伝 1 : 1—5 を読みなさい。イエス・キリストについて著者ルカが何を私たちに語っているか、短く書きなさい。

.....

- 2 福音記者ヨハネは、読者がイエスは神の子であると信じるために、イエスによって行なわれた「しるし」や奇跡のいくつかを記録したと言っています（ヨハネ 20 : 30, 31）。この福音書の 2, 3 のしるしを見て、それらがどのようにしてイエスの神性を信じる信仰に導いたかを書きなさい。

a)

.....

b)

.....

c)

.....

- 3 あなたは第 2 テモテ 3 : 16, 17 をよく読んでから、聖書の全体的目的について何を学びますか。

.....

.....

.....

- 4 ヘブル 1 : 1—4, 第 1 ペテロ 1 : 10—12, 第 1 ヨハネ 1 : 1—4 を読みなさい。これらの箇所を読んでから、「生きた言葉」（イエス）と「書かれた言葉」（聖書）との関係について、あなたの総体的印象を書き出しなさい。

.....

.....
.....

5 この章の最後のところであげたいいくつかの提案に従って、あなたは聖書を進んで研究しようとしていますか。もしそうなら、以下にあげた書巻の中から、あなたが読んで研究したいと思うものを3つ選んで、左枠に読みたい順に番号をつけて下さい。

..... ルカ／使徒行伝

..... ヨハネ

..... ロマ書／ガラテヤ書

..... 第1，第2コリント書

..... 詩篇

..... イザヤ／エレミヤ

..... 創世記

..... 他の書巻

自習ガイドライン

- 1 ルカの福音書はイエスが言われたこと、行なわれたことのほんの始まりにすぎません。彼は自身の生きていることを数多くの証拠で示しました。彼は40日間地上に現われました。彼は神の国について語りました。彼は聖霊の約束を何度もくり返しました。彼は弟子たちに指示を与えてから、天に昇りました（「上にあげられました」）。
- 2 以下の例を含むことができる。
 - 1) ヨハネ 2：1-11——自然要素の超自然的支配
 - 2) ヨハネ 4：7-30——人間の状況の超自然的知識
 - 3) ヨハネ 5：2-9——いやしの超自然的な能力
 - 4) ヨハネ 6：1-14——自然要素の超自然的支配
 - 5) ヨハネ 9：1-17——いやしの超自然的な能力
 - 6) ヨハネ 11：1-44——死者に命を回復させる超自然的な能力
 - 7) ヨハネ 13：21-30——人間の意図を知る超自然的な能力
- 3 それは教え、訓戒、矯正、訓練のためである。それによって神の人が完全となり備えられて弟子の生涯を歩むためである。
- 4 ヘブル 1：1-4——御子（神の像であるおかた）は神が語る究極的方法である。旧約聖書は神が語った他の方法を記録しているにもかかわらずである。
 - 第1ペテロ 1：10-12——御子は聖書の預言の成就である。
 - 第1ヨハネ 1：1-4——記録された言葉は、生きた言葉である御子との交わりに入るための手段である。

- 5 私は、まずルカ／使徒行伝，ヨハネを選び，次にロマ書／ガラテヤ書か第1，第2コリント書を選びます。

自己採点復習

- 1 聖書は深い統一感を持っている。ふつうは統一からはずれると思われる以下の項目のうち、どれが聖書に出ているでしょうか。適当な項目を○で囲みなさい。
- a) 神が息を吹き込まれた
 - b) 主題の多様性
 - c) 誇張と神話
 - d) 文体の多様性
 - e) 著者の合作
 - f) 時間と空間の広がり
 - g) 多くの著者
 - h) いくつかの言葉を用いていること

思考の刺激：あなたはきっと、編集者によって決められた中心テーマをもった詩歌集か教文集を読んだことでしょう。聖書の統一性とくらべて、この統一性をあなたはどうか考えますか。

- 2 以下のうち、どれが聖書は正確であり、困難性は実際は少ないことを確証していますか。正しい文に○をつけなさい。
- a) 歴史的な不正確
 - b) 心理学の発見
 - c) 本文批評
 - d) 考古学的発見
 - e) 表面的調査
 - f) 永続的同一性
 - g) 外見的矛盾
 - h) 原語理解の進歩

思考の刺激：あなたはホーマーの叙事詩のような作品を読む前後に、本文の問題や解釈の小さい点を調べますか。聖書だけを別に取り扱うのは公平な扱いですか。

3 聖書の権威を確立するための方法と各々に用いられた議論とを組み合わせなさい。空白に右側の項目から適当なものを選んでその番号を書きこみなさい。

- | | |
|----------------------------------|--------|
| a 聖書はそれ自体の無謬性を断言する | 1) 告白的 |
| b 聖書は信頼しうる | 2) 前提的 |
| c 私たちは聖書が神の言葉であること
を信じる | 3) 古典的 |
| d 聖書は自己証言する | |
| e イエスは聖書を神の言葉として教えた | |

思考の刺激：あなたは今、日記と手紙集を見つけたとしましょう。それらはあなたの祖父が書いたと思う場合、それをどうやって確かめますか。これらのテストのどれだけが聖書の真正性と権威を確立するのに適用できますか。

4 聖書解釈に関連した以下の活動を A（正確）、B（背景）、C（常識）で確認しなさい。空白に A、B、C のどれかを書きこみなさい。

- a) 欄外註を用いて思想をたどる
- b) 地図を用いて町の位置を定める
- c) 当時使われた言葉の意味を理解する
- d) コンコルダンス（語句辞典）を使って言葉をしらべる
- e) 聖書辞典で名前をしらべる
- f) 絵文字がいつ用いられたかを見る
- g) むずかしい聖句を註解書で調べる

..... h) 国の歴史と習慣について百科辞典を用いて情報を得る

思考の刺激：車を買うときは、メーカーのハンドブックを受けとる。もし聖書が人間生活に対する神のハンドブックであるなら、それを組織的に研究する価値がありますか。

5 どのように聖書を学ぶべきですか。最も適当と思われる方法を選び、○で囲みなさい。

- a) 1週間のうちに創世記から黙示録までを読む
- b) 組織的に知的に学ぶ
- c) 聖書にあなた自身の見解をおしつけようとする
- d) 読みながら神の助けを祈り求める
- e) 最初ルカによる書巻を読む
- f) 講義中に読む
- g) 聖書があなたの考えと生活に影響を与えるようにさせる

思考の刺激：このようにあげられた方法で聖書を読み始めることを妨げる主な障害は、どのようなものであると見ていますか。

自己採点復習解答

1 b), d), f), g), h)

2 b), c), d), f), h)

3 a 2), b 3), c 1), d 2), e 3)

4 a) B

b) A

c) C

d) AとB

e) AとB

f) C

g) BとC

h) AとB

5 b), d), e), g)

- a ある学者は、カインは彼の妹と結婚したが、当時人間の数が地上に少なかったので近親相姦は罪にならなかったと信じている（創世記4：17）。くじらに関しては、テキストは「くじら」ではなく「大いなる魚」と言っている（ヨナ書1：17）。マタイ12：40に用いられてRSV（改訳聖書）で「くじら」と訳されているギリシャ語は、「海の怪獣」と「大きな魚」という意味をもった、どちらにもとれる言葉である。今日生存しているある種のサメは人間を丸のみでできる。
- b モーレーは、イエスがパリサイ人の偽善性を非難したルカ12：1—4に言及している。大群集が聞くために集まった。その時イエスはふりむいて弟子たちに語った。これらの4つの聖句は彼らに対する彼の言葉の1部である。
- c この項の大部分は、ジョン・A・モンゴメリーの「神の誤りのない言葉」11章から要約した。
- d C・H・ドッド（1884-1973）は1901年にオックスフォードを卒業した。彼は生涯を新約聖書研究と教えに捧げた。彼は20冊以上の本を書いた。
- e モンゴメリーはケーラーの「いわゆる歴史的イエスと歴史的聖書のキリスト」から引用した。
- f たとえば、ルカ1：1—4と使徒1：1—5とを比較せよ。テオピロに対する重要な出来事の連続性に注意されたい。

第5課

キリスト教経験 は妥当か

著名な医師であり精神分析医のポール・トゥルニエ博士は、彼の『人格のいやし』という本の中で、個人的な問題を多くかかえた男性の患者のケースを語っています。その問題の中には、アルコール中毒の父、彼のためによく計画された職業、わずか結婚1年後に遭遇した彼の妻の死、再婚の葛藤、経済問題がありました。

トゥルニエ博士の検診中に、この青年はイエス・キリストの前に導かれました。彼は心を開き、非常に深い次元で彼の必要を分かち始めました。「この宗教的経験は彼の肉体的状態を目に見えるほど改善しました」とトゥルニエ博士は言っています。しかし、この経験はすぐには彼の問題のすべてを解決しませんでした。なぜならば、「宗教経験は、どんなに深くても、人生の諸問題を一度に解決するものではないからです」。数年の不確かな発展後、やっとこの男性はキリストを信じることによって家庭を築き、本当の幸福を見つけました。トゥルニエ博士はこの例に基づいた実際的な忠告をいくつか語っています。

「経験は、あたかも霊の飛躍が問題のない道徳生活と完全な肉体と精神の健康を保証するすべてであるかのように、過度に単純化したアプローチを許さない。にもかかわらず経験は、人間の肉体的、心理的状态がいかに霊の領域だけ勝ちとられる勝利に依存しているかを示している」

この同じ本のあとのほうで (P.240)、トゥルニエ博士は指摘しています。

「……宗教経験は単に幸福感の問題ではない。一度最初の熱心さが過ぎてしまうと、その経験は人間の精神的バランスに有益な実を結び、人生に具体的な結果をもたらし続ける。これらの結果が重大な欠点、和解、道徳的不規律の終結の告白を含むとき、その効果を自己暗示によってもたらされた幸福感に帰することは幼稚なこととなろう」

今日、個人的な宗教経験を単に松葉づえ、弱さのしるし、逃避の形として説

明しようとする人が多くいます。しかし、実際は真のクリスチャン経験は、それとは反対のもの、確固としたイエス・キリストへの信仰と献身をもって人生をあるがままに見つめることに導きます。イエスに対する個人的な宗教経験は、人生に新しい次元をもたらします。というのは、神と人間が意味深い相互関係に入れられるからです。この出会いは一度限りの経験ではなく、継続的な交わりの出発点です。その出会いと共に、さらに良きものに向かっての根本的な変化が始まり、そこから神の霊の力によって漸進的変革が展開していきます。私たちの問題や困難さは重要でなくなり始め、処置できるようになります。なぜなら、神は私たちの助け主であり、聖霊は私たちを力づけ、徐々にではあるが確実に私たちは、事実可能性として持っているもの、すなわち神の子になっていくからです。

学課のアウトライン

- 経験だけでは不十分
- 信仰の4段階
- 宗教的回心
- 回心の顕著な例
- 意志の人
- 挑戦
- 出会いの意味するもの

思考のための問題

1. あなたは個人的な宗教経験にどれだけ価値をおいていますか。
2. 主観的な経験は客観的な現実とどのような関係にありますか。
3. あなたは信仰の異なる段階を持つことができると考えていますか。
4. 大部分の宗教によって理解されている「宗教的回心」と、キリスト教によって理解されている「宗教的回心」との真の違いは何ですか。
5. あなたは宗教経験としての回心を自分で定義することができますか。
6. 「潜在的潜伏」という言葉は、宗教的回心について、あなたに何を意味していますか。
7. あなたは、ここで話しているような意味でクリスチャンと思われる人を、個人的に知っていますか。
8. あなたはこれまでにクリスチャンになろうと真剣に考えたことがありますか。

用語の意味

- 背教 — 宗教的信仰を捨てること
- キリスト教の回心 — キリスト教をはっきりと決定的に受け入れた結果に伴う経験
- 客観的 — 個人的反省や感情から離れた、現実の性質を強調したり表現すること
- 新生 — 再生される行為。霊的刷新。次善への根本的变化
- 主客的 — 個人的に知覚された現実に属すること。個人の精神的特徴や状態によって条件づけられる経験や知識

学課の展開

ひとりのえらい役人が2大都市の間の大通りを旅行していました。彼は、1つの許可状を持っていました。それには、クリスチャンを見つけ次第、彼らをエルサレムの権威筋に連れ戻す権限が記されています。目的地にさしかかったとき、突然、何の警告もなしに、彼は明るい光に囲まれました。その役人は地に倒れ、同伴の者たちは立ちどまりました。彼は自分の名前を呼んでいる声を聞きました。「サウロ、なぜお前は私を迫害するのか」。びっくりしたサウロは尋ねました。「主よ、あなたはどなたですか」。答えが返ってきました。「わたしはお前が迫害しているイエスである。立って、町に入りなさい。あなたのすべきことがそこで教えられるであろう」。

彼の旅の同伴者たちは、ものも言えないで立っていました。彼らは声を聞きましたが、だれも見えませんでした。サウロは、ふらふらと地面から立ち上がりました。彼は目をあけていましたが、何も見えません。彼は残された旅を人に手をとられて続けなければなりません。サウロは、この経験によって、人格の根源がゆさぶられました。3日間、彼は見ることができず、食べることも飲むこともできませんでした。気の進まない使者（彼が捕えようとしていたクリスチャンのひとり）が、神によって超自然的に啓示された教えをもって来るまで、彼はずっと祈っていました（使徒9：1—25参照）。

目が見えなくなったことと断食したことは一時的なことでしたが、ダマスコ途上でのキリストとの出会いは、彼の生涯を永遠に完全に変えました。彼の人生は、きわめて短期間にそっくり変革されました。サウロはあとで使徒パウロとして知られるようになりました。彼がキリスト教に貢献したことは、主イエス・キリストご自身を除いて、おそらくだれも彼をしのぐ人はいないでしょう。

この種の劇的な宗教経験は原則というよりも例外ですが、そのことはその経験の妥当性を決して否定するものではありません。その結果であるパウロの献身と、あとでキリストの故に耐えしのんだ苦難は、このことを証明しています。しかし、どうしてそのような変化が起きたのでしょうか。なぜなら、彼は神・人であるイエス・キリストに個人的に、劇的に出会ったからです。

もうひとりの重要な役人は、エルサレム訪問後、帰途に向かっていました。彼は真理を探求していた非常に宗教的な人物でした。彼はエルサレムで彼の問題の答えを受けられると思いました。しかし、彼は馬車を走らせながら、まゆをひそめて聖書の巻物を読んでいました。専門家が聖書を彼に解き明かすことができないのなら、彼はどのようにして理解できるのでしょうか。神はどこにいるのか。「苦難のしもべ」について彼が読んでいた預言の意味は、何も答がないのでしょうか。

彼のこうした考えを、ひとりの通行人がさえぎりました。彼は実際に問題をかかえている役人を助けようとしていました。2人はやりとりをしているうち、この男はわかりにくかった聖句への鍵をにぎっていることが明らかになりました。彼はイエス・キリスト、神の御子を知りました。役人はその見知らぬ人がイエスについての事実を語り、そのことを彼の個人的状況に関連づけるのを、注意深くまた熱心に聞きました。ここにそれらの問題に対する解答がありました。ここに真理がありました。

その役人は——私たちは彼の名前を知りません。ただ彼がエチオピア政府の役人であったことだけしかわかりません——パウロのようなイエス・キリストの幻を見るような経験をしませませんでした。しかし、彼もまたイエスとの真の出会いを経験しました。知的な理解から、彼は意志の行為に移りました。彼はイエスに対する完全な信頼の現われとして、最も身近なオアシスで洗礼を受けました。彼は、その見知らぬ人（伝道者ピリポ）から離れると、造り変えられた人物となって、喜びにあふれて家路についた、とされています。彼の知性は

満たされました。彼は人生の目的と存在理由を見いだしたのです（使徒 8：26—40^b参照）。

エチオピアの役人におけるイエスとの出会いは、劇的ではありませんでした。しかし、その結果は、パウロの場合と同じように、超自然的であり、根本的なものでした。その出会いは彼の人生を変革しました。この意味で、それは有効性をもった経験でした。それ以上でもそれ以下でもありません。

経験だけでは不十分

すべての宗教的経験が有効なのでしょうか。私は宗教経験そのものを弁護しているわけではありません。あるクリスチャンの著者は率直に言っています。「経験だけでは、キリスト教体系がよって立つ土台としてはあまりにもろい。宗教的感情はそれだけではそれ自体を証明することしかできない」（ピンコック P.69）。もし私が自分の個人的経験だけを土台として、神は存在すると断言するなら、私の断言は客観的な根拠のないものとなるでしょう。主張できることは、私はある種の経験をもったということだけでしかありません。その場合、私に起きたと私が感じていることに焦点がしぼられ、何を神が語り、行なったかという客観的実在はばかされてしまうでしょう。主観的経験の背後には、それを支持する客観的実在がなければなりません。

確かにクリスチャンは主観的経験の妥当性を信じています。キリスト教はユニークな経験で満ちていますが、私たちは経験だけに、あるいは経験のための経験に訴えることはしません。妥当性をもった宗教経験は真理に基づき、神の言葉によって支持されなければなりません。キリスト教の特異性は、聖書が示しているように、イエス・キリストの人格とわざなのです。

實用主義の哲学には多くの欠点がありますが、1つの長所もあります。「真理と見なされることは、すべて人生と経験に直接触れなければならない」(ラム P.208)。「人生と直接接触すること」は、それは人生と経験にタッチし、関連し、直結しなければならない。

私たちは今、非常に一般的な言葉で話しています。もし私が宗教経験を持ったなら、その経験は有効であるかも、ないかもしれません。経験にはあらゆる種類の経験があり、ほとんどすべての宗教は何らかの経験をあげることができます。経験からの議論は、麻薬の使用を正当化したり、魔術に加わったり、禅の価値を認めることを正当化するために用いられます。前述したように、キリスト教は、経験のために経験に訴えません。キリスト教は、そのうちに極端から自らを守るための抑制と均衡のシステムを持っています。個人的な宗教経験(主観的な性質のもの)は、聖書に書いてあることによって実証され、確認され、支持され、検査され、神によって承認されなければなりません。

宗教的経験を評価するために、どのような証拠があるのでしょうか。これには、2つの重要な質問を自問してみるとよいでしょう。まず「この主観的経験に相当する客観的実在は何か」ということです。「聖書に示されたイエス・キリスト」によって第1の質問に答えることができるなら、次に、「この同じ客観的実在に関連した同様の経験を持った人たちは、他にどれだけいるだろうか」と問うてみることで。さて、この2つの証拠を、ダマスコ途上のパウロの経験とエチオピアの役人の経験にあてはめてみましょう。

第1に、パウロの経験は何かの客観的実在と一致したでしょうか。はい、一致しました。彼にとって、その実在はイエス・キリストでした。それ以後、彼は、その日の出来事を語るとき、彼の経験と復活のキリスト、また悔い改めと従順への主の召しを関連づけました。エチオピアの役人は、幻を見ず、声も聞きませんでした。ピリポが彼に「イエスの良い知らせ」を語ったのです(使徒 8:35)。しかし、彼はこの教えを受けると、「私はイエス・キリストを神の子

と信じます」と断言して洗礼を受けさせてくれるようにたのみました（使徒 8 : 37）。彼の出会いについては、これ以外のことはわかりません。伝説によると、彼はエチオピアに帰り、イエスのメッセージを伝え、その結果、エチオピアにキリスト教会が建ったということです。

第 2 に、他の人でイエスにつながる同様の経験をした人がいますか。はい、そういう人は多くいます。これまでに記したこれらの出会いの最も重要な部分は、人生の完全な変化であったことを思い出して下さい。変えられた人生は、各々イエス・キリストの实在と力の証拠を加え、歴史のページは彼に出会った後、人生の方向が変えられた多くの人の例で満ちています。パウロの出会いに伴った肉体的現象はユニークでした。その現象はまたすべて一時的なものでした。しかし、彼の人生の変化は永遠のものでした。イエス・キリストとの個人的出会いは、そのような特異な外側の感情を伴うかもしれないし、伴わないかもしれません。エチオピア人の経験にはもっとそういうものがあるかもしれません。しかし、そうであっても、それは常に人生を変える経験です。証しからの証拠は驚くべきものがあります。私たちはそのいくつかをあとで見ることになります。

信仰の四段階

宗教的回心の具体例を論じ、そのような例を他にあげる前に、私はまず本物だと確立しようとしている回心を強調しなければなりません。米国の心理学教授であるウォルター・ハストン・クラークは、宗教的信仰は「宗教的進歩の最も微妙で重要な問題の 1 つである」と、言っています（クラーク P.219）。それは、ただ座って、それについて考え、ある程度人に受け入れられる結果に達し、そのことの上に信仰を建てる以上のことをします。理性には適切な役割がありますが、それは私たちがキリスト教について言われていることのすべてで

はありません。

表面的には、それは人が宗教的であれば、発見しやすく見えます。ちょっと聞いてみて下さい。調査員、学者、国勢調査員はこれをくり返し行なって、ほとんどの人は少なくともある程度まで神と死後の命を信じる「信者」であることを知っています。しかし、もし私たちが宗教的信仰の事柄をもっと詳しく調べてみれば、「状況はもっと複雑であることがわかります」（同 P.220）。それ故、私たちの研究にとって、クラーク博士が信仰の四段階と呼んでいるものを考察することが大切です。

第1段階：単なる言葉としての信仰

彼の最初の段階は、専門的に「刺激——応答言語」と呼ばれるもので、言語の力と使用に深く関わっている信仰です。多くの人の「信仰」はこの言語的段階のもので、宗教は単に語句であり、利他的概念を表現する方法であり、超越の象徴となります。この段階での信仰ないし宗教経験は、人生や行為にとってそれほど重要なものではありません。人はこれを持つことも捨てることもできます。どちらでも大した違いにはなりません。

第2段階：理解としての信仰

クラークが「知的理解」と名づける第2の信仰段階は、非常に一般的な機能の段階です。このカテゴリーの中に、神の存在のいろいろな証明（第2課で「指示するもの」と名づけたものを思い出して下さい）が入ります。理性と論理が主な道具です。しかし、それだけに頼るなら、不完全なものです。この種の信仰は「人生と関係がなく、少しも人生に影響を与えません」（同）。

もちろん、理性は信仰の成長に欠かせませんが、意志と感情も伴わなければなりません。聖書は、私たちは神を世における神の働きを理解することができ

るし、理解しなければならないことを強調しています。多くの御言葉は、はっきりとこのことについての神の立場を述べています。「神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知を与えられた」（Ⅰ列王記4：29）。「主が知恵を与え、御口を通して知識と英知を与えられる」（箴言2：6）。理性の働きが神に近づくと上で重要であることを示唆する聖書の励ましは、文字通り多くあります。使徒パウロは、コリント人たちに「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい」（Ⅰコリント14：20）とすすめて理性の重要性をくり返しています。

知的理解は、意志と感情から切り離されるとき、人格神に結びついて人生を変える経験を与えることができない点で弱いものです。

第3段階：行動としての信仰

この信仰の段階は、「行動の現われ」と呼ばれるもので、知的理解と行動とが一緒になったものです。クラークは言っています。「人間の行動は言葉以上に、はっきりと彼の真の信仰を現わしている」（クラーク P.233）。この種の信仰の古典的な例は、良きサマリヤ人についてイエスが語った話の中に出てきます（ルカ10：25—37）。ここには、人間の尊厳を知的に信じただけでなく、その信仰をあわれみの行動によって現わした男が登場してきます。キリスト教に関する限り、これは真の信仰に非常に近いものです。信仰から出た実践的な日常生活は、妥当性をもったクリスチャン経験の確かなしるしです。

キリスト教の信仰に関して言えば、この段階の主な問題は、それが価値ある道徳的ないし人道主義的規準を具体化している信仰であれば、それらが主イエス・キリストを信じる個人的信仰に関係していても、していなくても、どのような信仰にも有効となりうるということです。「道徳的行動がとられるときでさえ、私たちはその根底に確かな宗教的確信があることを、決して確かなもの

と感じていない」(クラーク P.223)。

第4段階：統合としての信仰

「理解力ある統合」と呼ばれる第4段階は、「理解としての信仰」と「行動としての信仰」を一緒にして、イエス・キリストの中に啓示された個人的信仰と真理への献身とに統合されたものです。前の3つの段階は部分的なものでした。1つの段階だけでは不十分です。

「言葉による確信が批判的、創造的思考によって良く理解され、全体が行動と良く統合して人間嫌いの観察者にさえも完全に納得のいくような形態をとるときのみ、信仰はまったく健全なものとなり、すぐれたものとなる」(同)。

成熟した信仰をもった人は、彼が理解している真理に立って行動し、むずかしい質問に対する答えを捜し続ける人です。彼は理想と実践とを結びつけ、理想的人物像を描いて自己の信じるべきことの首尾一貫したパターンを発展させます。オーロ・ストラंक博士が言ったように、「私たちの神学は私たちの心理学にならなければならない」のです(ストラंक, P.140)。このことは成熟した信仰、成長した信仰、事実の上に建てられた信仰を表わしています。それは、歴史を中心とした信仰であり、現実にも根ざした信仰です。その信仰は、人生に対して現実的であり、同時に、神の目的を地上と神に心を開く個人の生活の中に達成できる、神の能力に対して完全な信頼を言い表わす信仰です。これは、目に見える一時的なものを超えて、目に見えない永遠的なものに及ぶ拡大された実在概念の伴った信仰です。あなたもこの信仰の段階に進むことが、私の願いです。この信仰については、これから宗教的回心としてもっとくわしく論じなければなりません。

宗教的回心

この章で語られている宗教経験は、一般的に回心として知られています。ある心理学者は、宗教的回心を単に過渡的なものと見ています。何かを探求している人は、自己の主張よりも自己の気に入った新しい思想体系を見いだすので、その新しい思想を受け入れます。それは急激な決断であるかもしれないし、ゆるやかな決断であるかもしれません。この一般的な意味で、回心は宗教に向かうと同じぐらいやすく、宗教から離れることもありえます。背教、つまり信仰を捨てることは、受容と同程度の回心経験といえます。実際、この回心という言葉は、宗教的ではない関連性の中で適用されます。たとえば、人は右翼の政治団体から左翼のそれへ転換することができます。あるいは、ある人は徐々に、無政府と革命への献身から民主主義と平和な妥協へと態度を変えることもできます。どちらの場合も、ある種の回心経験が含まれています。

霊的回心はもっと複雑です。そこには1つの価値体系から他の価値体系への移行が存在するとはいえ、霊的回心は単に過渡的なものではありません。そして、回心は各自にとってユニークではあるが（人間はみな違いますから）、回心のプロセスの段階は認識できます。最初の2つの段階は別々にあげることが困難です。どちらも最初に起こる場合があるからです。そこで、第1、第2段階は、「不安」の期間とある心理学者が言う「潜在潜伏」期間を含むと言えましょう。

不安の期間中には、無価値感、不完全感があります。それは人生に何かが失われているという不思議な感覚です。そこには、無意味の感情、意気消沈、絶望が起こるかもしれません。潜在潜伏の期間には、精神の中に、ダイナミックな宗教的信仰にこそ人生の大問題に対する唯一の答えであると、ゆっくりではあるが確かに気づかせるようなほのかな要因が働きます。両方の場合、イエス・キリストを受け入れることは、取られなければならない論理的、必然的、

適切な段階として見なされます。

あなたは今、この段階にいるかもしれません。あなたは何かの答えを見つけようとしてこの本を読んでいることでしょうか。もしあなたが人生に神を迎え入れて神に働いてもらうなら、私がこの本を書いたからというのではなく、ここで論じられてきた項目があなたを助けるので、あなたは正しい方向に進んでいるのです。

第3の段階は、危機あるいは決断の時です。不安や潜伏の期間がどんなに長くても、あるいは短くても、「回心の出来事は究極の関心をもつ危機においてははっきりと現われるものです」（ジョンソン、P.117）。回心の出来事は、問題に対する答えと不安からの解放が個人的に受け入れられる瞬間です。それは神がいつもおられたことを思い返し、認識することです。それは未来を見つめて、神がそこにもおられることを認めることです。最後に認めることは、神は現実におられるということです。私たちは逃げるのをやめます。私たちは知的な隠れん坊のゲームをやめます。私たちは道徳的、霊的立場から逃げ出す道を合理化するのをやめます。私たちはイエス・キリストの死と復活を通して喜んで神に見いだされ、愛され、変えられるようになります。

ポール・トゥルニエは、彼のユダヤ人の友人の話をしています。彼はその友人と数か月にわたって話をしました。この友人は、霊的実在を求めていました。2人は長い間やりとりしましたが、何の結論にも達しません。ある日、その友人はトゥルニエ博士のところへ行って、彼がこれまで捜していた実在としてキリストを見いだしたと言いました。その友人はクリスチャンに会ったのです。彼はクリスチャンに「知的大食家」と言われました。この言葉で彼は、自分を非常に深くさぐるようになりました。彼は、必要なものはキリストに自己を明け渡すことだけであり、そうすればすべてが落ち着くと気づきました。トゥルニエは、友人の経験を次のように要約しました。

「彼は良心をさぐったとき突然、果てしのない宗教的論議は、どんなに興味深いものであっても、一種の禁欲にしかすぎず、回心の道を閉ざすものだ、ということがわかったのです」(トゥルニエ, P.114)。

悟って受け入れる瞬間は、人によってまちまちです。ある人々は、それに肉体的現象が伴います。偉大な英国の牧師ジョン・ウェスレー (1703-1791) は、彼の回心を「不思議に心温まる」経験として説明しました。他の人々は、心理的な現われが伴います。ある人はそのことをこのように言いました。それは「まるで命の奔流が、突如私に注ぎ込まれたようであった」と。ほとんどの人にとって、感情面に変化があります。彼らは平安を感じます。愛されていることを感じます。喜びに満たされます。これらの個人的経験は素晴らしいものですが、その経験が客観的実と一致しなければ有効ではありません。根本的な変化はそれぞれの人生に起きます。聖書は、変化に伴う特定の現われを約束していませんが、この変化そのものは約束しています。実際に起きることは「新生」ということです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(Ⅱコリント5:17)。聖書はこのことを、他の多くの言葉で言い表わしています。たとえば、生まれ変わり、神の子としての身分を与えられる、信仰による義、神との和解、新しい命の賜物、解放などです。

これらの言葉はすべて、回心の出来事は終わりであり始まりであることを示唆しています。潜在潜伏と不安は新生(出来事)に道をゆずり、新生はその次に成長と成熟に導きます。連続性は回心の最終的段階ですから、それは生涯続くものです。ある新しいクリスチャンは、回心にバラ色の残光を経験します。2,3日はすべてのものがすばらしく感じられます。しかし、宗教経験は瞬間的に問題のすべてを解決させるのではない、と言ったトゥルニエの警告を忘れてはなりません。

では、この経験にどのような良い点があるのでしょうか。第1に、クリス

チャンにとって人生は、喜びと悲しみの断片的寄せ集めではなく、統一のとれた意味をもったものになります。第2に、痛みと問題は、それらをいやし取り除く力と知恵をもった神、私たちがそれらと取りくむ際に助けを与えてくれる神と分かち合うことができます。第3に、問題があるにもかかわらず、神がおられ、生きる根拠が与えられているので、心に平安があります。第4に、イエスが共にいる友であり、クリスチャンの仲間も与えられるので、孤独でなくなります。第5に、神の言葉は、その場限りの答えではなく、首尾一貫した統合されたライフ・スタイルのための規準を与えてくれます。最後に、クリスチャンの時間の見方は永遠を視野に入れるために、逃避することなく、不可解な挫折や不正に直面することから来る緊張から解き放たれます。

私は、回心で、経験だけの宗教を話しているのではありません。そういう宗教は、あなたに起きることやあなたが感じるものが最後のな權威になります。決してそういうものではありません。経験の宗教は、それだけで神学の緊張と知的探求のチャレンジを避け、単に関心があるときだけ受け入れるような一時的な流行となってしまいます。R・A・ノックスは『熱心』という本の中で、経験だけに過度に頼り過ぎた信仰の落とし穴を雄弁に明示しました。しかし、経験を含まからという理由だけで、信仰を拒絶してはなりません。

回心の顕著な例⁹

クリスチャンの回心の妥当性に対する証拠は、あらゆる国、文化、時代の人々が同じ経験をしているということです。もう1つの証拠は、その回心は効果があるということです。クリスチャンの回心のインパクトを説明し、証明するために、無数の実際例をあげ、記録をとり出すことができます。ここに選び出した例は、異なる文化、異なる背景、異なる出発点、異なる人格を示しています。彼らの回心の構造はまちまちですが、その効果は同じです。そこにはイ

エス・キリストを中心にした新しい世界観、新しいライフ・スタイルがあります。

〇・ハレスビー教授（ノルウェー）

故ハレスビー博士は『なぜ私はクリスチャンか』という本を書きました。この本は、素朴に直接的に自己を表わした本で、逃避と疑いから堅固なキリスト教信仰に至る霊的冒険が記されています。彼は、もし人が自分の経験からクリスチャン生活を知らなかったとしたら、知的困難さが彼を直ちに懐疑的にさせる、と確信しました。

彼にとって、疑う人たちは2種類ありました。1種類は「疑いの中で生きている人が、良心の責めから身を隠すような疑い」でした。疑いの種類は、決して論理的議論によって打ち勝つことはできない、と彼は信じました。なぜなら、それは理性よりも感情に根ざしているからです。個人的経験だけがそのような懐疑者を信仰に導くことができます。彼によると、2番目の種類の懐疑者は、その疑いのゆえに痛み苦しみ、真に不確かなものに飽き飽きしているような人です。彼はこれが自分の立場だと感じました。彼は「確かなものを知りたい」ということについて知的に正直でした。彼が次のように言うとき、正直な懐疑者に彼が同情しているのが良くわかります。

「私もいろいろな疑いの状態を通過してきました。私はその昔、悩みを感じてきました。しかし、私は疑いから脱出して信仰に至る道をも知っています。その道はすべての疑う人たちに開かれているもので、私たちのどのような人間の機能、私たちの理性の力をさえ害さないものです。」

ハレスビー博士は、疑いから脱出する道を見いだしました。彼がまったく正直に真理を知りたいと願ったからです。聖書は、心から知りたいと願う者は知るようになる、と教えています。「だれでも神のみこころを行なおうと願うな

ら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります」(ヨハネ7:17)。ここで、イエスは経験を土台に個人的な確信を与えると約束しています。唯一の条件は、心から神の御心を行なおうとすることです。

これらのイエスの言葉は、疑いについて非常に大切なことを私たちに教えています。それは偉大な知的、教育的業績によるものではありません。もう一方の極端な、知識が足りないから真理はわからないのだ、と感じる慎み深さによるものでもありません。「あなたの疑いの原因はまったく別なところにあります。あなたにはある種の経験がありません。そのためにあなたは疑いと不安定の中に置かれているのです」とハレスピーは言っています。

この人の回心は使徒パウロのようにあざやかなものではなかったのですが、その回心は明確で完全なものでした。エチオピアの役人のように、彼は心から真理を知りたいと願いました。そして、この知識はひそかに、それでいて確かに彼に与えられました。彼の生涯は、彼に起きた変化を説明しました。彼が経験した回心の結果、また彼が人生の意味を見だし、問題の答えを発見した結果、彼は心から真理を求めている人を助けることができたのです。

サドー・サンダー・シング (インド)

サドー・サンダー・シングは、イエスの幻によって人生が変えられた最近の例です。かつてはクリスチャンたちを激しく迫害したインドの青年サンダー・シングは、20世紀の最も驚くべき福音の働き人のひとりになりました。

有名な家庭のシーク教徒として、サンダーは非常に宗教的でしたが、彼の宗教は彼の実在探求を満たすことができませんでした。彼の若い時代、人生は絶望に満たされていました。彼の母が病気になり、死んだことは、彼の絶望を深めました。彼は真理の啓示を待って、3日3晩部屋に閉じこもることにしまし

た。もしきまった時間にだれも来なければ、彼は特急列車の線路に身を投げようと思っていました。

何も真理の啓示がなく、3日3晩が過ぎました。死の決意の前にあと数時間しか残っていませんでした。魂の苦悩の中で、彼は叫びました。「おー、神よ、私が死ぬ前に、汝を現わしたまえ」。

その晩、彼は眠りました。眠っているときに、彼は夢を見ました。その夢の中でイエス・キリストが現われ、ヒンズー語で彼に語りかけました。「おまえは正しい道を知ろうとして祈っている。なぜその道をとらないのか。私とその道である」。その晩、サンダーはクリスチャンになりました。彼は言っています。「私はイエスの他にだれにも仕えることはできない」。

イエスと出会った瞬間から、彼は変わりました。彼の絶望は去りました。彼は人生の目的を持つようになりました。キリストに仕えたいという彼の願望から、彼を引き離すものは何もありませんでした。嘆願も、富の提供も迫害でさえも彼を引き離すことはできませんでした。彼の家族は彼を勸当し、彼を毒殺しようとしたが、彼は回復し、逃げました。彼は洗礼を受け、残りの生涯をキリストに仕え、人々を助けることにあてました。独身で神秘家であるため、彼は他のクリスチャンから変わった奇妙な人と思われました。しかし、実際は、彼は造り変えられた人であり、最悪の迫害を通して、彼はイエス・キリストの力を証しました。彼が死んだ日はわかっていません。彼を最後に見て、彼のことを聞いたのは1929年でした。その年に彼は、禁じられたチベットの国にイエスの良い知らせを伝えるために入ろうとしたのです。インド政府は1933年に、彼はおそらく死んだであろうと発表しました。彼の熱心な弟子としての生涯は、キリストによって個人生活にもたらされる、変えられた生涯の良い模範です。

ニ・トシェング（中国）

ニ・トシェングは1903年、中国で、無理矢理に結婚させられた奴隷の女のもとに生まれました。その結果、彼はとてもつらい少年時代を送りました。18歳のとき、彼はイエス・キリストの人格に直面しました。ニ・トシェングは彼をそのまま受け入れました。何か特別な方法によったのではありません。この意志の働きによって、彼は生涯まったき従順をもってキリストに従うために献身しました。彼の献身の理解は、ささげることと自己犠牲に満ちた彼の生涯に見られます。

信仰の故に受けた迫害の苦しみと投獄の逆境にもかかわらず、彼は彼の民に仕えました。彼は、もはや伝えることも教えることもできなくなると、書くことに移りました。アジア以外のクリスチャン社会では、今日ニ・トシェングをウオッチマン・ニーとして最も良く知っています。彼は霊的生活、教会、献身、他の霊的テーマについて多くの本を書きました。

彼は1972年、69歳のとき獄中で死にました。多くの苦しみに耐えたということ以外は、獄中での彼の20年間についてはほとんど知られていません。彼の好きな言葉はこういうものでした。「私は自分のためには何もほしくない。私は主のためにすべてのものがほしい」。確かにこの東洋の殉教者の生涯は、クリスチャンにとって信仰を振り立たせられるものでした。それはまったく、献身したクリスチャンがどういうものであるかを証明しています。ウオッチマン・ニーの回心には、それを確認する外側の異常なしるしは何もなかったようでしたが、変えられた生涯とあらゆる逆境に実践された高い理想は、イエス・キリストとの真の出会いの証拠です。

C・S・ルイス（英国）

C・S・ルイス（1898-1963）は、今世紀最も良く読まれているクリスチャ

ン作家のひとりです。彼は大英帝国で生まれ育ちました。彼はオックスフォード大学を卒業し、のちにオックスフォードのマグダレーン大学の特別研究員となり、ケンブリッジ大学で中世とルネッサンス文学の教授になりました。

ルイス教授は、キリスト教の信仰を最もむずかしい知的テストにかけてから初めてクリスチャンになりました。彼が彼の存在を確信するに至ったのは40歳のときでした。

『喜びのおとずれ』（1955年）は、彼の霊的自叙伝で、「1つには私がどのように無神論からキリスト教に移ったかを語るように頼まれて」書いたものでした。最初ルイスは無神論者でした。そのあとで探究の時代が続きました。彼はいろいろな宗教を調べました。神殿売春、奇怪な風習、残酷さを見ました。その結果、彼はキリスト教のような歴史的主張をもった宗教は他に1つもないと感じるところまで来ました。それでも、ルイスはまだ神を非人格的なものと考えていました。またイエス・キリストの必要と目的を見るところまでは来ていませんでした。彼は教会に出席し始めました。そういう考えは、彼には面白くないことでしたが……。まもなく彼は、もし神が本当に存在しているなら、その神は愛したり、感じたり、人に手をさしのべたりすることのできる能力をもった神にちがいないことがわかり始めました。その頃、キリストの受肉を含むキリスト教の完全なメッセージが意味をもってきました。彼はそのことをこのように言い表わしています。「あらゆる時代のこの時点においてのみ、神話は事実にならねばならなかった。肉体をとられた言葉、神にして人である。これは〈宗教〉ではない。〈哲学〉でもない。それらすべてをまとめたものであり、現実化したものである」。

彼はキリストとの出会いを、非常に個人的な言葉で説明しています。それは強烈な感情的経験でもなければ、彼が以前考えていたようなものとも違っていました。事実、彼は言っています。「私が見いだしたものは、私が求めていなかったものであった」。しかし、とにかく「最後のステップがとられて」、C・

S・ルイスはクリスチャンになりました。

後年、彼は文学批評の畑で常に卓越しており、『喜びのおとずれ』以外の多くのキリスト教「古典」を書き表わしました。キリスト教思想に関する何冊かの本の1つである彼の『キリスト教の精髓』は、第3課で推薦しておきました。彼の『悪魔の手紙』と宇宙3部作（『沈黙の惑星を離れて』『パレランドラ』『かの忌わしき砦』）は、世界的に有名です。現代の神話である『ナルニヤ物語』のような子供向けのシリーズでさえも、大人におもしろい読み物です。彼の友人であるJ・R・R・トルーキンやドロシー・L・セイヤーズと共に、ルイスは、学者であり芸術家であってもクリスチャンになれること、またこのことは彼の知性と創造的才能を破壊しないで、かえって高めることを証明しています。

ルイスは真理の誠実な探求を表わしています。彼は、神に向かっている宇宙において、誠実な探求者は真理を見いだせることを確信しました。

「私が経験で気に入っていることは、経験が正直なものだという点である。あなたは多くのまちがった道をとるかもしれない。しかし、目を見開いてい給え。そうすれば、警告のサインが現われる前に深入りするようなことを許されないだろう。あなたは自分を欺くかもしれないが、経験はあなたを欺こうとはしない。宇宙は、あなたがそれを十分にテストするたびに真理を鳴り響かせる」。

これまでのクリスチャンの回心の経験例は、ある人にとってイエス・キリストとの出会いは急激で感情的に高まるものであったが、他の人にとってはゆるやかで静かに認められたものであることを示しています。イエス・キリストのことを示されたとき、すぐ信じることのできる人がいます。決断の助けに超自然的証拠が与えられた人もいましたが、知的論証によって信仰に近づかなければならない人もいます。大切なことは、これらの人々は他の多くの人たちの代

表であり、例外なくイエス・キリストに出会って彼を見いだし、期待が充足されたということです。

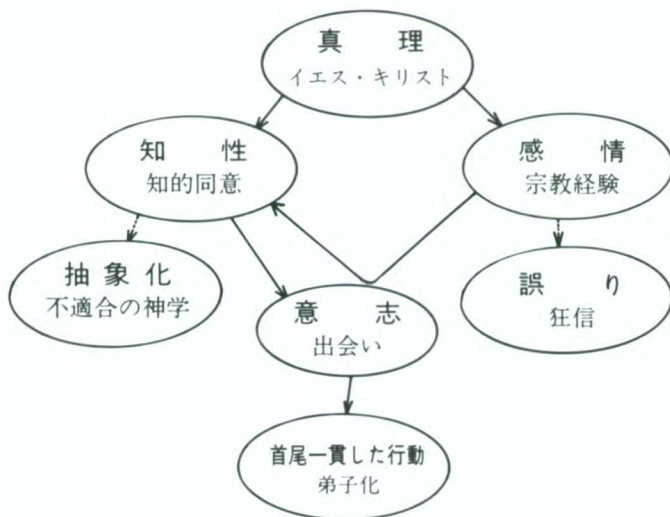
意志の人

真理の探求（ルイスが「経験」と呼ぶもの）は、究極的にイエス・キリストとの出会いに導くことを、C・S・ルイスは確信していました。私も確信しています。問題はしばしばそこに至るまでの知的不誠実です。しかし私は、このコースのこのところまであなたが来ているということは、あなたが真理を見つけ次第、真理を心から受け入れる状態にあると信じています。さらに、真理に立って心から行動する準備ができていると、私は信じています。序言で、私は3種類の人をあげました。知性の人、感情の人、意志の人です。私たちはみな、これらの特徴を私たちの中に持っています。最初の2つのタイプの欠点は、彼らが他の人たちの重要性を無視するか認めようとしないことです。知的な人は感情の有効性を受け入れず、非合理の要素が加わる宗教的経験の妥当性を受け入れようとしません。感情的な人は物事を深く考えるために自己を訓練することをしないで、理性的アプローチにがまんができないために、経験と一致する客観的実在を見いだすことができないまま、彼自身の宗教経験に達することがありません。

それでは、私が知的で献身的なクリスチャンと同一視している意志の人はどうでしょうか。彼は知的側面と感情的側面を統合し、意識的な選択によってそれを乗り越えて前進します。もし彼が本来、感情的なレベルで（パウロのように）スタートするなら、彼は彼の経験を知的探求の厳しさに従わせることができます。ピノックが言っているように、「心は理性が偽りとして拒むものを喜ぶことができない」（マクドゥエルより引用、P.3）。もし彼が知的レベルから始めるなら（エチオピアの役人のように）、彼は単なる言葉の同意を超えて進

む用意があります。その同意は、単なる知的理解として最も低い信仰のレベルです。意志の人は彼が理解した真理に立って行動します。

イエス・キリストの最初の弟子たちは、「すべての民に好意を持たれました」（使徒2：47）。彼らは首尾一貫した行動に進みました。彼らがイエスについて知ったことと、彼らが地をふるわせたペンテコステの経験で感じたことは（完全な記事は使徒2：1—42までを読んで下さい）、彼らの意志によって統合され、他の人が理解でき認識できたような外側の行動となって現われました。もしそれが純粹であるなら、回心の出会いの経験は真理と一致した、また真理からあふれたライフ・スタイルとなります。そして、真理は私たちが会おうお方その人です。下図はクリスチャンの回心と、クリスチャンが弟子化と呼んでいる首尾一貫した行動の伴った新しい生活を示すものです。



クリスチャンは感情的経験に頼る幼稚な熱心家でもなければ、現実生活と無関係な規則を言葉だけで同意する知的小人でもありません。クリスチャンはイエス・キリストに出会った人であり、キリストの要求を理解し、受け入れて、新しい違った視点を与えられた人生に歩み出した人です。クリスチャンはすべ

での答えを持っているなどとは主張しません。また、瞬間的に完全になった者でもありません。彼は解決できない問題の答えを捜し続ける人であり、神の助けによって、神に喜ばれない性格に働きかける人です。クリスチャンは理想と実際を1つにしようと努力します。また、首尾一貫した行動のパターンを発展させようとします。クリスチャンにとって、信仰と存在と行動の真理は、みな同じ客観的実在、すなわち主イエス・キリストのうちに見いだされます。統合された首尾一貫した生活は、主イエス・キリストに似る中で実現されます。

挑戦

第1課で、私はあなたにこの本の学びを最後までやりぬくように挑戦しました。あなたはやりぬいたのです。第2課と第3課では、真理を求めているあなたが助けられるために、神にその助けを祈り求めるように、またキリストがあなたに現わされるようにチャレンジしました。第4課では、新約聖書を読むようにというチャレンジでした。

さて、最後の最も大切なチャレンジが来ました。今まで以上のチャレンジです。今まではあなたの時間、あなたのプライド、あなたの過去の偏見に対するチャレンジでした。さて、私は今、あなたがイエス・キリストを受け入れるようチャレンジします。イエス・キリストにつながるよう、彼の人生を変える力に出会うよう、新しい歩みと新しい人生の方向をとる決心をするよう、あなたにチャレンジします。

しかし、決断の出会いには、そこに入る前に、その意味するところを理解することが大切です。英国聖公会の牧師、フランク・コルクホウンは、『完全なキリスト教』という有益な本を書きました。その中で彼は、クリスチャンであることは4つのことを伴う、と言っています。第1は、イエス・キリストとの人

格的出会いの経験、あるいは彼の言葉によればコミットメント（献身）です。私たちはこの課で、キリスト教のこの面をやや広範囲にあつかいました。第2は、共同体ないしは参加です。これは他のクリスチャンたちや一般の人々に入っていくことです。ここで、クリスチャンたちが地域で集まることが重要な役割を演じます。教会は、不完全であるにもかかわらず、キリストのからだです。ですから、私たちはそこに加わらなければなりません。第3は、信条ないし信仰体系です。私たちの態度や行動のためには、健全な理性的で霊的な基盤がなければなりません。教義、神学、具体的信仰個条は、私たちの経験や献身に対して心の支えを与えなければなりません。第4は、行為もしくは倫理です。私たちはクリスチャンとして新しい主人に仕えます。私たちは彼に対して道徳的で霊的な責任があります。真面目なクリスチャンは、信仰の告白と矛盾しない特定のライフ・スタイル、道徳パターン、行動様式を持っています。

こうして、＜トータル（完全な）＞クリスチャンになるためには、コミットメント（個人的宗教経験）と共同体（教会加入）と信条（聖書と私たちの知性を用いることに基づいた信仰体系）と行為（人生の倫理）が必要です。このような信仰はなま易しいものではありませんが、まちががなく最善の道です。それは個人的であって社会的です。経験的であって理性的です。それは私たちの存在の全領域に与えられます。

どのようにしてイエス・キリストを受け入れるのでしょうか。どうしたら彼に出会うことができるのでしょうか。どのようにして回心の経験を持ち、調和のとれた首尾一貫した生活を送ることができるのでしょうか。これは秘策ではありませんが、あなたが神に向かって進み出すことのできるいくつかの示唆です。聖書はあなたに保証しています。あなたが神の方向に進みさえすれば、神は今すぐにもあなたに会おうとしておられることを。「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう。わたしはあなたがたに見つけれられる。——主の御告げ」（エレミヤ29：13、14）。

神に向かうステップ

1. 自分には心の調和と平安を得る能力がないことを認める。あなたは神の律法を破ったこと、あなたは罪人であって助けを必要としており、願っていることを認める（ローマ3：23）。
2. イエスが「道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14：6）こと、従ってイエスはあなたを助け、平安を与えることのできる唯一のお方であることを認める。また、イエスの生涯と死と復活は、あなたがゆるしと新生を受けるための唯一の手段であることを知る（使徒4：12）。
3. イエスに来てもらって、きよめられ、ゆるされ、変えられ、新しい命を与えられて新しくされることを求める（Ⅱコリント5：17）。
4. あなたの意志を働かせることによって、あなたの全生涯をイエス・キリストにささげ、あなたの人生を今まで考えてもみなかったほど美しいものにしてもらうように助けてもらう。イエスに従うことを決心する。それは、あらゆることにおいて彼に喜んで従い、彼を第1にすることを意味している。
5. 祈りによる約束、聖書を読み、礼拝の場所を見いだすことによって約束を実行する。献身をつらぬき、聖書に従って洗礼を受け、主の晩さんにおいて他の献身的なクリスチャンの仲間に入る。
6. 最後に、効果的なクリスチャンを目標としてⅡペテロ1：5—8の教えに従って、イエス・キリストにある新しい人として成長し続ける。

出会いの意味するところ

もしあなたが、これらのステップをゆっくりと、誠実に、慎重にふんで行くなら、神の聖霊はそれらをあなたの個人的な経験の中で、現実的で重要なものとしてくれるでしょう。

もしあなたが人生にイエス・キリストを受け入れる選択をしたなら、その新しい信仰の道を歩み続けるようおすすめします。以前、私は大学生のために聖書研究を指導していたことがあります。講義の最中に、ひとりの女子学生が手をあげて私に個人的な質問をしました。それは彼女が単なる「教養的クリスチャン」ではなく、献身的なクリスチャンになることを決心した数週間前のことでした。さて彼女は、新しい決心の結果、ある疑問と問題にぶつかりました。彼女の質問はこうでした。「あなたは聖書や、イエスや、キリスト教について、今まで疑いや問題を感じたことはありませんか」。

私は即座に答えました。「はい、もちろんありますとも。でも私はクリスチャンとして、外側に立つ人の視点でなく、内側に立つ人の視点で問題に近づきます。私は絶対、聖霊を確信しています。イエスは、聖霊は私たちをあらゆる真理に導かれると言われたが、聖霊はその約束を現わしてくださることを確信しています。私は自分もっている問題が全部解決するのを待って信仰を持つとは思いません。クリスチャンにとって、信仰が最初に来て、理解はいつもそのあとからついてくるものです」。

神学校の教授がこう言ったことがあります。「適切な質問は半分解決された問題だ」。文字通り、これはほんとうのことです。私たちは適切な質問をする必要があります。このコースは問題を提出し（少なくともいくつかの問題を）、あなたに正しい方向を指し示そうとしてきました。

私は自分の経験から、クリスチャンには喜びがあるとあなたに言うことができます。それは単に、週末の旅行ではありません。それは一生の旅路です。それは小説を読むようなものではありません。事実を経験することです。それは退屈な世界にただ存在しているだけというものではありません。それは爽快な山登りです。それは世の中から逃避して幻想の世界に入ることはありません。人生を直視することです。スタジアムにすわることはありません。競技場に入って行って参加することです。このような人生は、出会いへの招きを受

け入れるあなたのためにあるのです。

注意：このコース中の指示に従ってスチューデント・インタラクションを完成することを忘れないで下さい。インタラクションAはコースの内容を復習するためのガイドです。自己採点復習の内容に特に注意して、試験のため備えて下さい。インタラクションAを完成させたら、指示通りに郵送して下さい。

あなたはコースを完了しましたから、インタラクションBでのあなたの見解は、特に価値あるものとなります。正直に最後まで空白に書きこんで下さい。それによって私たちは、あなたが何を必要としているかを知って、補助的な参考書であなたを助けることができるようになるでしょう。

インタラクションCは、イエス・キリストとの出会いにおけるあなたの立場を記録したり、個人的なコンタクトを依頼することへの招きであることを思い出すでしょう。強制的ではありませんが、インタラクションCへのあなたの応答を心から待っています。

引用参考書——第5課

- 1 . Clark, Walter Houston, *The Psychology of Religion*. (宗教の心理学) New York, New York, USA: The Macmillan, Company, 1958.
- 2 . Colquhoun, Frank. *Total Christianity*. (完全なキリスト教) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1965.
- 3 . Davery, Cyril J. *Sadhu Sundar Singh*. (サドー・サンダー・シング) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1963.
- 4 . Hallesby, O. *Why I Am a Christian*. (私はクリスチャン) London, England: Inter-Varsity Press, 1968.
- 5 . Johnson, Paul E. *Psychology of Religion*. (宗教の心理学) New York, New York, USA: Abingdon Press, 1959.
- 6 . Kinnear, Angus I. *Against the Tide*. (潮流に抗して) Eastbourne, England: Victory Press, 1973.
- 7 . Knox, R. A. *Enthusiasm: A Chapter in the History of Religion*. (熱心：宗教史の1章) Oxford, England: Clarendon Press, 1973.
- 8 . Lewis, C. S. *Surprised by Joy*. (喜びのおとずれ) London, England: Collins Fontana Books, 1973.
- 9 . MacDowell, Josh. *Evidence That Demands a Verdict*. (判決を要求する証拠) San Bernadino, California, USA: Campus Crusade for Christ, Inc.,

1972.

10. Pinnock, Clark. *Set Forth Your Case*. (あなたの事例について) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1973.
11. Ramm, Bernard. *Protestant Christian Evidences*. (プロテスタント・キリスト教の証明) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1966.
12. Strunk, Orlo. *The Choice Called Atheism*. (無神論の選択) Nashville, Tennessee, USA: Abingdon Press, 1968.
13. Tournier, Paul. *The Meaning of Persons*. (人格の意味) New York, New York, USA: Harper and Row, Publishers, 1965.

今後の学びのために

Allport, Gordon W. *The Individual and His Religion*. (個人と宗教) New York, New York, USA: The Macmillan Company, 1960 (paperback edition).

宗教の心理学的解釈として、この本全体が有益。特に5章、6章は疑いと信仰の性質についてすぐれている。

Baillie, John. *Invitation to Pilgrimage*. (旅路への招き) London, England: Penguin Books, 1960.

この本の対象は「クリスチャン不可知論者」、すなわち、名前だけはクリスチャンであるが、信仰とか経験においてはクリスチャンでない人である。著者はこのような人に対して、はっきりではあるが同情をもって語っている。

Colquhoun, Frank. *Total Christianity*. (完全なキリスト教) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1965.

英国教会の牧師がクリスチャンとは何かを力強く書いたもの。新しいクリスチャンとクリスチャン生活に必要なことを知りたいと願っている人に安心して推薦できる。

Davery, Cyril J. *Sadhu Sundar Singh*. (サドー・サンダー・シング) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1963.

偉大なインドのクリスチャン神秘家の自伝で、その生涯の概要はこの課にあげておいた。

Edman, V. Raymond, editor. *Crisis Experiences*. (危機の経験) Minneapolis, Minnesota, USA: Dimension Books, Bethany Fellowship, Inc., no date.

この96ページの本は、主にアメリカと英国の9人の著名なクリスチャンの生涯の経験を詳しく語っている。雑誌記事のシリーズから再版したもの。

Hallesby, O. *Why I Am a Christian*. (私はクリスチャン) London, England: Inter-Varsity Press, 1968.

このすぐれた本の中で、ハレスビー教授は、キリスト教に対する反対や疑いに対して、彼自身の生涯の例から答えている。

Kinnear, Angus, I. *Against the Tide*. (潮流に抗して) Eastbourne, England: Victory Press, 1973.

これはウオッチマン・ニーの感動的な物語である。注意深く調べて良く書かれた、すぐれた自伝である。

Kitwood, T. M. *What Is Human?* (人間とは何か) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.

著者は人間の3つの見方を論ずる。ヒューマニスト、实在主義、クリスチャンである。「完全なキリスト教信仰の道を見いだしていない」人に、最初の2つの哲学を簡潔に評論して書いている。

Lewis, C. S. *Surprised by Joy*. (喜びのおとずれ) London, England: Collins Fontana Books, 1973.

今世紀最大の創造者、刺激的クリスチャン作家のひとりの自伝。霊的意味を探究した道をたどって、いかにその意味をイエス・キリストのうちに見いだしたかを示そうとしたもの。ルイスの本はどれも読む価値がある。

Little, Paul E. *Know Why You Believe*. (なぜ信じているかを知りなさい) Downers Grove, Illinois, USA: Inter-Varsity Press, 1971.

すぐれた本である。特に12章はここで論じられた主題に関連する。「キリスト教経験は妥当か」という題はこの章からのもの。

自 習

- 1 以下の聖書を読みなさい。ロマ書 3：21—23, 6：23, 10：8—13, ヨハネ 1：12, 第1ヨハネ 1：9, これらの聖句に基づいて, クリスチャンの回心を考える際に重要な以下の各言葉について, 簡単に説明しなさい。

罪

告白

信仰

神の子

- 2 この課で話した「潜在潜伏」の概念を考えなさい。あなたの生涯に起こったことで, キリスト教とこのコースを考える上で影響力を与えた事柄をいくつかあげることができますか。

.....

- 3 私が説明したような生き方をしたクリスチャンの例を知っていますか。もし知っていれば, あなたのために彼らの信仰の生涯の主な特徴をあげなさい。

.....

- 4 もしあなたが今クリスチャンになりたいと思うなら、なれます。イエス・キリストに願って、あなたが犯したあらゆる悪い行ないを許していただき、神に受け入れていただきさえすればよいのです。友だちに話すように祈って下さい。もうそのように話しているでしょう。なぜあなたはキリストを受け入れたか、その理由を下に書いて下さい。

.....

.....

.....

- 5 悔い改めと告白の祈りを始めるのに助けが必要なら、以下の例を用いて、そのあとに自分の言葉で祈って下さい。

「主イエスさま、私はあなたが必要です。私の生涯と未来をあなたにささげたいと願っています。私の悪い行ないと欠点のすべてを許して、私の人生をきれいにして下さい。私を神の子として、あなたの栄光のために毎日生きることができるよう助けて下さい。あなたを私の人生の主として迎え入れ、私の存在の中心とします。聖霊を送って、私を導き、力づけ、強めて下さい。イエスさまの御名によって祈ります。アーメン」。

祈ったあとどういう気持ちでしたか、この祈りがあなたの人生にどのような効果をもたらそうとを感じるかを書いて下さい。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

自習のガイドライン

- 1 罪——すべての人は罪を犯した。罪の結果は死である。罪は赦される。

告白——もし私たちが罪を告白するなら（認めて悔いるなら）、イエスは私たちを赦して下さる。もし私たちがイエス・キリストを告白するなら（言葉の2番目の意味である、認め宣言するなら）、私たちは罪の結果から救われる。

信仰——信仰は心（意志）の問題であり、神の前に恥と罪を感じさせないで立たせ、私たちを神の前ですべて平等とし、さらに神に似る者（神の子として）となる力を受けるための手段となる。

神の子——神の子となることは、イエスを主と受け入れ、彼を彼が言われたお方として信じることによって実現する。しかし、それはまた、1つの過程であって、それによって神の力が私たちを神の像に変化させ、私たちは「神の家族として似る者」となる。

- 2 あなたの答え。あなたの個人的な必要（友だち、人生の方向、赦しなど）と、知的で献身的なクリスチャンとの接触をはっきりあなたに示した出来事にふれること。
- 3 あなたの答え。多分そういうクリスチャンは、関心、首尾一貫性、献身といった特質を示すであろう。
- 4 あなたの答え。今あなたは赦しの必要を覚え、この必要を満たすのはキリストの力だけであることを知っているでしょう。おそらくあなたは、無意味な人生にあきて、イエスが与えてくれる新しい命と目的を望んでいるでしょ

う。おそらくあなたは、自分が真理を求めてきたので神はご自身を自分にだんだん示しておられることに気がついているでしょう。

5 あなたの答え。

自己採点復習質問

1 エチオピアの役人とサウロの回心経験を学んだあと（使徒8,9章）、出来事と人物を組み合わせ、年代順に番号をふって下さい。例——x—1, y—1, y—2……

- | | | | |
|---------|----------------------|----|--------|
| a | いやされて洗礼を受けた | x) | エチオピア人 |
| b | 幻の中でイエス・キリストと出会った | y) | サウロ |
| c | 信仰の証拠に洗礼を受けた | | |
| d | 神を喜ばせるためにクリスチャンを迫害した | | |
| e | クリスチャンからの説明を受け入れた | | |
| f | 光を見, 声を聞いた | | |
| g | 聖書でイエス・キリストに出会った | | |
| h | イエスを神の子と信じる信仰を宣言した | | |
| i | イエスに従順に従った | | |
| j | 真理を求めて聖書を調べた | | |

思考の刺激：あなたは、ここで見られる出会いと応答の基本的要素を、友情が芽ばえることの中に見ることができますか。今までひとりぼっちであったのが、だれかに会い、引きつけられていったなど。あなたにとってパターンがありますか。あなたはこれをイエス・キリストとの関係に関連づけることができますか。

2 クリスチャンの回心は各人にとってユニークな経験である。以下の項目の中で、回心した者に特別な、あるいは異常な要素は何か。また、普通の要素は何か。異常なものにはNを、普通のものにはUを書き入れなさい。

- a 幻を見る
 b 潜在潜伏

- c 不安な時期
- d 霊的実在の探求
- e 泣くことと体をふるわせること
- f イエス・キリストの必要を認める
- g 生命の激流を感じる
- h 不思議と心温まる
- i キリストから新しい命を受け入れる
- j 新生経験をすること
- k 瞬間的に麻薬から解放される
- l 以後イエスに従うことを決心する

思考の刺激：クリスチャンの回心とあなたのこれまでの激しい個人的経験とどう違うのでしょうか。それらの違いをあなたはどのように考えますか。

3 回心の例にとりあげられた人たちには、生涯いくつかの特徴がある。該当する人名を空白に書き入れなさい。だれもあてはまらない場合は×、すべての人にあてはまる場合は○を書きなさい。

- | | |
|---------------------|--------------|
| a 知的疑い | 1) オー・ハレスピー |
| b 神を必死に求める | 2) サンダー・シング |
| c 知的ごう慢 | 3) ウオッチマン・ニー |
| d 献身と奉仕 | 4) C・S・ルイス |
| e 真理への心からの願望 | |
| f 迫害化の忍耐 | |
| g 新しい目的 | |
| h 実行に移された高い理想 | |
| i 人生への逃避 | |
| j 顕著な学問 | |

思考の刺激：あなたの人生に目立つ特徴を考えなさい。どのような否定的性質をあなたは克服したいですか。どのような肯定的性質をのばしたいですか。

4 信仰の種類とそれにふさわしい信仰のレベルを表わす専門用語と、その定義を組み合わせなさい。用語と定義の番号を書きなさい。

- a + 言葉としての信仰
- b + 理解としての信仰
- c + 行動としての信仰
- d + 統合としての信仰

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1) 行動の現われ | 5) 首尾一貫した態度に実行される言葉に |
| 2) 理解の伴う統治 | 表わされた理解の伴う確信 |
| 3) 知的理解 | 6) ライフ・スタイルから分離された言葉 |
| 4) 刺激と反応の言語表現 | 7) 行動に示された理解 |
| | 8) 行動と分離した理性的信仰 |

思考の刺激：いろいろな時、いろいろな物事に対して、私たちはみな信仰の異なる段階を持っている。あなたの生涯に現われた各段階を見て、あなたが過ごした時間量とあなたが持った信仰の段階との間に相関関係があるかどうか自問してみてください。

5 意志の人の概念と一致する項目を○で囲みなさい。

- a) 感情的経験を求める
- b) 真理の出会いを求める
- c) 感情的経験を知的探求に服従させる
- d) 感じて理解した真理に立って行動する
- e) 感情の伴った経験を拒絶する
- f) 信仰と経験を調和した行動の中で1つにしたいと思う

- g) 宗教への理性的アプローチにがまんできない
- h) 感情の有効性を受け入れる
- i) すべての答えを持っていると主張する
- j) イエス・キリストにつながることを選ぶ

思考の刺激：人間の精神の中で、知性と感情と意志ははっきりと分けることがむずかしい。しかし、あなた自身本来「知性の人」か「感情の人」か、また「意志の人」になる準備があるか考えてみなさい。

自己採点復習解答

1 a y-5	3 a 1), 4)
b y-3	b 2)
c x-5	c ×
d y-1	d ○
e x-2	e 1), 2), 4)
f y-2	f 2), 3)
g x-3	g ○
h x-4	h 3)
i y-4	i ×
j x-1	j 1), 4)
2 a N	4 a 4) + 6)
b U	b 3) + 8)
c U	c 1) + 7)
d U	d 2) + 5)
e N	
f U	5 b), c), d), f), h), j)
g N	
h N	
i U	
j U	
k N	
l U	

- a 聖書は個人に与えられた名前を重要視している。「聖書において、名前は一般的に人格と彼の立場、彼に影響を与えたある状況と、彼が抱いた希望等を表わしていた。従って、『名前』はしばしばその人自身を意味するためにつけられた」(国際標準聖書辞典、「名前」の項)。ある状況や神との出会いにおいて、人間が根本的に変わるとき、彼は新しい名前をつけるか受けることは異常なことではなかった。聖書にはこの例が多くある。第3課でイエスがシモンの名前をペテロに変えたことを思い出すでしょう。
- 現代の心理学者の一致した見解によると、名前は自己の象徴となっており、気に入った名前は自信と自尊心を奮い立たせるが、めずらしい、恥ずかしくなるような奇妙な名前は、自己評価に関して心理的問題を助長する。
- b この記事が使徒パウロの記事の直前に置かれていることに注意せよ。このように、使徒の働きでは、2つの非常にはっきりとした、しかも非常に違った回心経験が並んで存在している。
- c パウロの回心経験はすでに引用した。しかし、彼はクリスチャンとして捕われた後の弁護の一部として、再び彼の経験を語った。使徒22：1—21と26：1—23を見て、9：1—25と比較すれば、パウロとイエスとの出会いと、その出会いが彼の生涯に及ぼした結果の全体像がわかるであろう。
- d クラークは「信仰」をイエス・キリストとの出会いに関して、私が「宗教経験」について話したときと同じ意味で用いている。今は非常に短く、イエス・キリストを信じる信仰の宗教経験を説明するのに、私は「回心」という言葉を使います。この回心がクリスチャンになる前提である。
- e これらの4つの段階は、クラークの本のP.220—224に論じられている。私の彼の基本線を用いて、主に信仰の心理的側面を問題にしたのだが、その基本線に私自身の考えを補足している。
- f 第1課の真理をテストする規準を覚えているだろうか。第1課の「統合された首尾一貫性」のところを見返すとよいでしょう。
- g 以下の各証しは自叙伝(ハレスピー、ルイス)か伝記(サンダー・シング、ウォッチマン・ニー)からとっている。どれも、1つの資料からとられたもので、それは最後の「引用された参考書」にあげてある。ページの引用は省略した。

出会いへの挑戦

1985年12月25日 第1版発行©

著者 ジェリー・サンディッジ
翻訳者 菊山和夫
発行所 国際聖書通信学院
〒170 東京都豊島区駒込3-15-20
印刷所 新生運動
〒352 埼玉県新座市石神1-9-34

落丁・乱丁の際はお取り替えいたします。

出会いへの挑戦

スチューデント
インタラクション

国際聖書通信学院

スチューデント・インタラクションA

1 右側の項目とそれに最もふさわしい真理の基準を組み合わせなさい。空白に適当な項目の番号を書き入れなさい。

- | | |
|-----------------|---------------------------------|
| ㉑感情 | 1) 実践的であるが、しばしば一般化しすぎる。 |
| ㉒本能 | 2) 安定した影響力をもつが、源泉や伝達に信頼しすぎる。 |
| ㉓実用主義 | 3) 主観的すぎるが、人間の人格の重要な一部である。 |
| ㉔感覚知覚 | 4) 事実に関連しているが結合と一致を示す。 |
| ㉕組織的首尾一貫性 | 5) 真理の源を経験するが、時として不完全であり不正確である。 |
| ㉖伝統 | 6) 力強いが条件づけによって変更される。 |

2 私たちは真理をすべて知ることはできなくても、真理を定義することはできる。クリスチャンが見た真理とは何か。

.....

.....

.....

3 神の存在の論議とその定義と公式化を、右項の番号を書きこむことで組み合わせなさい。

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| ㉑..... + 価値論的 | 1) ^{デザイン} 意匠からの論議 |
| ㉒..... + 宇宙論的 | 2) 第一原因からの論議 |
| ㉓..... + 本体論的 | 3) 神概念からの論議 |
| ㉔..... + 目的論的 | 4) 価値からの論議 |
| | 5) アンセルムス |
| | 6) アクイナス |
| | 7) カント |

- 4 問題3であげた論議は「科学的知識」として取り扱われているが、それらは神の存在を証明することはできない。これらの論議の短所は何か。またキリスト教によると、どのようにして私たちは神の存在を知ることができるようになるか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

- 5 以下の文の中で、イエス・キリストは神の子であるという事実を証明しているものはどれか。証明しているものに○をつけなさい。

- a) 弟子たちはメシヤとなる誰かを必要としていた。
- b) イエスの生涯と死と復活は、細かい点まで預言と一致する。
- c) イエス自身の主張は彼の品性によって支持される。
- d) イエスは神を「父」と呼んだ。
- e) 弟子たちは倫理的に復活をねつ造することができなかった。
- f) 神のみ子であるというイエスの主張は、宗教的指導者によって承認された。
- g) 500人の証人は彼の復活をあかしすることができた。
- h) イエスは彼自身の死と復活を預言した。
- i) イエスの死体は二度と発見されなかった。墓は空であった。
- j) イエスは神の承認。

- 6 人々はしばしば、事実そうでないことによってクリスチャンを判断する。クリスチャンの弟子であることは何を意味するかを書き出しなさい。

.....

.....

.....

 7 ある意味で聖書は他の文学作品と同じであり、他の意味で聖書は人間に対する神の啓示であるが故に他の文学とは違う。聖書を文学として知的に研究するために推薦できるアプローチは、以下のうちのどれか（Aと書きなさい）。聖書を神の言葉として読むためのアプローチはどれか（Bと書きなさい）。絶対推薦できないアプローチはどれか（Xと書きなさい）。

- ①創世記1章と黙示録22章を読んで、あとは想像する。
- ②組織的に、理解しながら読む。
- ③問題を感じる時は百科辞典と辞書を使う。
- ④ルカと使徒の働きを最初に読む。
- ⑤神の助けを祈り求めながら読む。
- ⑥新約に照らして旧約を理解する。
- ⑦あなたの見解をみことばに押しつける。
- ⑧著者が用いた意味で言葉を理解する。
- ⑨注解書は読むが、みことばは読まない。
- ⑩読む前にむずかしいみことばと取り組む。
- ⑪聖書のメッセージによって人生を変えていく。
- ⑫文字通りの言葉と比喩的な言葉を区別する。
- ⑬何か分からないことがあれば祈る。
- ⑭神が自分に何を言っているかを知るために読む。

8 誤りのない権威として聖書を論証するために用いられる論拠をあげなさい。論拠を列挙して、最善と思われるものにアンダーラインを引きなさい。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

9 これは若いベルギー婦人の回心経験である。注意深く読んで、あとの問題を解きなさい。

- 1) 彼女は機械的に教会に通っていた名目上のクリスチャンであった。
- 2) 学生である彼女は唯物的哲学を受け入れ、教会に行くのをやめた。
- 3) 彼女は催眠術と降神術に凝った。
- 4) 彼女は家庭問題から自殺しかけた。
- 5) 彼女は教養のある献身的クリスチャンである外国の学生に出会った。
- 6) 彼女は不注意な行動に対する学生の弁明に興味を覚えた。
- 7) 彼女はキリストについての学生のあかしを論理的議論をもって論破した。
- 8) その学生とコンタクトを持ち続けながら、彼女は聖書を読むようにという彼のすすめを無視した。
- 9) 7か月後、彼女は突然、自然の美しさの啓示を受けた。
- 10) それと共に、彼女は福音書をととても読みたくなった。
- 11) 彼女は福音書を理解せずに一気に読んだ。
- 12) 聖書はおもしろくないと思ったが、彼女は読み続けようと思った。
- 13) 彼女はさらに多くの教養ある献身的クリスチャンに出会った。彼らは彼女に、彼らが持っている平安と満足感を印象づけた。
- 14) 彼女は人生には意味があり、問題は解決されることを知った。
- 15) 自然の中に神の宗教的経験を持ち、出会ったクリスチャンたちと同じこと

をすることで、彼女は自分がクリスチャンであると思った。

- 16) 彼女は、人生が変わる新生体験をしていないので、自分がクリスチャンでないことを知った。
- 17) 彼女はイエス・キリストの必要性を感じ、理解して、意志の行為をもって意識的にキリストにまかせることを決心した。
- 18) 彼女は小冊子を読んだ。そこにはクリスチャンになるための段階が記されており、彼女はその教えに従った。
- 19) 外側に回心のあらわれが見られなかったとき、彼女は疑いを持ったが、その疑いを意識的にはらいのけようとした。
- 20) 彼女は手引を用いて聖書をゆっくり読み始めた。
- 21) 聖書と研究の手引によって、彼女の問題は解決され始めた。
- 22) 彼女は大学の聖書研究会のクリスチャンたちとコンタクトを持った。
- 23) 聖書を読むことで、彼女は洗礼を受けて他の献身的クリスチャンたちと共に主の晩さんにあずかる必要性を確信した。
- 24) 彼女は以前の劣等感に代えて、自分が価値ある存在であるという新しい感覚を持った。
- 25) 彼女は家庭問題を受け入れることを学び、その中で確かな関係を築いていった。
- 26) 彼女は満足のいく仕事を見つけ、安定したクリスチャンのライフスタイルを育てるために、すべてを神に明け渡している。

これまでの項目の中で、クリスチャンの回心のどういう面がはっきり示されていると思いますか。空欄に、ふさわしいと思われる番号を書き入れなさい。

- ①不安の時期
- ②潜在的潜伏
- ③真理への探究
- ④回心の出来事
- ⑤連続性

今までの項目の中で、どれが以下の文の真実性をはっきりと示していると思いますか。再び、ふさわしい番号を空欄に書き入れなさい。

- ⑥ 宗教経験はイエス・キリストの客観的現実性に関係しなければなら
ない。
- ⑦ 多くの人の信仰は言葉だけのレベルにとどまっている。
- ⑧ 信仰が知的に意識的に行動に変化するとき、回心が実現する。
- ⑨ クリスマンになることは、自動的に全ての問題がなくなることを意味
しない。それは希望があることを意味している。
- ⑩ クリスマンにとって、信仰が最初に来て、理解は常にそのあとに続
く。

名前 _____

住所 _____

電話 _____

所属教会 _____

スチューデント・インタラクションB

どんな意見でもかまいませんから、このコースについての意見を書いて下さい。このコースを全部修了してもしなくても、あなたが学びをやめたところで、以下の項目にできるだけ十分に答えて下さい。

全体的に、私はこのコースを次のように考えます。

具体的には、

第1課

第2課

第3課

第4課

第5課

自習と自己採点復習

..... 私はこのコースを全部学びました。

..... 私は第 課後から学ぶのをやめました。

キ
リ
ト
リ
線

その理由

.....

.....

提言：私はこのコースが以下の点についてもっとふれてくれることを望みます。
.....

.....

.....

私は次のようなテーマでなら興味をもって学んだでしょう。
.....

.....

.....

名前 _____

住所 _____

電話 _____

所属教会 _____

スチューデント・インタラクションC

いつでもこのシートに書いて ICI 事務所まで郵送して下さい。

これは絶対書かなくてはいけないシートではありません。ただあなたの個人的な立場を正直に言える個所の空白にレ印をつけさえすればよいのです。これはあなたが決めること、あなたの意志の知的行為です。

ステートメント

- 私は聖書の中のイエス・キリストについて読んだ。
- 神のみ子であり、「道であり、真理であり、命である」というイエスのユニークな主張を理解した。
- 私はイエスが約束している新しい命を必要としていることに気づいた。
- 私はキリストに過去の私をゆるしてくれるように、そして新しい命を与えてくれるように祈り求めた。
- 私は自分の意志で全生涯をイエス・キリストにささげることがきめた。
- 私はイエス・キリストの弟子になる決心をした。

ステートメント

- 私はクリスチャンであることの意味をもっと知りたい。
- 私は自分の知的な悩みをだれかに話したい。
- 私はこのシートの裏に書いた問題の解答がほしい。
- 私はどこに行ったら熱心なクリスチャンに会えるかを知りたい。

名前 _____

住所 _____

電話 _____ 所属教会 _____

思慮深い人が、イエス・キリストのみことばと真剣に取り組まないで、彼を否定することができるでしょうか。



このコースでは、神の存在、人としてのキリスト、聖書といった真理の本質を調べることによって、イエス・キリストと知的な出会いをするための土台づくりを目的としています。

